春過瀟湘渡。眞看八景圖。雲藏嶽麓寺。江入洞庭湖。晴日花爭發。豐年酒易酤。長沙十萬戸。游女似京都。

登嶽麓詩　明　王守仁

客行長沙道。山川轉綢繆。西探指嶽麓。淩晨渡湘流。蹤岡復涉險。弔古還尋幽。林密有餘彩。昔賢此藏修。我來實仰止。匪獨事盤游。衡雲開曉星。洞野浮春洲。懷我二三友。伐木增雕憂。何當此來聚。道義日相求。

望嶽麓詩　同　楊基

我爲長沙客。不醉長沙酒。爲愛嶽麓山。繫舟城邊柳。峯巒一何秀。喬沐春雨後。蛾綠淨洗妝。方知朱鉛醜。所嗟山中寺。頹廢想已久。嶙峋北海碑。千載獨不朽。信爲神靈惜。長使山鬼守。褰衣欲訪古。日落辰在酉。荒煙鳥雀噪。竹密虎兒吼。老眼念後期。未知重來否。

黄陵山　は湘陰縣の北四十五里にあり、湘山ともいふ、山下に黄陵亭あり湘水亭の西を流る、舜二妃の墓山上にあり、

汨羅山　も亦湘陰縣北七十里にあり、汨羅の江水中に峙立す、上に屈原の墓あり

磊石山　は或は之を青草山ともいふ、青草湖の南にあるを以て也、或は又五木山ともいふ、方尖にして五木の狀をなすか故也、又山石嵯峨として相疊むに因り萬歲山ともいふ、山下に萬歲寺あり、湘水山の西を流る、三面は水にして一面は阻けなし、樵汲甚だ便に、岳飛の楊公を討せし古戰場とす、

水簾洞　は醴陵縣の西南七里にあり、水石山の頂より流下して洞口簾の如し、別名を雨谷又は界圍巖といふ、

韶山　は湘潭縣の西八十里にあり、湘鄉縣界に接す、山甚だ深遠、相傳ふ舜南巡の時韶樂を此處に奏す因て名くと、綿亘百餘里、湘潭寧鄉二縣の水皆其麓に出つ

自湘潭歸至長沙舟中　佐々木信綱

江の岸に子ひつじ群れてたそがれの
けぶり乏しき昭山のむら

客舍冬曉　同

目さむれば隙もる夜風犬の聲
身は三千里もろこしの冬

大潙山

大潙山　は寧鄉縣西にあり、周圍百四十里にして潙水出つ、四方皆水なるが故に大潙と名けしといふ、高六十里草木深茂して鳥獸群集す、前後左右に蜿蜒縣亘し、山の之に隸するもの九、峯の之に隸するもの十二、巖の之に隸するもの亦十二、嶺の之に隸するもの七、谷の之に隸するもの四、洞の之に隸するもの亦四、坪の之に隸するもの二、石の之に隸するもの十二、唐の裴休を此處に葬る、

小廬山

小廬山　は益陽縣の南六十里にあり、別名を清修山といふ、上に香鑪峯、瀑布泉あり、其九江の匡廬山に類するを以てかく名く、

五溪山

五溪山　は益陽縣北五十八里にあり、常德府龍陽縣界に接す、別名を軍山といふ相傳ふ漢の馬援、吳潘濬五溪蠻を討する時屯兵の處なりと、

龜臺山

龜臺山　は益陽縣の東南二里にあり、山形龜の如く其巔寬平なり、其東を蛇山となす、相傳ふ吳の魯肅兵を屯する處と、

花園洞

花園洞　は益陽縣の西七十里にあり、屈原讀書の處と傳ふ、

石魚山

石魚山　は湘鄉縣西十里にあり、山下に漣水あり、石色黑くして理あり、雲母の若し、一重を開發すれば魚形ありて鱗鰭首尾宛かも刻畫するが如し、長さ數寸之を

司空山

張臣の仙蹟

燒けば魚膏の腥をなす、

司空山　は攸縣の東四十里にあり、下に溫泉源ありて舊名を溫泉山といふ、別名を麒麟山ともいふ、南は雲陽連山に接して峻拔也、南齊の司空張岊此に隱れて道を得しにより司空山と名く、

齊に張岊なるものあり、明帝の時仕へて司空に至る、東昏侯立つて位を嗣くに及び政紊れしかば司空諫めたれども聽かれず、齊國の滅亡近きにあるを浩歎して强て休を請ひ家を携へて去る、蓋し長生の法を得て世を避けんと欲する也、天下の名山を歷游すれども樂しむべきなし、一日老叟あり告げて曰く、瀟湘の南に壽山あり、壽山に朱陵洞あり以て隱を樂しむべしと、司空到るに猶塵境に近きを覺え意に適せず、忽ち洞南に麒麟山あり、山は漢代の薤隱眞人茲に隱れて道を得、白日麟車に駕して昇天し以て名を得たる所なるを聞く、四圍たゝ雲岫回合し、松蘿翁鬱として泉源清冷なり、司空曰く以て吾生を樂しむに足ると、遂に工を命して十里の間榛を披き棘を剪り三十餘室を營みて居る、復家人をして四時供應して耕耘せしめ、山中に壇を築き旦夕大洞經三十九章を誦す、

一日忽然として天籟起り猨鶴鳴き、一神人の貌古に神清く身に鶴衣を著けたるか松陰を歩て壇に昇り自ら稱して曰く、余は葛洪子也と司空に授くるに金液の訣、火鼎の功を以てす、司空是に於て瓦礫を點して金密となし貧病を濟ふこと廿年に迨ぶ、齊國播遷する時、人始驚て曰く司空は眞に所謂幾を見て作す者なりと、これより誦經修練して功行將に就らんとす、梁の天監二年八月初七の夜明星燦爛皓月を照す、司空方に壇に朝せり、一神人あり、朱衣にして魚冠を戴き絲履を蹈み、金簡をとり壇側に歩し到る、司空稽首して問て曰く、神人奚事ぞ此に至る、神人簡を斂めて曰く、某は常人にあらず、上界の仙吏也、上帝吾をして語らしむ、汝此に止まりて眞功行を修め十五日午時に滿たば沐浴以て命を俟つべしと、司空俯伏す、神人簡を舞して謝を爲し雲に乘じて去る、十四日の詰旦司空家僮侍妾十餘人を呼び之に語て曰く、吾最當に上帝の命を受くべし、今仙壇あり誰れか此に止まつて主となるものぞ、侍女盧瓊あり止まらんことを願ふ、司空曰く汝が形貌貞烈、仙壇の主たるべき也と、遂に衣一襲をとりて之に遺り、居を山前に徙さしめ、手を以て背を撫して曰く、好住せよ好住せよと、翌晨司空登壇す、晨より午に至りて天花交も下り、綵霧空に靉く、忽ち紫雲あり壇に直下す、一金童の身には青衣を穿ち頭は蜚髻に結ねたるか玉冊一道、仙衣一通を奉して來る、司空突俯伏して恩を謝し衣冊を受く、倏ち天鈞の鏗爾たるを聞き、鸞鶴翔鳴す、司空乃ち足を蹈して雲に登り全家八十餘口白日昇天す、後陳の天嘉の初に至りて丹陽、章馬の二人あり此に來つて人に語つて曰く、我等は司空の弟子也と、同じく此山に入りて精修道行し、四年二月十四日に至り功滿ちて亦鶴に跨り、簡を執つて登仙せりといふ

靈龜洞　は安化縣の東南四十里にあり、龜蛇洞ともいふ、石屋ありて水洞前に奔瀉す、高三十餘丈、石穴にありて伏流する水十餘里、洞口を出て、潴して潭となり、石龜石蛇其中にあり、歲旱なれば雨を禱る背を探て、龜氣を作せば則ち雨ふるといふ、

印心石　は安化縣北百二十五里石門潭にあり、道光十六年邑人陶樹、宣宗成皇帝の書印心石屋の四字を資江南岸の西崖に摹せしなり、蓋し帝資水を問ひ澍の所學及家居の處を詢ひ遂に印心石屋の大字を書して與へしものにして、事は陶澍

の印心石屋悲記に審か也、

皇雩山　は茶陵州の東南八十里にあり、下に七石竅の泉流ありて瀉々として竭くるなく、田畝を灌漑すること數萬畝、別名を七眼泉といふ、唐代の仙蕭叟なるものの仙鵝が嘴を以て穿ちし處なりと傳ふ、宋の孝宗の時、天下大旱し、此山に祈て雨を得たり、依て皇雩山と稱すといふ、

仙人蕭叟鵝に遇ず

唐の長興の初、耒陽に蕭叟なるものあり、嘗て陰に善を行ふ、一日民舍に宿して鵝を救け之に乘じて大田に至る、惴惴悪虚して鬚髮盡く脱し、宛然たる行脚僧也、遂に鵝語に通ずるに至る、村媼に會ふて飲を求めしに答て曰く、此邊水濁れり又往て求むべき新泉もなしと、鵝吭を引て長鳴す、蕭曰く泉を得る易々たるのみと、大小の椀七個を索めて石壁の下に至り、鵝の啄む所を視て之を覆へは椀石に入ること寸許なり、媼を戒めて曰く、泉當に至るべし亟かに發する勿れと、言了て鵝に乘じて高く翔る、媼之を異とし夫の歸りし時之を告く、夫以て誕となし遽かに至て椀をとり其二を發けは已に飛泉涓流あり、因て駭て止む、期に至て地底萬牛の齊しく吼ゆるが如く、中宵雷電大に作り、石碎け、山摧け、聲數十里に聞ゆ、曙に及ひて遠近聚り觀る、石壁忽ち七竇を開き大なるものは車輪の如く清流迸湧す、其先發の二處は竇微小なれども亦瀧々として流れ息まず、巖間を環つて噴雪礫雷、激して巨浸となり、谷を出て丶岐行し、邨落を縈帶し、田を溉くこと數萬頃、是より大田に旱歲なし、宋の孝宗の時大旱あり雨を大川名山に禱るも應あらず、此山靈の異をきゝ祈れば雨立ろに降る乃ち勅して祠を建て且詩を賜ふ、是より山と泉と竝に雩を以て稱す

題皇雩山圖詩　　宋孝宗

仙鵝飛去是何年、靈蹟猶存古嶺邊、藤老龍蟠疑護法、山幽禽語是逃禪、手攀古木身忘倦、口吸香泉骨欲仙、鄰叟不知唐世遠、猶言謝母舊因緣、

石皷山　は衡陽縣北一里にあり、石皷あり高さ六尺にして湘水の經過する所、皷鳴れば主として兵革の事あり、其聲數十里に聞ゆといふ、

石皷山

嶧嶫峯　は衡山七十二峯の一にして衡陽縣北五十里にあり、回雁峯と共に著名也、衡山の主峯なるが故に衡山も亦嶧嶫の名を兼ぬ、雷洞、妙喜洞あり、禹碑あり

嶧嶫峯

嶧嶫山詩　　唐韓愈

回雁峯
衡山

峋嶁山尖神禹碑。字青石赤形摹奇。科斗拳身蹠倒披。鬱飄鳳泊拏龍螭。聿嚴跡秘鬼莫窺。道人獨上偶見之。我來咨嗟涕漣洏。千搜萬索何處有。森森綠樹猨猱悲。

回雁峯　は衡陽縣の南一里にして衡山七十二峯の首也、

衡山　衡山は衡山縣の西にあり南嶽と云ひ、泰華恒嵩と並んで天下五嶽の一也、一名を峋嶁山といひ、又壽嶽ともいふ、高四千一十丈。周廻八百里。回雁を首となし嶽麓を足となす、傳云ふ禹洪水を治め血馬、山を祭りて金簡玉字の書を得と、山の東南二面湘水に臨映し、長沙より此に至る七百清里、南嶽總勝集に曰く、山に五峯あり祝融、紫蓋、雲密、石廩、天柱と云ふ、五峯の外十七峯あり、其中二十峯は紫蓋に隷し、五峯は雲密に隷し、十七峯は石廩に隷し、十七峯は天柱に隷し、五峯は祝融に隷す、又洞天一、福地四、靈境二、三泂、六源、六門、九溪、十五洞、三十八巖、二十五泉、九池あり、最高峯を祝融となし、祝融と衡を爭ふを紫蓋峯となす、而して回雁等の七峯は衡陽縣界に、祝融等六十峯は衡山縣境に、嶽麓等の五峯は長沙府界にあり、春秋二季遠近香を進むるもの廣至咨集南省唯一の靈場とす。

送陳郎將歸衡陽詩　唐　李白

衡山苔苔入紫冥。下看南極老人星。廻飈吹散五峯雪。往往飛花落洞庭。氣清嶽秀有如此。郎將一家拖金紫。門前食客亂浮雲。世人皆比孟嘗君。江上送行無白璧。臨岐惆悵若爲分。

望嶽詩　唐　杜甫

南嶽配朱鳥。秩禮自百王。歊吸領地靈。鴻洞半炎方。邦家用祀典。在德非馨香。巡狩何寂寥。有虞今則亡。洎吾隘世網。行邁越瀟湘。渴日絕壁出。漾舟清光旁。祝融五峯尊。峯次低昂。紫蓋獨不朝。爭長嶫相望。恭聞魏夫人。羣仙夾翔翔。有時五峯氣。散風如飛霜。牽迫限修途。未暇杖崇岡。歸來覬命駕。沐浴休玉堂。三歊問府主。曷以贊我皇。牲璧忍衰俗。神其思降祥。

朱鳳行　同

君不見瀟湘之山衡山高。山巔朱鳳聲嗷嗷。側身長顧求其曹。翅垂口禁心勞勞。下愍百鳥在羅網。黃雀最小猶難逃。願分竹實及螻蟻。盡使鳴梟相怒號。

游南嶽遇大雪馬上作　宋　張栻

驅車望衡嶽。群山政參差。微風忽南來。雲幕爲四垂。炎官挾蓐收。從以萬玉妃。庭葵亦

何有、尺璧仍珠璣。奇貨我敢居。妙意良自知。林巒倏變化。轍跡平高低。喬松與修竹。錯立呈瑰姿。清新足遐寄。浩蕩多餘思。平生湘南道。未省有此奇。況復得佳友。晤言相追隨。茅簷舉杯酒。旅榻誦新詩。更約登絕頂。同見霽色時。

大雪馬上次敬夫韻詩　宋　朱熹

仙人喬嶽頂。散髮吹參差。喚我二三友。集此西南垂。列筵命洛公。侑座迎江妃。導之千羽旄。投以萬璧璣。繽紛一何麗。晻靄難具知。衆眞亦來翔。恍覺叢霄低。茫茫雲霧合。一瓊瑤姿。回首謝世人。千載空相思。吾衰快雄觀。未敢探此奇。短衣一匹馬。幸甚得所隨。天寒飲我酒。酒罷唐君詩。人生易南北。復此知何時。

風雪未已決策登山詩　張栻

人言南山巔。烟雲聳樓觀。俯瞰了仲倪。仰攀接天漢。勇往愧未能。長吟湘水畔。茲來涉遐思。風雪豈中斷。行行重行行。敢起自盡歎。我聞精神交。石裂冰可泮。陰沴驅屠雪。杲日麗旭旦。決策君勿疑。此理或通貫。

風雪未已決策登山用敬夫韻詩　朱熹

披風南臺宮。看雨百常觀。安知此山雲。對面隔霄漢。群陰市寰區。密雪渺天畔。峨峨雪中山。心眼悽欲斷。吾人愛奇賞。遞發臨河歎。我知沍寒極。見晛今當泮。不須疑吾言。第請視明旦。蠟屐得雁行。籃輿或魚貫。

憶衡山詩　明　陳獻章

南嶽千尋雲。萬尋。丹青難寫夢中心。人間鐵笛無吹處。又向秋風寄此音。

游南嶽詩　明　蔡文範

縹緲仙臺紫氣浮。煙籠玉座儼垂旒。地包荆楚標南紀。江合烝湘向北流。牲帛千秋周祀典。衣冠五月舜諸侯。塵緣未斷。慚仙骨。金簡雲書何處求。

祝融峯　は南嶽七十二峯中の最高峯にして衡山縣の西北、嶽廟を距る三十清里にあり、昔炎黃の世祝融君游息の所たるを以て名けしと傳ふ、廣記に「祝融栖息於衡阜」とは是也、峯頂朱雀の頭に似、衆山を下視すれば邱垤の如し、紫蓋雲密と雖亦及ばず、南に光天壇あり、二十二福地なり、西に青玉壇あり、二十一福地也、

紫蓋峯　は衡山縣の西北、嶽廟を距る二十清里にあり、高五千四百餘丈。上に寶露臺あり、傳言ふ夏禹寶露を此に埋むと、

石廩峯　は衡山縣の西北、嶽廟を距る十六里にあり、其形倉廩の如く二戸ありて

一は開き一は闔づ、傳へ言ふ開けば即ち歲儉にして閉づれば即ち歲豐か也と、高さ四千五百餘丈にして山下の居民時に石門啓閉の聲を聞くと稱す、又是れ朱陵洞天の便門なりともいふ

蓮花峯　は崇嶽鄉にあり、四水山を環繞して蓮花の如し、宋の徽宗の書「天下南嶽」の四字あり

聖鐙巖　は衡山の金簡峯にあり、巖に珊瑚芝あり、晦の夜靈光を放つ、俗に聖鐙といひ又日光明臺といふ

香零山　は零陵縣東四里瀟水中にあり、山中に產する草木春に當て皆香氣あり唐世之を上供せしむ、郡人之に苦めり、刺史韋宙奏して遂に罷む

四山　は零陵縣の西、河を隔てゝ二里、朝陽巖より起りて黃茅嶺北に至る數里に亘る一帶をいふ、

始得西山宴游記

唐　柳宗元

自余爲僇人居州。恒惴慄。其隙也則施施而行。漫漫而游。日與其徒上高山。入深林。窮迴溪。幽泉怪石。無遠不到。到則披草而坐。傾壺而醉。醉則更相枕以臥。臥而夢。意有所極。夢亦同趣。覺而起。起而歸。以爲凡是州之山水。有異態者。皆我有也。而未始知西山之怪特。今年九月廿八日。因坐法華西亭。望西山。始指異之。遂命僕人過湘江。緣染溪。斫榛莽。焚茅茷。窮山之高而止。攀援而登。箕踞而遨。則凡數州之土壤。皆在衽席之下。其高下之勢。岈然洼然。若垤若穴。尺寸千里。攢蹙累積。莫得遯隱。縈青繚白。外與天際。四望如一。然後知是山之特出不與培塿爲類。悠悠乎與灝氣俱。而莫得其涯。洋洋乎無所見。而猶不欲歸。心凝形釋。與萬物冥合。然後知吾嚮之未始游。游於是乎始。故爲文以志。是歲元和四年也。

石角山　は零陵縣東十里にあり、十餘の小石峯連續して奇峭畫くが如し、又山に小洞ありて極めて深遠なり、

潛山巖　は又潛巖ともいふ、零陵縣南二十五里にあり、巖狀覆盂の如く、其地潛竹に宜しき故に名くともいひ、又古しへ老人ありて其下に處り潛氏と稱せし故に名けしとも傳ふ、方輿勝覽にいふ、秦の始皇の時周貞實なるものあり、世を此に遁れて三たび召せども赴かざりしといふ、

朝陽巖

朝陽巖　は零陵縣の西三里にありて瀟湘に臨む、唐の元結舟を巖下に維き、其地の高くして東向せるを以て遂に朝陽と名けたり、巖中に洞あり流香と名く、伏流して巖腹を出て氣菌蕈の如し、石上より綠潭洞門に瀉入す、左右に石壁あり、宋の黄庭堅名を題して詩を其上に鐫す、巖後に祠ありて唐宋の謫官を祀れり、

鏡石

鏡石　は祁陽縣の浯溪にあり、方二尺二寸黑光玉の如く磨崖碑の左に位す、溪水を以て之を拭へば人の須眉を鑑むべく、又隔岸の山樹邨疇了了として映照す、乾隆二十三年此鏡を竊まんと謀るものあり、石爲めに裂く、知縣李蒔別に一石を購ひ壁に嵌めて舊觀に復す、又傳ふ昔竊去るものあり石遂に暗し、歸れば明徹故の如かりしと、

高山

高山　は東安縣の西北一里にあり、五峯突出す、石に宋刻ありて尙存す、幽巖あり、外より內に達する凡九門、門は一洞を隔てゝ極めて深遠也、

安定山

安定山　は道州の西二十五里にあり、俗に安心砦山と名く、壁口道山の二大字を鐫せり、山下の石竇に泉を出す、即ち濂溪也、人呼で聖脈泉となす、上を有本亭となし、東に迤れる所を風月亭となし、流に沿ふて東を濯纓亭となし、又周子の家廟となす

月巖

月巖　は道州の西營山の西南二里にあり、一に太極巖と名け、又穿巖ともいふ、形圓廩の如く、中數萬斛を容るべし、東西の兩門相通して之を望めは城闕の如く又偃月の如し、巖前に石有り、或は走貌の如く、伏犀の如し、東濂溪を去ること十五里の地なり、或はいふ周敦頤太極の理を玆に悟ると、

太陽原

太陽原　は道州の南にあり、一に斑竹巖と名く、小斑竹多し、相傳ふ舜を九疑に葬るとき二妃從て此に至り手を以て淚を拭ひ竹を把り遂に斑を成すと、

五如石

五如石　は道州の東にあり、上は濶く下は細く、輪囷飛騰之を望めは雲の如し、眞に奇石也、

九疑山

九疑山　は甯遠縣の南六十里にあり又蒼梧山ともいふ、相傳ふ帝舜の陵こゝにありと、山の南に舜廟あり廟より山を仰けば極めて高し、古老傳へ云ふ未だ其頂に登るものあらずと、山に九峯あり異嶺同勢名を獲る所以なり、一を朱明といひ、二を石城といひ、三を石樓といひ、形樓の如し、四を娥皇といひ、下に舜池あり、池邊に春日百鳥卵を生む、之を取れば路に迷ふと傳ふ、五を舜源といひ最も高く上に

紫蘭多し、六を女英といひ、舜の陵こゝにあり、七を蕭韶といひ、峯下は即ち象の耕種せし處といふ、八を桂林といひ馬明生、安期に遇ひ金液神丹を授くる處、九を杞林といひ周義山、石函を開きて經を得之を讀んで仙を得しといふ處也、又九峯各水源ありて、朱明は瀟水の源、石城は池水の源、石樓は巢水の源、娥皇は池水の源、舜源は又華蓋ともいひ瀑水の源、女英は硃水の源、蕭韶は溈水の源、桂林は洑水の源、杞林は洄水の源たり、又舜峯あり、三峯ともいふ、舜祠の南四十里にあり、三峯鼎立す、九峯の内に列せす、

九疑山銘　漢　蔡邕

巖巖九疑、峻極於天、觸石膚合、興播連雲、時風嘉雨、浸潤下民、芒芒南土、實賴厥勳、遯於虞舜、聖德光明、克諧頑傲、以孝蒸蒸、師錫帝世、堯曰受徵、受終文祖、璿璣是承、泰階以平、人以有終、九疑解躰、登此崔嵬、託靈神仙、

九疑山詩　唐　劉蛻

鼎湖冠劍有遺蹤、晉漢眞人羽化同、九轉藥成丹竈冷、五車雲去玉堂空、仙家日月蓬湖裏、塵世煙花夢寐中、徒有舊山流水畔、老松枝葉苦吟風、

九疑山詩　宋　黃甲

二妃千古恨難刊、不謂南巡遂不還、空使湘江江上竹、至今猶染淚痕斑、

望九疑詩　明　桑日昇

羣峯天表出南荒、虞帝當年萬歲鄉、玉輦乘雲春自老、銅碑無字草生香、半程霧入廬林靜、一水風來湘瑟涼、安得依依青嶂裏、細看竹隕淚千行、

斜巖　は寧遠縣の東南にあり、紫虛洞とも、重華巖とも、又紫霞巖ともいふ巖內古木蒼煙、石田碁布、石室ありて百人を座せしむべく、其東に洞ありて深さ測るべからず、炬をとりて入れは峻崖峭壁、寒泉冷風、石乳の結ぶ所、佛像、車蓋、花果、器皿、飛走の屬を成すを見る、正にこれ風洞、雷洞の異を兼ね有するものなり、

吳望山　は江華縣南五十里にあり、或はいふ秦人嘗て此に亂を避く、故に舊名を秦山といふと、吳の孫權未た建號せざる時、山忽ち聲あつて雷の如し、因て洞穴を開けば文采あり、權以て瑞と爲す、唐の天寶中吳望山と改む、

陽華巖　は江華縣の東南にあり、唐の元結の極めて稱揚せし所、又宋の李長庚の

好みし所也、

楓門山　は武岡州西六十里にあり、別名を風門山とも、風門嶺とも、風陽山ともいふ、城步縣及靖州綏寧縣界に接し、黔楚の通衢とす、山勢極めて峻拔なり、

雲山　は武岡州南十五里にあり、一郡の勝處にして杏花塢、投龍洞、猨藤水、道者巖、侯公洞あり、山に七十一峯ありて紫霞、日華、月華、芙蓉、香鑪最も著はる、宋の郡守汪中立營て七十一峯閣を上に建てたり、

寶方山　は武岡州の東南五里にあり、別名を寶勝山或は資勝山といひ又法相巖と名く、山に巖洞八所あり、曰く棲眞、上屏、太保、朝陽、迎陽、芙蓉、隱仙、花乳、其中の龍甲神像は皆滴乳の成す所也、巖上に石樓あり、

都梁山　は武岡州の東北にあり、上に淳水ありて清く且淺し、其中に蘭草を生す、綠葉紫莖芳風藻川、蘭馨遠く馥る、俗に蘭を都梁といふ、山の名けらるる所以也

同保巖　は武岡州の北五里、武岡山にあり、其麓を仙院といふ、怪石攢簇、仙橋、仙闕、仙峽、隱伏、靈湫あり、時に巨魚の出游するを見て人以て龍となす、明の潘曾、金簡を鑄て之を投ぜしに龍起りて旱に方りて雨ふれりといふ、萬歷中、張元忭、栖仙亭を

仙闕の上に建つ、其左百步許りを州人曹一夔、讀書の處となす、甚だ幽異也

萱笏山　は新寧縣西十五里にあり、一石突起、峭削笏の如し、矗立千尋、頂の廣さ數尺四面の諸山、高さ皆此山に及はす、

巴邱山　は岳州府城の西南隅にあり、幕阜とも巴陵とも天岳ともいふ、昔羿巴蛇を洞庭に屠り其骨陵の若し、故に巴陵といふ、岳州はこの陽に據るを以て又岳陽といふ、吳魯肅をして萬人を以て巴邱に屯せしむとは即ちこれ、

行經巴陵部伍詩　梁元帝

涉江望行旅。金鉦閒綵游。水際含天色。虹光入浪浮。柳條恆掃岸。花氣盡熏舟。叢林多故社。單戍有危樓。壘鼓隨朱鷺。長簫應紫騮。運舟夾鶴壁。畫舸覆緹油。榜歌殊未息。於此泛安流。

君山　は巴陵縣の西南、洞庭湖の口にあり、或は湘山といひ又湘君山と稱す、祠あり娥皇、女英の二妃を祭る、史記「秦の始皇二十八年、江に浮て湘山の祠に至る大風に逢ふ問ふ湘君は何の神ぞ博士曰く堯の女舜の妻と、始皇大に怒り、刑徒三千人を發して湘山の樹を伐り其山を赭にす」とこれ也、漢の武帝此に登り蛟を是山に

射る、北編山と對峙し孤影浮ふが如く、波穏かなる時は容易に就て遊ぶを得、春浪油の如き晨、秋月鏡に似たる夕、眺望殊に佳なり、山狀十二螺髻の如く、上に軒轅臺、湘君廟、酒香亭、柳毅井、傳書亭、崇勝寺、朗吟亭、七先生祠、秦王以前の古樹等あり、方竹及斑竹を產す、又茶を產し多からざるも色味共に佳にして貢品に供す、

君山看月　唐　李羣玉

熠燿游何處。蟾蜍食漸殘。櫂翻銀浪急。林映白虹攢。疎影連河曉。冰輝壓樹乾。夜深高不動。天下仰頭看。

題君山　同　方干

曾於方外見麻姑。聞說君山自古無。元是昆崙山頂石。海風吹落洞庭湖。

別君山　同　崔魯

點空誇黛如愁眉。何必浮來結夢思。慚愧二年青翠色。惹窓粘枕伴吟詩。

登岳陽樓望君山　宋　黃庭堅

投荒萬里鬢毛斑。生出瞿塘灩澦閒。未到江南先一笑。岳陽樓上對君山。

滿川風雨獨凭闌。綰結湘娥十二鬟。可惜不當湖水面。銀山堆裏看君山。

君山行　元　小雲石海涯

北溟魚背幾千里。負我大夢游弱水。蓬萊隔眼不盈拳。碧落香銷吹不起。青衫女兒懷遠游。遠人不歸明月羞。寶釵綰髻翠欲流。風鬟十二照暮秋。女媧鍊石補天手。手掘石開露天醜。瓊樓玉宇亦人間。直指示君君看示。斯須魚去夢亦還。白雲與我游君山。

舟中望君山　日本　永井禾原

停橈何處問芳蹤。遙望依稀十二峰。照出鏡中眉月影。烟波如夢恨千里。

欲登君山風雨忽來悵然有作　同　永井禾原

十二湘娥髻。秋波送影寒。雲來看不易。浪起接還難。恨迹人千古。啼痕竹萬竿。湖天吹暮雨。一望黑漫々。

連雲山

連雲山　は平江縣南五十里にあり、水經注の所謂純山なり、常に雲氣ありて其上を覆ふ、石室あり、中に石硯、石漿、石竈あり、皆形相肖たり、石あり、白雲瑩然簇として蜂房の如く、尖頭削るが如し、潭あり、玉清宮の前にありて深さ測るべからず、

幕阜山

幕阜山　は平江縣北にありて江西の瑞州界に接す、山に別名あり凡五、曰く天岳、雷臺、雷公、天柱、幕府これ也、石崖壁立、壁に文あり、夏禹水を治めて嘗て此に至ると

いふ、東に溫泉の三穴、海棠、仙人の二洞あり、山の產にして藥とすべきもの百餘種異草怪木人盡く識らずと傳ふ、

石門山　は華容縣南三十里にあり又仙廬山ともいふ、甚だ幽邃也、旁らに七女峰ありて最高し、雨降らんとすれは則雲峯上に起り、霽るれば則復歸す、山に仙人洞、飛昇臺、鍊丹池、環秀橋あり、下に香泉あり、

平山　は武陵縣の西三十里にあり、或は武山、太和山、武陵山、河洑山といふ、頂に者闍寺、道德觀あり、其下に德勝泉あり、旁らに西山仙井、白雲洞遺蹟あり、卽ち張靈白醉臥の處、

陽山　は武陵縣北三十里にあり、漢の梁松此に廟食せしにより梁山とも名く、山前に池あり、其下に靈泉あり、寺旁に飛泉瀑布あり、觀者暑を忘る、山に風雷雨の三洞あり、高聳雄峙、常德の巨鎭となす、四時常に雲氣あり、山頂の廟は陽山の神を祀る、山上湖を望めは鏡の如く、江を望めは環の如し、

綠蘿山　は桃源縣南十五里にあり、上に綠蘿巖あり、下に潭あり、

欽山　は桃源縣南六十里にありて江に瀕す、壁に欽山の二大字を鐫し、下に漢の馬援が鑿てる避暑の二石屋あり、援五溪蠻を征して營を壺頭に進む、賊高きに乘して隘を守り、水急にして船上るを得ず、會ま盛暑に際し、士卒多く疫死す、援亦病み岸を穿て室と爲し以て炎氣を避く、賊險に升りて皷譟する每に、援輒ち足を曳て觀る、左右其壯志を哀しみ、之かために流涕せざるはなかりしといふ、

桃源洞　は桃源山下にあり、秦人洞ともいふ、所謂武陵桃源の勝也、洞口の流泉瀑布千尺、石壁に落ち、流を下ること里許にして地に伏して見えず、北に至る三里遂に桃花溪と合流して沅水に入る、洞前の石橋横に兩山に跨るものを迴仙橋といふ、陶淵明以來之に關する記詩の類多く左に其數編を抄出す明人表中道の遊記尤詳かなり今省畧に從ふ、

桃花源記

晉　陶潛

晉太元中、武陵人捕魚爲業。緣溪行忘路之遠近。忽逢桃花林。夾岸數百步。中無雜樹。芳草鮮美、落英繽紛。漁人甚異之。復前行欲窮其林。林盡水源便得一山。山有小口。髣髴若有光。便舍船從口入。初極隘。纔通人。復行數十步。豁然開朗。土地平曠。屋舍儼然。有良田美池桑竹之屬。阡陌交通。鷄犬相聞。其中往來種作。男女衣著悉如外人。黃髮

垂髫。亦怡然自樂。見漁人乃大驚。問所從來。具答之。便要還家。設酒殺鷄作食。邨中聞有此人。咸來問訊。自云先世避秦時亂。率妻子來邑。此絕境。不復出焉。遂與外人間隔。問今是何世。乃不知有漢。無論魏晉。此人一一爲具言所聞。皆歎惋。餘人各復延至其家。皆出酒食。停數日。辭去。此中人語云。不足爲外人道也。既出得其船。便扶向路。處處志之。及郡下。詣太守。說如此。太守卽遣人隨其往。尋向所志。遂迷不復得路。南陽劉子驥。高尚士也。聞之欣然親往。未果。尋病終。後遂無問津者。

晉　陶潛

桃花源詩

嬴氏亂天紀。賢者避秦世。黃綺之商山。伊人亦云逝。往迹侵復湮。來徑遂蕪廢。相命肆農耕。日入從所憩。桑竹垂餘蔭。菽稷隨時藝。春蠶收長絲。秋熟靡王稅。荒路曖交通。鷄犬互鳴吠。俎豆猶古法。衣裳無新製。童孺縱行歌。班白歡游詣。草榮知節和。木衰知風厲。雖無紀歷志。四時自成歲。怡然有餘樂。於何勞智慧。奇蹤隱五百。一朝敞神界。淳薄既異源。旋復還幽蔽。借問游方士。焉測塵囂外。願言蹈輕風。高舉尋吾契。

唐　李白

餞十七翁二十四翁尋桃花源序

昔祖龍滅古道。嚴威刑煎熬生人。若墜大火。三墳五典。散爲寒灰。築長城。述阿房。并諸侯殺豪俊。自謂功高羲皇。國可萬世。思欲凌電氣。求仙人。登封泰山。風雨暴作。雖五松受職。草木有知。而萬象乖度。禮刑將弛。綺皓不得不避於南山。魯連不得不蹈於東海。則桃源之避世者。可謂超昇先覺。失指鹿之僞。連頸而同死。非吾黨之謂乎。二翁就老子之言。繼少卿之作文。以述大雅道。以通至精。卷舒天地之心。脫落神仙之境。武陵遺蹟。可得而窺焉。問津利往。水引漁者。花藏仙溪。春風不知從來。落英何許流出。石洞來入。晨光靄開。有良田名池。竹果森列。三十六洞別爲一天邪。今扁舟而行。笑謝人世。阡陌未改。古人依然。白雲何時而歸來。青山一去而誰往。諸公賦桃源。以美之。

唐　王維

桃源行

漁舟逐水愛山春。兩岸桃花夾去津。坐看紅樹不知遠。行盡青溪不見人。山口潛行始隈隩。隔山開曠望旋平。陸遙看一處攢雲樹。近入千家散花竹。樵客初傳漢姓名。居人未改秦衣服。居人共住武陵源。還從物外起田園。月明松下房櫳靜。日出雲中鷄犬喧。驚聞俗客爭來集。競引還家問都邑。平明閭巷掃花開。薄暮漁樵乘水入。初因避地去人間。及至成仙遂不還。峽裏誰知有人事。世中遙望空山不。疑靈境難聞兒。塵心未盡思鄉縣。出洞無論隔山水。辭家終擬長游衍。自謂經過舊不迷。安知桑田今來變。當時

只計入山深。青溪幾曲到雲林。春來偏是桃花水。不辨仙源何處尋。

同吉中孚夢桃源詩　唐　盧綸

春雨夜不散。夢中山亦陰。雲中碧潭水。路暗紅花林。花水自深淺。無人知古今。

送嚴侍御訪仙源詩　唐　武元衡

武陵源在朗江東。流水桃花仙洞中。莫問漁郎千古事。綠楊深處翠霞空。

桃源篇　唐　權德輿

小年嘗讀桃源記。忽覩良工施繪事。巖徑初欣緣繞通。溪風轉覺芬芳異。一路鮮雲雜彩霞。漁舟遠遠逐桃花。漸入空濛鳴鳥道。甞知掩映有人家。麗眉秀骨爭迎客。鑿井耕田人世隔。不知漢代有衣冠。猶說秦家變阡陌。石髓雲英甘且香。仙翁留飲出青囊。相逢自是松喬侶。良會應殊劉阮郎。內子閑吟倚瑤瑟。歎此沈沈銷永日。忽聞麗曲金玉聲。便使老夫思閣筆。

桃源圖詩　唐　韓愈

神仙有無何渺茫。桃源之說誠荒唐。流水盤迴山百轉。生絹數幅垂中堂。武陵太守好事者。題封遠寄南宮下。南宮先生忻得之。波濤入筆驅文辭。文工畫妙各臻極。異境恍惚移於斯。架巖鑿谷開宮室。接屋連牆千萬日。嶺頭劉蹶了不聞。地坼天分非所恤。種桃處處惟開花。川原遠近蒸紅霞。初來猶自念鄉邑。歲久此地還成家。漁舟之子來何所。物色相猜更問語。大蛇中斷喪前王。群馬南渡開新主。終聽辭絕共悽然。自說經今六百年。當時萬事皆眼見。不知幾許猶流傳。爭持酒食來相饋。禮數不同尊俎異。月明伴宿玉堂空。骨冷魂清無夢寐。夜半金鷄啁哳鳴。火輪飛出客心驚。人間有累不可住。依然離別難爲情。船開櫂進一迴顧。萬里蒼蒼烟水暮。世俗甞知僞與眞。至今傳者武陵人。

桃源翫月詩　唐　劉禹錫

塵中見月心亦閑。況是清秋仙府間。凝光悠悠寒露墜。此時立在最高山。碧虛無雲風不起。山上長松山下水。群動翛然一顧中。天高地平千萬里。少君引我昇玉壇。禮空遙請眞仙宮。雲駢欲下星斗動。天樂一聲肌骨寒。金霞昕昕漸東上。稽首影促猶頻望。絕景良時難再拜。他年此日應惆悵。

酬五秀才桃源見寄詩　唐　杜牧

桃滿西園淑景催。幾多紅豔淺深開。此花不逐溪流出。晉客無因入洞來。

題武陵洞詩　唐　曹唐

桃花夾岸杳何之。花滿春山水去遲。三宿武陵溪上月。始知人世有秦時。

和陶淵明桃花源詩并引　宋　蘇軾

世傳桃源事。多過其實。致淵明所記。止言先世避秦亂來此。則漁人所見。似是其子孫。非秦人不死者也。又云殺鷄作食。豈有仙而殺者乎。舊說。南陽有菊水。水甘而芳。居民三十餘家。飲其水皆壽。至百二三十歲。蜀青城山老人郝。有見五世孫者。道極險遠。生不識鹽醯。而溪中多杞。根如龍蛇。飲其水故壽。近歲道稍通。漸能致五味。而壽益衰。桃源此比也與。使武陵太守。得而至焉。則已化爲爭奪之場久矣。常意。天壤間若此者甚衆。不獨桃源。予在潁州。夢至一官府。人物與俗間無異。而山川清遠。有足樂者。顧視堂上。榜曰仇池。覺而念之。仇池武都氐故地。楊難當所保。予何故居之。明日以問客。客有趙令畤德麟者曰。公何問此。此乃福地。小有洞天之附庸也。杜子美蓋云。萬古仇池穴。潛通小有天。他日工部侍郎王欽臣仲至謂予曰。吾嘗奉使過仇池。有九十九泉。萬山環之。可以避世。如桃源也。

凡聖無異居。清濁共此世。心開偶自見。念起忽已逝。欲知眞一處。要使方用廢。桃源信不遠。杖藜可少憩。躬耕任地力。絕學他天藝。臂雞有時鳴。尻駕無可稅。苓龜亦晨吸。杞狗或夜吠。耘樵得甘方。乾醬謝炮製。子驥雖形隔。淵明已心詣。高山不難越。淺水何足厲。不如我仇池。高舉初幾歲。從來一死生。近又等癡慧。蒲淵安期境。羅浮稚川界。夢往從之游。神交發吾蔽。桃花滿庭下。流水在戶外。卻笑避秦人。有畏非眞契。

桃源行　同　王安石

望夷宮中鹿爲馬。秦人半死長城下。避時不獨商山翁。亦有桃源種桃者。比來種桃經幾春。采花食實枝爲薪。兒孫生長與世隔。雖有父子無君臣。漁郎漾舟迷遠近。花間相見因相問。世上那知古有秦。山中豈料今爲晉。聞道長安欲戰塵。春風迴首一霑巾。重華一去寧復得。天下紛紛經幾秦。

桃花源詩并序　同　堯梅臣

嘉祐元年。余在京師。邂逅與都官員外郎張侯顒遇於書館。張話往曾相識於唐僉家。今三十三年矣。因各言出處。張曰。某居武陵。武陵舊迹可具道。始陶潛爲記與詩。其後往往賦詠不絕。君之仲父。昔嘗有作。聞君能詩。願賦一章。亦當買石刻置巖下。既重其

意。許錄幼時所爲五言。歸閑故稿。頗不愜心。別爲一章。以塞張侯之請。

鹿爲馬龍爲蛇。鳳凰避羅龍避置。天下逃難不知數。入海居巖皆是家。武陵源中深隱人。共將鷄犬栽桃花。桃花記春不記歲。金椎日將博浪沙。亦殊商嶺采芝草。雖與少長親胡麻。豈意異時漁者入。各各同問人閒賒。秦已非秦孰爲漢。奚論晉魏如削瓜。英雄滅盡有石闕。知慧屏去無年華。俗骨思歸一相送。愼勿與世言雲霞。出洞沿溪夢寐覺。景物都失同迴槎。心記草樹欲復往。出憂草亂尋無涯。

桃源行　同　汪藻

祖龍門外神傳璧。方士猶言仙可傳。東行欲與羨門親。咫尺蓬萊滄海隔。那知平地有青雲。共屬尋常避世人。關中日月空萬古。花下山川長一身。中原別後無消息。聞說胡塵因感昔。誰教晉鼎判東西。卻愧秦城限南北。人間萬事愈堪憐。此地當時亦偶然。何事區區漢天子。種桃辛苦求長年。

桃源行　同　胡宏

北歸已過沅湘渡。騎馬東風武陵路。山花無限不關心。惟愛桃花古來樹。聞說桃花更有源。居人共得仙家趣。之子漁舟安在哉。我欲乘之望源去。江頭相逢老漁父。煙水茫茫雲日暮。投竿拱手向我言。桃源言說非眞傳。當時漁子魚得錢。買花醉臥桃花邊。桃花風吹入夢裏。自與世人相周旋。靖節先生絕世人。奈何說僞不記眞。先生高步窮末代。雅志不肯爲秦民。故作斯文寫幽意。要似寰海離風塵。不然山原遠近桃開。宜有一片隨水從東來。嗚呼神明通八極。豈特祕視桃源哉。我聞是言發深省。勒馬卻辭漁人回。及晨徧覽三春色。莫使風雨空蒙苔。

桃源圖歌　明　何景明

昔我游武陵。坐石窺花源。岸坼丹洞闢。風廻綠蘿翻。崩崖奔古月。沓嶂攀哀猿。行車一以過。始知人境喧。眞陽仙令欲南往。手持新畫來相訪。武陵山水久不覩。今晨置我高堂上。巖穴如聞鷄犬聲。邨墟但見桑麻長。髣髴潭水濱。點綴桃花春。山川似晉代。衣服猶秦人。廻首茫然一煙霧。尋源誰復知其處。投簪福地知有期。畫中先認桃花樹。

桃花源詩　同　文徵明

桑麻雞犬自成邨。天遣漁郎得問津。世上神仙知不遠。桃花只待有緣人。

漁仙洞　は桃源縣南欽山の東にあり。山紫水明の地と稱せらる、

虎溪山　は沅陵縣西二里にあり虎溪水出づ。明の王陽明、龍場驛丞に謫せられて

道辰州を經しときその勝を愛して僧房に宿し、滯在月に彌りし處也、上に陽明書院あり陽明講學の所といふ、

壺頭山　は沅陵縣東北百三十里にありて常德府の桃源縣界に接す、山下の水際に馬援五溪蠻を征して軍を停めし處あり、徑曲多險、紆折千灘、水流急也、山頭の東海の方壺と相似たるが故にしか名くといふ、

羅公山　は黔陽縣の東南百六十里にありて寶慶府武岡州及靖州に接す、卽ち水經注の龍橋山にして又羅翁山ともいふ、昔羅姓の人此に隱れて道を得因て名く、四面險絕、傳言ふ山に倜鷃あり鳴けば卽ち雨ふると、又絕頂に廣さ數十里の池ありて夜陰池面に物あるが如く其形明月の水上を游ぶが如しといふ、南に砂溪あり武陽江と合して北流し分れて兩溪となる、山の西北に數百畝の地あり、大旱に際するも此處獨り稔る、故に又熟平の名あり、山に各洞あり、洞に各砦あり、諸の猺族之に住す、其一は木古界といひ、酋名を風亞六といふ、一は藍家洞といひ、酋名を狗榮といふ、一は靛岡山といひ、又梓木駝ともいふ、沈懷を酋とす、一は照面山といひ、克紹宇を其酋長とす、地に菽粟なく鹽布なく、產する所は唯た黍及蕎麥あるのみ、山に八面ありて七面皆塞がり唯だ西北の一面黔陽縣に通ず、

山中の猺族

東山　は郴州の東一里にあり、白水其南に出て上に周子書堂あり、宋の秦觀嘗て此に游び記あり、其形勝華山に類して沃潤は之に過ぐといへり

魚鱗山　は郴州の東三十里にあり、天飛山、仙臺山の別名を有す、雲秋河の出づる處也、上に蓮池あり其水清洌にして四時涸れず、山後に石穿つて橋の如きあり、上下俱に往來を通す、仙壇あり蘇耽修練の處といふ、

黃岑山　は郴州の南六十里にありて宜章縣界に接す、上嶺山、客嶺山、黃箱山、騎田嶺、臘嶺等の別名ありて、五嶺の第二嶺となす、山の東に仰天湖あり其北は郴江の水源にして、桂水、寒溪水も亦此に出づ、山上に浪井ありて三日に一沸す、この山楚粵の關をなして諸嶺と連屬し、南北を橫絕して寒燠の氣候頓に殊なれ、

雲秋山　は郴州の北三十里にあり、天飛山、仙臺山の別名を有す、雲秋河の出づる處也、上に蓮池あり其水清洌にして四時涸れず、山後に石穿つて橋の如きあり、上下俱に往來を通す、仙壇あり蘇耽修練の處といふ、

馬嶺山　は郴州の東北五里にあり、蘇仙山、手皮山、白馬嶺等の異名を有す、晉の蘇耽山に入て道を學ぶ、母往て之を窺ひしに其子白馬に乘りて飄然たるを見る、故に白馬嶺と名くといふ、山に白鹿洞、仙人塲あり、巨石ありて一を沈香小石といひ、

一を仙桃といふ、桃は色赤黄にして核あり、研て之を飲めば疾を愈すと傳ふ、

彭山　は澧州の西十里にあり、唐の彭思王を以ての故に此名を得しといふ、彭山廟碑に曰く、「崇山連天外界。越嶲岡阜。靡迤如舞馳。過千里之勢於洞庭之野。屹暾郡治。竝爲彭山。蓋澧邦之所瞻也。」

夾山　は澧州の西四十里にありて石門縣界にあり、山に靈泉ありと傳ふ、

藥山　は澧州の南九十里にあり、昔此山に芍藥多かりしを以て名くといふ、山頂に長嘯峰あり、唐僧惟儼夜嘯の處也、山北に白雲山あり、南に紅巖山あり、亦金剛山とも名く、巖前に浮塵橋、白龍井、清涼亭の諸勝あり、

大清山　は澧州の西百六十里にあり、又太清山の名あり、安福縣及湖北の松滋縣界に接す、上に五老峰、老君巖石室あり、又瓊瑤紫極宮あり、李凝陽得道の所といふ、其麓を茹溪となす、

天門山　は永定縣南三十里にあり、即ち古の松梁山一名嵩梁山也、

檳榔洞　は永定縣西茅岡司南にあり、一穴よりして入れば後に大門あり石を鐫して人に像れり、民猺の分界にして此を過くれば則ち猺人の居所たり、峭厓陡臨下數百歩ばかりにして一坪あり、闊さ十里内外にして四山壁立、路徑なし、中に小溪あり東南より來て石竅中に入り、伏流して復出づ、大溪を最幽勝となす、洞中産する所の白石、紋檳榔の如し、故に檳榔洞と名くといふ、

鬼谷洞　は永定縣南にあり、石室深邃にして下に清流あり、世に傳ふ鬼谷子嘗て此に游ぶと、石壁上に甲子の篆文あり、

韓張山　は臨武縣北にあり、一に官山と名く、唐の韓愈張署同時に遷謫せられ、愈は陽山に令たり、署は臨武に令たり、北還するに及び此に會宿す。故に名く、宋の紹興間韓張亭を山上に建つ、

秀巖　は臨武縣南十五里にあり、巖石自然に門奥俱備す、中平曠にして數百人を座せしむべし、四壁璀璨五彩の如し、巖の東北に穴あり明を通じ石乳結聚す、下に兩穴ありて水出づ、其左を大溪流となす、近傍に紅石巖あり、中百人を容るべく、石乳花木鳥獸の形を結成す、

第二、江湖溪泉

湘江、—舂口河、—銅官渚、—南湖、—昭潭、—湘水、—陵楓浦、—空冷灘、—鑿石浦、—

晚洲、―關瀨、―諸葛井、―洗藥池、―瀟水、―黃溪、―墨溪、―鈷鉧潭、―小石潭、―袁家渴、―石渠、―石澗、―語溪、―濂溪水、―石魚湖、―七泉、―愛蓮池、―曹婆井、―武陵井、―大江、―湞湖、―洞庭湖、―三湘池、―青草湖、―鴛鴦灘、―藥公泉、―赤沙湖、―淅水、―崔婆井、―明月池、―沿頭水、―太白湖、―墨池、―沅水、―資水、―天心湖、―關洲、―臥龍墨池、―武溪、―郴江、―四泉、―燕泉、―白水、―茱水、―澧水、―澧水、―仙眠洲、―茶港河、―禦泉、―九渡水、―大灘、

湘江

湘江は源を廣西省興安縣に發し衡州府衡山縣より湘潭縣境に流入し、湘潭縣城より北流して善化縣境を經て、長沙縣境を經て湘陰縣に至て青草湖に達し洞庭湖に注ぐ、水源より流域二千五百餘清里と稱す、志に曰く「湘江源出廣西興安縣海陽山。西北流至分水嶺。分爲二派。曰灕水流而南。曰湘水流而北。由靈渠與灕水會。湘猶相也。言有所合。至永州與瀟水合。曰瀟湘。至衡陽與烝水合。曰烝湘。至沅江與沅水合。曰沅湘。會衆流。以達洞庭。其他各地に於て小流を合する一々枚擧に遑あらず、要するに湖南全省に冠たる重要の巨流となす

湘中有懷　唐　張謂

八月洞庭秋。瀟湘水北流。還家萬里夢。爲客五更愁。不用開書帙。偏宜上酒樓。故人京洛滿。何日亦同遊。

夜泊湘江詩　唐　于武陵

楚人歌竹枝。游子淚沾衣。異國久爲客。寒宵頻夢歸。一封書未達。千樹葉皆飛。南渡洞庭水。更應消息稀。

湘江曲　唐　張籍

湘水無潮秋水濶。湘中月落行人發。送行人發送人歸。白蘋茫茫鷗鵠飛。

喬口河

喬口河は長沙縣の西北九十里にあり、益陽縣より流れて縣界に至り湘江に入る、即ち高口水也

入喬口詩　唐　杜甫

漠漠舊京遠。遲遲歸路賒。殘年傍水國。落日對春華。樹密早蜂亂。江泥輕燕斜。賈生骨已朽。悽惻近長沙。

喬口別游子明詩　宋　范成大

馬首欲東舟欲西。洞庭喬口暮寒時。三年再別子輕去。萬里獨行吾孟衰。遙憶美人湘水夢。側身西望劍門詩。老來不灑離亭淚。今日天涯老淚垂。

銅官渚　南湖　昭潭　汨水　屈潭

銅官渚　は長沙縣の西北銅官山下にあり。一に銅官浦となす、舊傳に楚の錢を鑄し處といふ、荊州記に曰く「程普、關羽分界於此。鑄銅棺爲誓。相侵者以銅棺貯之」

南湖　は善化縣の南にあり、錫潭水を引き通浴して成る、其地舊納氏に屬す、故に又納湖と名く、宋の張栻城南書院を建つる時聽雨舫、采菱舟を內に置き、湖名を東湖ともいふ、西湖は善化縣西七十里、爪洲湖は善化縣西二十五里にあり、

昭潭　は善化縣の東南昭山の下にあり、湘水の最も深き處也、或は謂ふ周の昭王南征して復らず、此潭に沒す、故に名くと、又湘州潭ともいふ、明一統志に曰く「潭水澄澈如墨、深不可測」

汨水　は湘陰縣北七十里にあり、岳州府平江縣より流入して西湘水に注ぐ、左傳に曰く「昭公五年楚子以駒。至於羅汭」史記列傳に曰く「屈原懷石。自投汨羅。以死」荊州記に曰く「羅縣北帶汨水。水源出豫章艾縣界。西流注湘。沿汨西北。去縣三十里。爲屈潭。卽原自沈處」異苑に曰く「長沙羅縣有屈原自投之川。山川明淨。異於常處。民爲立廟。在汨羅之西岸側。磐石馬蹟尙存。相傳云。原投川之日。乘白驥而來。」嗚呼これ屈子の石を抱て投ぜし處か、

過汨羅　日本　永井禾原

今人尙說汨羅濱。水色茫々淚滿巾。四十九年窮不死。（借用東坡先生成句）臨風吊古愧靈均。

雙楓浦　は瀏陽縣南三十里瀏水の中にあり、一に靑楓浦と名く、縣に八景ありて楓浦漁樵は其一也、

空泠灘　湘潭縣北六十里にあり、別名を空泠峽空靈岸といひ又空泠灘、空靈城、空零城、空靈灘に作る、土人之を空洲といふ、兩岸の石、懸鐘の如く驚浪奔雷、三峽に似たり、

過空靈岸詩　唐　杜甫

沄沄逆素浪。落落展靑眺。幸有舟楫遲。得盡所歷妙。空靈霞石峻。楓格隱奔峭。靑春猶無私。白日已徧照。可使營吾居。終焉託長嘯。毒瘴未足憂。兵戈滿邊徼。嚮者留遺憾。恥爲達人誚。廻帆凱賞延。佳處領其要。

鑿石浦　は湘潭縣西九十里にあり、

晩洲　は湘潭縣南百十里、石洲の北にあり、

關瀨　は益陽縣の西南にあり、關羽灘とも關侯灘ともいふ、南甘嶺故壘に對す、卽

ち關羽軍を水北に屯し、孫權魯肅及甘寧をして、之を是處に拒かしむ、三國吳志に曰く「甘寧隨魯肅、鎭益陽拒關羽、羽擇選銳士五千人、投縣上流十餘里淺瀨云、欲夜涉渡、肅便選千兵益寧、寧乃夜往、羽聞之懼、不渡而結砦、今遂名此處、爲關羽瀨、明代に青泥灣といふ、

諸葛井　は益陽縣東にあり、世に傳ふ漢の諸葛亮の鑿つ所と、又靈井ありて縣治內にあり、

洗藥池　は攸縣の東四十里司空山南にありて附近に揷劍泉あり、傳へいふ張司空劍を此に揷み泉湧出せりと、池中に龍須菜あり、味甘くして食すべし、夜間には水面に浮べるも日出つれは水中に沒す、人心を潔くして往けば采るに隨て得、若し雜ゆるに暈腥を以てすれは苦澀食するに堪えすといふ、

瀟水　は九疑山に出つ、南流して三江口に至り、東北湘水と合し又東北流して湘口に至り湘水と合して一となり遂に洞庭に入る、湖廣通志には營水と異名同水なりとし、地理今釋も亦瀟水は一名營水なりといひ、且水經注の洞庭之淵、瀟湘之浦の瀟は水の淸深なるものの謂にして水名にあらずといへり、未だ何れか是なるを詳かにせず、

瀟湘詩　唐釋齊己

二水遠難論、從離向坎奔、冷穿千嶂脈、淸過幾州門、闊去都凝白、傍來盡帶渾、經游聞舜禹、表裏見乾坤、浦靜魚閑釣、灣涼雁自屯、月來分夜底、雲度見秋痕、暮氣藏隣寺、寒濤話近邨、離騷傳永恨、鼓瑟奏遺魂、霧擁魚龍窟、槎欹島嶼根、秋風帆上下、落日樹沈昏、柳少沙洲缺、苔多古岸存、禽巢依橘柚、獺徑入蘭蓀、色自江南絕、名聞海內尊、吳頭雄莫遏、漢口狀堪吞、寥泬晴方映、馮夷信忽翻、渡遙峯翠疊、汀小荻花繁、勢接湖煙漲、聲和瘴雨歡、急搖吟客舫、狂濺野人尊、疏鑿誰窮本、澄鮮自有源、對茲傷九曲、含濁出崑崙、

黃溪　は零陵縣の東七十里にあり、源は陽明山に出づ、流れて福田山の東を經、北祁陽縣に至り白江水に合して湘に入る、明一統志によれば九疑山の西境也、

愚溪　は零陵縣西にあり、源は鵶山に出づ、其水徹底皆石也、分れて二派となり、一は東流して賢水に合し、一は北流鈷鉧潭を經て瀟水に入る、

愚溪詩序　唐柳宗元

瀟水之陽有溪焉。東流入於瀟水。或曰冉氏嘗居也。故姓是溪曰冉溪。或曰可以染也。名之以其能。故謂之染溪。余以愚觸罪。謫瀟水上。愛是溪。入二三里。得其尤絶者家焉。古有愚公谷。今余家是溪。而名莫能定。土之居者。猶斷斷然而不可以不更也。故更之爲愚溪。愚溪之上買小邱。爲愚邱。自愚邱東北行六十步。得泉焉。又買居之。爲愚泉。愚泉凡六穴。皆出山下平地。蓋上出也。合流屈曲而南。爲愚溝。遂負土累石塞其隘。爲愚池。愚池之東。爲愚室。其南爲愚亭。池之中爲愚島。嘉木異石錯置。皆山水之奇者。以余故咸以愚辱焉。夫水知者樂也。今是溪獨見辱於愚。何哉。蓋其流甚下。不可以灌溉。又峻急多抵石。大舟不可入也。幽邃淺陋。蛟龍不屑。不能興雲雨。無以利世而適類於世。然則雖辱而愚之可也。柳武子邦無道則愚。智而爲愚者也。顏子終日不違如愚。容而爲愚者也。皆不得爲眞愚。今余遭有道。而違於理。悖於事。故凡爲愚者莫我若也。夫然。則天下莫能爭是溪。余得專而名焉。溪雖莫利於世。而善鑒萬類。清瑩秀徹。鏘鳴金石。能使愚者喜笑眷慕。樂而不能去也。余雖不合於俗。亦頗以文墨自慰。漱滌萬物。牢籠百態。而無所避之。以愚辭歌愚溪。則茫然而不違。昏然而同歸。超鴻蒙混。希夷寂寥。而莫我知也。於是作八愚詩。紀於溪石上。

鈷鉧潭　元結大唐中興頌を作り顏眞卿之を崖に大書す

浯溪

鈷鉧潭　は零陵縣の西三里にあり、中に小泉あり愚溪に合して瀟水に入る、又小石潭、表家渦、石渠石澗等あり皆潭の左右にあり、柳々州記を作つて一々之をしるすものこれなり、

浯溪　は祁陽縣の西南にあり、水路百餘里にして流れ湘江に入り、水は清く石は峻しく風景絶奇、唐の上元中、經略使元結家居し、大唐中興頌を作る、顏眞卿之を此崖に大書せり、所謂る磨崖碑之れ也、

浯溪銘　唐　元結

浯溪在湘水之南。北滙於湘。愛其勝異。遂家溪畔。溪世無名稱者焉。自愛之故。命曰浯溪。銘曰。

湘水一曲。淵回旁山。山開石門。溪流潺潺。山開如何。巉巉雙石。臨淵斷崖。隔溪絶壁。山實殊怪。石又尤異。吾欲求退。將老茲地。溪古荒蕪。蕪沒蓋久。命曰浯溪。旌吾獨有。人誰遊之。銘在溪口。

大唐中興頌并序　同　人

尙書水部員外郎兼殿中侍御史荆南節唐判官元結撰金紫光祿大夫前行撫州刺

史上柱國魯郡開國公顏眞卿書

天寶十四年。安祿山陷洛陽。明年陷長安。天子幸蜀。太子卽位於靈武。明年。皇帝移軍鳳翔。其季復兩京。上皇還京師。於戲前代帝王。有盛德大業者必見于歌頌。若今歌頌大業。刻之於金石。非老於文學。其誰宜爲。頌曰。

噫嘻前朝。孽臣姦驕。爲悖爲妖。邊將馳兵。毒亂國經。羣生失宜。大駕南巡。百僚竄身。奉賊稱臣。天將昌唐。繄睨我皇。匹馬北方。獨立一呼。千麾萬旗。戎卒前驅。我師其東。儲皇撫戎。蕩攘羣兇。復復指期。曾不逾時。有國無之。事有至難。宗廟再安。二聖重歡。地闢天開。蠲除秊灾。瑞慶大來。凶徒逆儔。涵濡天休。死生堪羞。功勞位尊。忠烈名尊。澤流子孫。盛德之興。山高日昇。萬福是膺。能令大君。聲容沄沄。不在斯文。湘江東西。中直浯溪。石崖天齊。可磨可鐫。刊此頌焉。何千萬年。

上元二年秋八月撰。　大歷六年夏六月刻。

濂溪水　は道州の西にあり、源は安定山下に出て、東北宜水に合す、之を澧灘といふ、流れて湘江に入る。

送永倅周茂叔還濂溪詩　宋　任大中

君去何人最淚流。老翁身獨宿南州。隨君不及秋來雁。直到瀟湘水盡頭。

濂溪詩　宋　蘇軾

世俗眩名實。至今疑有無。怒移水中蟹。愛及屋上烏。坐令此溪水。名與先生俱。先生本全德。廉退乃一隅。因拋彭澤米。偶似西山夫。遂及世所知。以爲溪之呼。先生豈我輩。造化乃其徒。應同柳州柳。聊使恐溪恐。

石魚湖　道州の東憲泉の南にあり、

七泉　は道州の東北にあり、狀七井に類す、五泉は相連續し、二泉は稍離るゝも亦脈理相連流せり、溪となつて海に入る、

愛蓮池　は邵陽縣城の東北隅にあり、宋の周子、永州倅を以て郡事を攝し、池を闢き蓮を種ゆ方數十丈にして、中に石を壘み亭をつくれり、和軍州事傅伯崧扁して君子亭と曰ふ、上に光風霽月堂あり、後ろに四君子の祠あり、

曹婆井　は邵陽縣の東にあり、相傳ふ昔曹媼あり酒を賣る、一道人時に來つて飲を索む、媼頻りに之に與へて其値を索めず、道人去らんとするに臨み、藥一丸を與へて井中に投ぜしむ、井水乃ち美酒に變ず、後道人復來る、媼謝を致して曰く、但た

酷無きに苦しむ耳と、道人其貪を惡み又一丸を與ふ、之を投ずれば乃ち化して水となる、

武陵井　は武陽州治前渠水に臨む所にあり、舊傳に曰く武陵溪源と相通ずと、春深きころ桃花あつて源泉中より浮出す、

大江　は湖北の石首縣より湖南省に流入し、華容縣と湖北の監利縣との分界を經、又東南流して巴陵縣を經洞庭の諸水に會し、東臨湘縣界を經、又東流して湖北の嘉魚縣界に入る、岳陽風土記に曰く「樂史言、大江在巴陵、東北流入洞庭、今洞庭水會於江、非江流入洞庭也、荆江出巴蜀、自高注下、濁流洶湧、夏秋暴漲、則逆泛洞庭、瀟湘清流、頓皆混濁、岳人謂之翻流水、南至青草湖、或三五日乃還、俗云水神朝君山、岳陽井邑、舊皆瀕江、郡城西數百步、屢年湖水漱齧、今去城數十步、卽江岸、父老相傳、今江心舊閣閣也、北津舊去城角數百步、今偪近石背、蓋荆江日漱而南、湘江日漱而東也」云々

乘大風發巴陵詩　宋　陸　游

雪濺浪方作、翠颾山欲浮、奇哉萬頃湖、着我十丈舟、三老請避風、叱去非汝憂、神物識忠信、壯士憎淹留、鼙鼓催挂帆、揮手別岳州、仰視羣鵠翔、下闚百怪囚、衡湘清絕地、恨不從此游、聊須百斛酒、往醉庾公樓、

澧湖　は巴陵縣南にあり、一名翁湖、其東北隅を角子湖といふ、左傳に「定公四年、吳人敗楚於澧澨、五戰入郢」と卽此地也、爾雅に云ふ「河水決出還復入者、爲澧」と湖名の因て出づる所ならん、岳陽風土記に曰く「澧湖在州南、春冬水涸、昔人謂之乾湖、水經謂之翁湖、秋夏水漲卽渺瀰、容易可舟通閣子湖、又閣子湖、本角子湖語譌、以其在洞庭之角故、謂之角子湖、澧湖亦謂之閣子湖、楊行密以木籠鎖舟之地、或謂瀕湖、地卑歲苦水患、民多重屋以居、故謂之閣子湖、府志に曰く「角子湖、一名鴿子湖、楚許得勁潛軍鴿子湖、卽此」

洞庭湖　は禹貢の所謂九江にして、湖南衆水の匯となす、巴陵は其東に在り、華容及澧州の安鄉二縣は其北に在り、常德府の龍陽縣は其西南に在り、沅江縣は其南に在り、而して長沙府の湘陰縣は其東南に當る、周回八百餘清里、湖面平衍にして青草湖、翁湖、赤沙湖、黃驛湖、安南湖、大通湖等の諸湖を併せ合して洞庭湖を成す故に夏秋水漲るときは、怒濤澎湃魚龍出沒の大觀を成すも冬季水落つれば、衆湖俱に枯れ一望無邊の洲汀に變ず、山海經注に曰く「洞庭地穴也、在巴陵縣西、又有洞庭

陂。潛伏通江。離騷曰。遭吾道兮洞庭。洞庭波兮木葉下。皆謂此也」。水經注に曰く「湘水左會水清口資水也。世謂之溢陽江。湘水左徑鹿角山東。右徑謹亭戍西。又北合查浦。又北得萬浦。咸湘浦也。湘水左則沅水注之。謂之橫房口。東對微湖。右屬微水。西流注於江。謂之麋湖口。湘水左則灃水注之。世謂武陵江。凡此四水同注洞庭。北會大江。名之五渚。戰國策曰。秦與荊戰大破之。取洞庭五渚也。湖水廣闊五百餘里。日月若出沒於其中。湖之右岸有山。世謂之笛鳥頭石。石北右會翁湖口水。上承翁湖。左合洞浦。所謂三苗之國。左洞庭者也。又北對巖口。水色青異。東北入於大江。有清濁之別。謂之江會也」。岳陽風土記に曰く「灃鼎沅湘合諸蠻黔南之水。匯爲洞庭。至巴陵與荊江合而東。水經云。湖水廣五百里。日月出沒其中。大抵湖上舟行。雖泝流而遇順風。加之人力。自且及暮可二百里。岳陽西到華容。過大穴漢汴湖。一日程。又西到灃江及鼎州江口。皆通大穴漢赤沙三日程。南至沅江。過赤鼻山湖。四日程。又東至湘江。過磊石青草湖。兩日程。夏秋水漲。其道如此。冬春水落。往往淺澁。江道回曲。或遠或近。雖無風濤之患。而常苦閣」。禹貢蔡傳に曰く「禹貢九江。即今之洞庭也。水經言。九江在長沙下鳥西北。今岳州巴陵縣。即楚之巴陵。虞之下鳥也。沅水漸水元水辰水溆水酉水灃水資水湘水皆合於洞庭。意以是名九江」。統志に曰く「案以洞庭爲禹貢之九江。始於宋渤海胡氏曾氏。而折衷於朱子。近世多主其說。但九水中元水之元字。乃无字之僞。无水在今辰州府。下流入洞庭湖」。明統志に曰く「九江沅資湘最大。皆自南而入。荊江自北而過洞庭。每歲六七月間。岷峨雪消。水暴漲。自荊江逆入洞庭。清流爲之改色」。舊志に曰く「入湖九水。惟湘沅源最遠。故每歲視二水大小。爲湖面廣隘。而消長遲速。則又視江漢爲歸。若荊湘江漲。湖將不雨而溢」云々

洞庭湖詩　唐　賈至

江上相逢皆舊游。湘山永望不堪愁。明月秋風洞庭水。孤鴻落葉一扁舟。

楓岸紛紛落葉多。洞庭秋水晚來波。乘興輕舟無近遠。白雲明月弔湘娥。

臨洞庭詩　唐　孟浩然

八月湖水平。涵虛混太清。氣蒸雲夢澤。波撼岳陽城。欲濟無舟楫。端居恥聖明。坐觀垂釣者。徒有羨魚情。

秋望洞庭詩　唐　李白

清晨發巴陵。周覽無不極。明湖映天光。徹底見秋色。秋色何蒼然。際海俱澄鮮。山青滅

遠樹水綠無寒煙。來帆出江中。去鳥向日邊。風清長沙浦。霜空雲夢田。瞻光惜頹髮。閱水悲徂年。北渚既蕩漾。東流自潺湲。郢人唱白雪。越女歌采蓮。聽此更腸斷。憑崖淚如泉。

夜泛洞庭詩　同

日晚湘水綠。孤舟無端倪。明湖漲秋月。獨泛洞庭西。偶憩裴逸人。巖居凌丹梯。抱琴出深竹。爲我彈鵾鷄。曲盡酒亦傾。北窗醉如泥。人生且行樂。何必組與圭。

陪族叔煜中書舍人至游洞庭詩　同

洞庭西望楚江分。水盡南天不見雲。日落長沙秋色遠。不知何處弔湘君。

帝子瀟湘去不還。空餘草色洞庭間。淡掃明湖開玉鏡。丹青畫出是君山。

洛陽才子謫湘川。元禮同舟月下仙。記得長安還欲笑。不知何處是西天。

南湖秋水庭無烟。耐可乘流直上天。且就洞庭賒月色。將船買酒白雲邊。

洞庭湖西秋月輝。瀟湘江北早鴻飛。醉客滿船歌白紵。不知霜露入秋衣。

陪侍郎叔游洞庭詩　同

剡却君山好。平鋪湘水流。巴陵無限酒。醉殺洞庭秋。

過洞庭詩　唐杜甫

蛟室圍青艸。龍堆擁白沙。護隄盤古木。迎櫂無神鴉。破浪南風正。回檣畏日斜。湖光與天遠。直欲泛仙槎。

過南嶽入洞庭詩　同

洪波忽爭道。岸轉異江湖。鄂渚分雲樹。衡山引舳艫。翠牙穿蓼漿。碧節上寒蒲。病渴身何處。春生力更無。壤童黎雨雪。漁屋架泥塗。敧側風帆滿。微冥水驛孤。悠悠廻赤壁。浩浩略蒼梧。帝子留遺恨。曹公屈壯圖。聖朝光御極。殘孽駐艱虞。才淑隨廝養。名賢隱鍛鑪。邵平原入漢。張翰後歸吳。莫誤唳痕數。危檣逐夜烏。

望洞庭詩　唐劉長卿

萬古巴邱戍。平湖此望長。問人何淼淼。愁暮更蒼蒼。疊浪浮元氣。中流沒太陽。孤舟有歸客。早晚達瀟湘。

宿洞庭詩　唐李端

白水連天暮。洪波帶日流。風高雲夢夕。月滿洞庭秋。沙上漁人火。煙中賈客舟。西園與南浦。萬里共悠悠。

洞庭秋月行　唐劉禹錫

洞庭秋月生湖心。層波萬頃如鎔金。孤輪徐轉光不定。游氣濃濃隔寒鏡。是時白露三秋中。平湖月上天地空。岳陽城頭暮角絕。蕩漾巴童歌竹枝。連檣估客吹光笛。勢高夜久陰力全。爽氣肅肅開星躔。浮雲野馬歸四裔。遙望星斗當中天。天雞相呼曙霞出。斂影含光讓朝日。日出喧喧人不閑。夜來清景非人間。

望洞庭詩　同

湖光秋月兩相和。潭面無風鏡未磨。遙望洞庭山水翠。白銀盤裏一青螺。

洞庭阻風贈張十一詩　唐韓愈

十月陰氣盛。北風無時休。蒼茫洞庭岸。與子維雙舟。霧雨晦爭雷。波濤怒相投。鷄犬斷四聽。糧絕誰與謀。相去不容步。險如礙山邱。清談可以飽。夢想絕無因。男女喧左右。唬飢但啾啾。非懷北歸興。何用勝糲愁。雲外有白日。寒光自悠悠。能令暫開霽。過是吾無求。

洞庭湖詩　唐元稹

人生除泛海。便到洞庭波。怒浪沈西日。吞空接曙河。虞巡竟安在。軒樂亟曾過。惟有君山下。狂風萬古多。

自蜀江至洞庭湖口詩　唐白居易

江從西南來。浩浩無且夕。長波逐若瀉。連山整如劈。千年不壅潰。萬姓無顛溺。不爾民爲魚。大哉禹之蹟。導岷既艱遠。距海無咫尺。胡爲不訖功。餘水斯委積。洞庭與青草。大小兩相敵。混合萬丈深。淼茫千里白。每歲夏秋時。浩大吞七澤。水族窟穴多。農人土地窄。我今尙嗟嘆。禹豈不愛惜。邈未究其由。想古觀遺跡。疑此苗人頑。恃險不終役。帝亦無奈何。留患今與昔。水流天地內。譬如有血脈。滯則爲疽疣。治之右鍼石。安得禹復生。爲唐水官伯。手提倚天劍。重來親指畫。疏河以剪紙。決壅同裂帛。滲作膏腴田。蹋平魚鼈宅。龍宮變閭里。水府生禾麥。坐添百萬戶。書我司徒籍。

洞庭阻風詩　元傅若金

洞庭十月風勢號。沙頭客舟如繫匏。沅湘九道白波立。衡霍千峯元霧交。神龍欲蟄無定窟。黃鵠將歸愁故巢。咫尺城樓不得上。何因一望楚江郊。

洞庭湖詩　明徐渭

巴蜀雪水來。洞庭容不住。一夜風濤聲。漂却君山去。

洞庭湖歌

清　吳鴻

大湖何茫茫。乃在巴陵之西。瀟湘之東。奔流會九水。積氣涵鴻濛。汪洋演施八百里。日月沐浴經其中。上有湛湛虛廓之青天。下有百怪譎詭之靈宮。黃河東走不敢敵。直與滄海分元工。朝開遠煙碧。夕射流霞紅。老蛟鼓鐵笛。軒帝磨青銅。陰晴明晦各異狀。但見雲濤滉瀁點點飛征蓬。曉發湘浦。暮臨巴峯。遠州滅沒高樓龍。從湘君之山巍獨立。翠環十二青朦朧。九疑雲氣望不極。至今清淚留斑叢。何況涇水妹。霧鬢傷丰容。錢塘一怒萬霆發。柳生座上眞豪雄。咄哉書生作水伯。毋乃別有精靈通。古今荒怪類如此。奚論樓上恍惚餘仙蹤。高整雲中衣。俯納萬里風。生不願明璫綃縠笑語逢。亦不願白雲黃鶴凌虛空。江湖天遠百端集。懷古忽復心忡忡。范公作記元氣融。高壓詩筆張燕公。風煙千態入豪素。憂樂萬古蟠心胸。我心何爲不古同。長安極北雲山重。便欲呼吸一氣訴。眞宰長與湖水吐納無終窮。

洞庭八百里

日本　山崎犁雲

洞庭八百里。月照岳陽城。雁影波心動。秋聲笛裏生。欲揮懷古淚。難禁感時情。此意無人識。沈吟杯獨傾。

洞庭湖作二首

日本　佐々木信綱

月清み孤帆萬里の風うけて
夜すがらこゆる洞庭の湖

船人もいねしづまりし湖の月
なにとはなしに涙ぐまるゝ

入洞庭湖

日本　永井禾原

世事悠々付等閑。吟蹤乍落水雲間。十年夢想今初是。飽看洞庭湖上山。

古重陽日度洞庭湖

同

巴陵南去迹飄然。往事逝波徒自憐。佳節重陽天欲雨。平湖萬里水如烟。楚臣堯女空千古。黃菊丹萸又一年。故國弟兄應憶我。何來愁雁落沙邊。

木筏子二首

佐々木信綱

水の上の筏の上に家つくり
菜畑つくりて江をくだる人

むしろ世を槎にのりて海にとや
　思ひ立ちけむ水の上の家

洞庭湖舟中有客說海外壯遊者戲作二十八字　永井禾原

踏破全球巨眼開何須到此費詞材洞庭盆小君山豆河伯徒誇秋水來

蘆林潭阻風　永井禾原

洞庭怒浪蹴長空多少湘帆又阻風岸上酒家門半掩洲邊蘆荻路相通客眠漠々秋寒底雁落茫々暮色中冒雨舟人賒醉去當壚兒女茜裙紅

蘆林潭夜泊　佐々木信綱

江の村のともし火水にたゞよひて
　きぬたのひゞき西に東に

洞庭夜泊　日本　正木鶴山

白蘆新雁繫舟時風度明湖脈々吹一十二峰低不見湘君廟上月如眉

三湘浦　は巴陵縣北城陵磯に在り、一に侯景浦と名く、侯景の兵が湘東王繹に破られし所也、湘水瀟水と合し、烝水と合し、沅水と合す、故に三湘と稱する也

青草湖　は巴陵縣の西南に位し、湘水の匯する所なり、別名を巴邱湖ともいふ、增水期には洞庭に合して一となる、岳陽風土記に曰く、寰宇記云、郡有青草洞庭巴邱三湖、青草湖中有青草山、冬春水草皆青故也、洞庭洞府之庭、上有洞庭君廟堂、巴邱之名今不著、青草湖在壘石山、與洞庭相通、其南羅水出焉、故羅縣在其上、其北汨水出焉、下有潭、謂之屈原潭、屈原懷沙自溺之所、忠潔侯三閭大夫廟、在其上、南遷錄に曰く、洞庭西岸有沙洲堆阜隆起、下有青草湖、南名青草、北名洞庭、所謂重湖也、明史地理志に曰く、青草湖與洞庭連、亦曰重湖、云々

夜宿青草湖詩　唐　杜甫

洞庭猶在目青草續爲名宿漿依農事郵籤報水程寒冰爭倚薄雲月遞微明湖雁雙雙起人來故北征

重湖詩　宋　蘇軾

八月渡重湖蕭條萬象疏秋風片帆急暮靄一山孤許國心猶在康時術已虛岷峨千萬里投老得歸無

題龍陽青草湖　唐　溫如

西風吹老洞庭波。一夜湘君白髮多。醉後不知天涯水。滿船清夢壓清河。

鼉鶴灘　は巴陵縣の西北鰣魚洲の下にあり、湖水江に入る處也。岳陽樓の舊岸にして古しへ商賈船を此地に泊せしも、今は湮沒して復舟を通ぜず。

萊公泉　は臨湘縣北六十里甘泉寺中にあり、宋の寇準南遷の日、寺の東楹に題して曰く、平仲酌泉經此。回望北闕と、黯然として去る、未だ幾ならずして丁謂之茲を過ぎ西楹に題して曰く、謂之酌泉と、佛を禮して去る、後ち范諷湖南を安撫す。詩を寺に留めて曰く、平仲酌泉回北望。謂之禮佛向南行。煙嵐翠鎖門前路。轉使高僧厭寵榮。淳熙中張栻榜して曰く萊公泉と、泉味清美にして最も淪茗に宜しく、林麓廻抱して境亦幽勝なり、

赤沙湖　は華容縣の南にあり。赤亭湖ともいふ。禮水と通ず、夏秋の候は水漲りて洞庭と合す。杜甫道林嶽麓の詩に所謂殿角挿入赤沙湖なるもの即ちこれ也。舊記に曰く、「洞庭南連青草。西亘赤沙。七八百里」と、その赤沙と名くる所以は減水時にたゞ赤沙をのみ見るに因りてなりといふ、傳ふ湘東王の兵、侯景を破りしとき俄然崩潰せるものこれなりと

赤亭渚詩

吳江泛邱墟。饒桂復多楓。水夕潮波黑。日暮精氣紅。路長寒光盡。鳥鳴秋草窮。瑤水雖未合。珠霜藕過中。坐識物序晏。臥視歲陰空。一傷千里極。獨望淮海風。遠心何所類。雲邊有征鴻。

赤沙湖詩　清　潘　耒

鼓棹。遠青草。停橈已赤沙。湖光開曉鏡。山色上朝霞。月滉魚龍宅。霜寒雁鶩家。櫂歌聞欸乃。秋思渺無涯。

漸水　は武陵縣北にあり、源は梁山に出て龍陽縣の西北に流入して沅水に入る、或は澹水、鼎水の名あり、水の沅に入る所を鼎口といふ、傳へいふ、昔神鼎ありて其間に出づ、宋の朗州を改めて鼎州となせしはこれを以て也と、

崔婆井　は武陵縣の西三十里平山の下にあり。傳ふ、宋代に道士張虛白なるものあり、嘗て酒姥崔氏に館す、姥飲ましむるに醇酒を以てし年を經て償を責めず、虛白欲する所を詢ふ、姥江水の遠く汲むに便ならざるをいふ、虛白宅旁の地を指して井を掘らしむ、數尺ならずして泉を得、味甘洌也、人爭ふて之を市ふ、後虛白仙去

す、後郡人余安期之と楊州に遇ふ因て、詩を姥に寄せて曰く「武陵溪畔崔婆酒。天上應無地下有。南來道士飲一斗。醉臥白雲深洞口。」と

明月池　は桃源縣の西南にあり、沅水の一局部にして灣狀半月をなし、清潭鏡徹、上は則ち風籟空に傳はり、下は則ち泉響斷たず、行者楫を擁して嬉游徘徊し愛翫せざるはなしといふ、

滄浪水　は龍陽縣の西にあり、滄浪の二山より發源し合して一水となれる也、所謂屈原行吟澤畔。漁父歌滄浪。とは即ちこれ也、滄港より沅江に入る、

太白湖　は龍陽縣東八十里にあり、西南は天心湖と會し、南北は洞庭湖に通ず、相傳ふ唐の李太白嘗て此に游ふ、故に名くと、

墨池　は龍陽縣西淨照寺にあり、唐の張旭か書を學びし所にして亭あり、宋の劉子澄、池亭の頹廢せしを闢き石を立てゝ其事を記し、明の劉之龍復重建し額を作りて曰く雲煙深處と、其亭に登れば東に洞庭を望み、西に陽山を望み、金牛岡南に居り、芷水北に在り、形勢壯麗、仙迹宛然たりといふ、

沅水　は源を貴州の平越、都匀附近及湖南の南方靖、城步附近に發し、辰谿、瀘溪、辰州、桃源、常德、龍陽等の府縣を經て沅江縣に入り湘水と合して洞庭に入る、之を沅湘といふ、湘水に次て水運に富む大江也、

春滯沅湖有懷山中詩　唐　李白

沅湘春色還。風暖烟草綠。古之傷心人。於此腸斷續。予非懷沙客。但美采菱曲。所願歸東山。寸心於此足。

夜發沅江詩　唐　皇甫冉

半夜回舟入楚鄉。月明山水共蒼蒼。孤猨更發秋風裏。不是愁人亦斷腸。

夜坐聽沅江水聲詩　宋　王庭珪

雨過風林生夜清。坐邀明月正關情。漁童醉後莫吹笛。要聽一江秋浪聲。

沅江晚泊詩　明　王守仁

去時煙雨沅江暮。此日沅江暮雨歸。水漫遠沙邨市改。泊依舊店主人非。草深廢宇無官住。花落僧房自鳥曉。處處春光蕭索甚。正思荊棘掩蓬扉。

送吳十九往沅陵詩　唐　王昌齡

沅江流水到辰陽。谿口逢君驛路長。遠謫誰知望雷雨。明年春水共還鄉。

辰溪曉泛詩　　明　嶽　瑄

沅水一千里。辰谿又泛舟。山雲聯雨暗。身世與天游。已覺雞聲遠。遙看野樹秋。所經多險阻。還似解離憂。

資水　は源を寶慶附近に發し、新化安化益陽を經て沅江に入り洞庭に注ぐ、湘、沅、灃、資を湖南の四水とし、洞庭に入るの最大江流とす、

天心湖　は沅江縣の西北四十里にあり、資水の會處也、

關洲　は沅江縣の東南五十八里にあり、三國の當時孫權、劉備が已に蜀を得しを以て使を遣り荆州を還さんことを求む、備曰く、須く涼州を得て乃ち相與ふべしと、權之を患へ呂蒙を遣りて長沙、零陵、桂陽の三郡を襲はしむ、備兵五萬を引て公安を下り、關羽をして益陽に入らしむ、此洲は羽が兵を屯せし處、故を以て名づく、

臥龍墨池　は沅江縣の南三里にあり、諸葛高の營て硯を滌ひし處なりといふ、

武溪　は瀘溪縣西にあり、源は武山に出て、小河を合し縣の南を徑て沅水に合す、別名を武水とも、亦盧水ともいふ、建武二十三年、精夫相單程等寇す、武威將軍劉尚、兵萬餘を發して武溪に入り、之を擊ちし地となす、伏波將軍馬援南征の時門生爰寄生善く笛を吹く援歌を作つて之に和し、武溪深と名く、

武溪深行　　漢　馬援

滔滔武溪一何深。鳥飛不度獸不能臨。嗟哉武溪多毒淫。

郴江　は郴州の東北にあり、源を黃岑山に發し北流して耒水に入る、一に黃水と名く、水流蘇仙山下を過ぐるや兩岸の山勢峽の如しといふ、水經注に曰く「黃水出郴縣西黃岑山東北流。案盛宏之云。衆山出注於大溪。號曰橫流溪。溪水甚小。冬夏不乾。俗亦謂之貪泉。庾仲初云。嶠水南入始興溱水。注海。即黃岑水。入武溪者也。北水入桂陽湘水注於大江。卽是水也。又東北逕其縣東。又合除泉水。又北流注於耒水。謂之郴口。」と、

圓泉　は郴州の南十五里にあり、一に除泉と名く、舊時は一邊は暖に一邊は冷に、冷處は極めて清綠、淺ければ則ち石を見、深ければ則ち底なし、暖處の水は白く且濁れり、元素既に殊なり、涼暖亦異なる、その除泉と名くるは猶江乘の半湯泉の如しと傳るも、今はこの事なしといふ、明の何孟春の圓泉記に曰く、「荆州記云。桂陽郡有圓泉。一邊冷一邊暖。冷處清且綠。暖處白且濁。吾郡圓泉水外。別無圓水。水今無此異。豈水脈今與昔不同耶。意者昔人好奇。於耳目。僻遠地。空言以詫駭。耳。此等記錄在天下。

往往而非有驗之事。弗信可也。」云々

燕泉　は郴州の西南にあり、燕來る時泉生し、去る時泉涸る、極めて清冷也、旁に流杯池ありて盤曲紆折すといふ、何孟春閑居の地也、

白水　は宜章縣の西北五里寶雲山の左にあり、高きより流下し瀑布の如し、雨ふらんとすれば則白く、霧れんとすれば則ち虹蜺の如しといふ

茹水　は澧州の東六里にあり、九澧の一にして源を龍茹山に出す、水色清澈、白石青沙、楚の襄王の所謂、茹溪の流を飲むといふものこれ也、

潛水　は、澧州の西三十里にあり、九澧の一也、王仲宣が士孫文始を贈るの詩に悠悠潛澧とあるはこれ也、

澧水　は源を安福縣西に出し、東北流して慈利縣、石門縣、澧州を經、又東南流して安鄉縣を經、遂に東流して岳州の華容縣界に至り洞庭に入る、舊澧水は澧州城下を經、瀦して池となり、秋冬には水涸れしを明の參政劉廷誥之を濬へて新開河と名く、九澧とは茹、溫、溧、渫、黄、涔、潛、道、澧の九水をいふ、輿地紀勝には「楚辭、沅有芷兮澧有蘭。故名蘭江。又云。遺余佩兮澧浦。故又稱佩浦」といへり、

仙眠洲　は澧洲の東一里、澧江の中にあり、唐の李羣玉が書を讀みし處といふ、

景港河　は安鄉縣東にあり、湖北公安縣四水口より分流し縣の界靈石湖に至り、南丈田邨の東を經、又右東田湖水に會し、南景港渡にて分れて二流となり、一は西南流して中澌港となり、又南して南澌港となり、澧水に入つて常德府龍陽縣界に至り、一は東して岳州府華容縣界に至つて澧水に入る、これ三代以前の江水の經流にして禹貢に所謂江を導て東澧に至るとは是也、

蒙泉　は石門縣西、花山下にあり、五雷山此に至て忽然開朗し兩水竝び流れて山川窈窕、石門の最勝處たり、

九渡水　は慈利縣西三十里にあり、水源は南九渡山にして北仙人樓下を經、瀝溪を下り、曲折逶迤し遂に北流して澧水に注く、

大灘　は桂陽州西、春水の洲に在り、十八灘ありて水石相激すること幾ど二十里、其灘の名を得るもの十あり、曰く觀音灘、水勢稍殺く、曰く歐公灘、行舟此に至て皆陸に登る、知州吳淵、山を鑿つて路を通じ纔に一棧を容る、昔歐公なるものありて此に溺る、曰く點鐙灘、兩峯陿促、巨石嵯峨、水勢と消長隱見す、曰く都管灘、傑石あり

て中流に峙ち、旁に小石多く拱揖するが如し、曰く獅子口灘、牙吻屈曲、江濤に迎吼す曰く老虎口灘、巨石岸左より下垂し虎の蹲踞するが如し、曰く大灘、石の高さ丈餘、倒瀉飛流、最も險阻なり、曰く湄灘、衆石排列し水漲尤も險なり、曰く黄牛灘、亂石水中に堆列す、曰く獐尾灘、常寧縣界に接し、大勢遂閣、水亦稍平なり、

第二章　名所舊蹟

八景臺、―郡湘亭、―春暉亭、―明淳王府、―梅園、―賈誼故宅、―定王臺、―道鄉臺、―赫曦臺、―郡京臺、―隱相臺、―遺笏堂、―分秩亭、―關壯繆故墨、―合江亭、―開雲樓、―紫金臺、―李泌故宅、―風雜亭、―秦馳道、―西亭、―元結故宅、―有庫城、―愛蓮亭、―周子故宅、―邵陽愛蓮亭、―希濂堂、―漁父亭、―查閣、―岳陽樓、―軒轅臺、―屈原宅、―韋華臺、―細腰宮、―東山草堂、―寓賢閣、―榮王府、―北樓、―又魚亭、―岳樞密行府、―韓張亭

八景臺　は長沙縣西にあり、宋の嘉祐中に築く、宋廻圖を作り、陳傅良二亭を傍に建て、米芾之に詩を題して後大に著はる、八景とは曰く瀟湘夜雨、洞庭秋月、遠浦歸帆、平沙落雁、煙寺晚鐘、漁邨夕照、山市晴嵐、江天暮雪これ也

八景詩序　宋　米芾

瀟水出道州。湘水出全州。至永州而合流焉。自湖而南。皆二水所經。至湘陰始與沅水會。又至洞庭與巴江之水合。故湖之北則漢沔湯湯。不得謂之瀟湘。瀟湘之景。可得聞乎。洞庭南來。浩淼沈碧。盪醇層巖。繇衍千里。際以天宇之虛碧。雜以煙霞之吞吐。風帆沙鳥。出沒往來。水竹雲林。映帶左右。朝昏之氣不同。四時之候不一。此則瀟湘之大觀也。若夫八景之極致。則具列於左。並記以詩。

瀟湘夜雨詩并序

苦竹叢翳。鷓鴣哀鳴。江雲黯黯。江水冥冥。飄河倒海。若注若傾。舞泣珠之淵客。悲鼓瑟之湘靈。

大王長嘯起雄風。又逐行雲入夢中。想像瑤臺環佩濕。令人腸斷楚江東。

山市晴嵐詩并序

依山爲郭。列肆爲居。魚鰕之會。蔆芡之都。來者于于。往者徐徐。林端縹緲。巒表縈紆。翠含山色。紅射朝暉。虛不盈乎一掬。散則滿乎太虛。

亂峯空翠晴還濕。山市嵐昏近覺遙。正值微寒堪索醉。酒旗從此不須招。

遠浦歸帆詩并序

晴嵐映波。落霞照水。有葉其舟。捷於飛羽。幸濟洪濤。將以甯處。家人候門。歡笑容與。漢江游女石榴裙。一道菱歌兩岸聞。估客歸帆休恨望。閨中紅粉正思君。

煙寺晚鐘詩并序

暝入松門。陰生蓮宇。杖錫之僧。將歸林渚。蒲牢一聲。猨驚鶴舉。幽谷雲藏。東山月吐。絕頂高僧未易逢。禪林長被白雲封。殘鐘已罷寥天遠。杖錫時過紫蓋峯。

漁邨夕陽詩并序

翼翼其廬。瀕涯以居。泛泛其艇。依荷與蒲。有魚可膾。有酒可霑。收綸卷網。其樂何如。西山之陲。在我桑榆。

曬網柴門返照新。桃花流水認前津。買魚沽酒湘江去。遠弔懷沙作賦人。

洞庭秋月詩并序

君山南來。浩浩滄溟。飄風之不起。屑浪之不生。夜氣既清。靜露斯零。素娥浴水。光蕩金精。倒覓裳之清影來。廣樂之天聲。纖雲不起。上下虛明。

李白曾移月下仙。煙波秋醉洞庭船。我來更欲騎黃鶴。直上高樓一醉眠。

平沙落雁詩并序

霜清木落。蘆葦蒼蒼。羣鳥蕭蕭。有列其行。或飯或啄。或鳴或翔。匪上林之不美。懼矰繳之日。將雪飛水宿。聊以隨陽。

書斷衡陽暫此迴。沙明水碧岸莓苔。相呼正喜無矰繳。又被孤城畫角催。

江天暮雪詩并序

歲暮江空。風嚴水結。馮夷翦水。亂飄灑雪。浩歌者誰。一蓬載月。獨釣寒潭。以寄清絕。蓑笠無蹤失釣船。彤雲黯澹混江天。湘妃獨對君山老。鏡裏修眉已皓然。

八景詞　宋　鍾世賢

瀟湘夜雨詞

日暮大江橫。水闊雲平。誰知雲水總無情。慕地釀成秋夜雨。滴盡殘更。點點打窗聲。紙張寒生。芭蕉葉上最凄清。多少離人眠不得。坐到天明。

洞庭秋月詞

霜落洞庭秋。四宇雲收。影搖孤月夜光浮。何處仙人吹玉笛。黃鶴樓頭。不洗古今愁。祇

管清幽。琉璃盤內水晶毬。照徹君山千萬尺。便是瀛洲。

遠浦歸帆詞

遠水接天浮。渺渺扁舟。去時花雨送君愁。今日歸來黃葉落。又是深秋。聚散兩悠悠。白盡人頭。片帆孤影下中流。載得古今多少恨。付與沙鷗。

平沙落雁詞

無處著烟霞。漠漠平沙。幾行雁陣晚風斜。寫破一天秋意思。飛過漁家。切莫近蘆葭。莫近蘆花。好來此地作生涯。祇恐夜深邊塞上。驚起胡笳。

煙寺晚鐘詞

煙鎖梵王宮。隱隱疏鐘。一聲遙在月明中。惱殺歸鴻留不住。付與西風。過耳總成空。何事忽忽。少年催作白頭翁。今古相推敲不盡。此恨無窮。

漁村夕照詞

薄暮大江寒。流水潺潺。漁翁家住蓼花灣。到老不知城市路。無事相關。日落半銜山。倦鳥知還。半輪斜影畫圖間。收拾綸竿沽一醉。暫且偷閑。

山市晴嵐詞

山市近山城。微雨初晴。曉來嵐氣撲天清。道是似煙煙又重。似霧還輕。莫怪不分明。望眼花生。碧紗籠裏有人行。說與畫家難著筆。空寂無聲。

江天暮雪詞

雪暗楚天遙。萬木蕭蕭。朔風翦就素花飄。畫角數聲吹不散。一片瓊瑤。歷損臘梅梢。遠倒漁樵。祇恐飛來双鬢上。白了難消。

八景詩　元　揭奚斯

遠浦歸帆

冥冥何處來。小樓江上開。長恨風帆色。日日誤郎回。

煙寺晚鐘

朝送山僧去。暮喚山僧歸。相喚復相送。山露濕人衣。

漁邨夕照

定從海底出。且向平沙照。魚網未曾收。漁翁還下釣。

洞底秋月

灝氣自澄穆。碧波還蕩漾。應有凌風人。吹笛君山上。

江天暮雪

孤舟三日住。不見有人家。紛紛竹籬處。卻恐是梅花。

瀟湘夜雨

滪滪湘江樹。荒荒楚天路。穩繫渡頭船。莫教流下去。

平沙落雁

天寒還塞遠。水落沙渚闊。已逐夕陽低。還向黃蘆沒。

山市晴嵐

近樹參差見。行人取次多。板橋雙路口。此處幾回過。

八景詩　明宣宗

瀟湘夜雨

濃雲如墨黯江樹。九疑山迷天色暮。蒼松巖下客維舟。魚龍鼓舞飛煙霧。但見長空風雨來。勢與雲夢相周廻。三湘淋漓瀉銀竹。七澤洶湧驚春雷。長江橫絕巴陵北。一水悠悠漾空碧。洪濤巨浪頃刻中。虹橋隱隱無人迹。前溪遙見野人家。槿籬茅屋半敲斜。高樓誰得江湖趣。坐聽瀟湘對燭花。隔浦鐘聲來遠寺。曉色蒼涼喜開霽。青天萬里白雲收。滿目湘山翠欲流。

洞庭秋月

洞庭秋水清徹底。岳陽城頭月初起。巴山落影半湖陰。金波倒浸芙蓉紫。須臾素影當瑤空。寒光下燭馮夷宮。雲夢微茫水鑑裏。沅湘浩蕩玉壺中。霜華初飛風浪息。萬籟無聲夜光寂。彷彿湘靈汗漫遊。虹橋直跨天南北。但見鶴汀與鷺洲。折葦寒沙帶淺流。縞衣綸巾湘中老。高歌取醉岳陽樓。同看月下西山去。湖水悠悠自東注。洞庭咫尺西南陬。赤岸銀河萬里秋。

山市晴嵐

茅屋幾家山下住。長橋遙接山前路。湖天雨過曉色開。滿市晴嵐帶烟樹。遠山近山杳靄閒。邨前邨後相彌漫。浮藍積翠久不散。懸崖滴露松梢寒。湘市老人頭半白。翠僕從容隨杖屨。林外青帘賣酒家。山殼野荻漁樵客。洞庭春來湖水生。君山到處花冥冥。波光澄涵橫素練。樹色掩映開銀屏。撫景徘徊看未足。颯颯天風滿林麓。何人獨倚岳陽樓。長笛數聲山水綠。

平沙落雁

秋江水落波痕淺。平沙渺渺連天遠。白蘋紅蓼滿瀟湘。枯葦黃蘆迷漢沔。鴻雁恒憐澤國遊。數聲忽報楚天秋。萬里避寒遙朔漠。幾行帶雲下汀洲。雲水微茫少煙緻。歲歲南來歡有託。霜田豈乏稻粱謀。江邨自得棲遲樂。黃鶴樓前鐵笛鳴。時驚嘹唳兩三聲。湖通巴蜀寒煙淨。天接荆衡暮景澄。嗟爾迢迢自荒服。慕戀中華生計足。行當懋德覆群生。盡使洪纖皆發育。

遠浦歸帆

斜陽欲掛晴川樹。丹霞遠映瀟湘浦。洞庭湖上接星沙。萬里歸舟自何處。雲帆縹緲天際來。勢壓滔天雲浪摧。須臾已達漢江曲。江聲洶湧如鳴雷。漢陽城頭夜吹角。暫從鸚鵡洲邊泊。長笛一聲山月低。殘更數點江雲薄。西蜀滇南與海通。浮波來往自無窮。暮天已卷三湘霧。曉日還懸七澤風。突兀危樓看江水。臨眺何人頻徙倚。寒鴉飛盡淡煙收。浩蕩遙空淨如洗。

漁邨夕照

岳陽城頭望湘浦。芳草垂楊迷古渡。晴嵐霏白夕陽紅。渺渺江邨天欲暮。漁家茅屋住汀洲。罷釣歸來穩繫舟。自念生涯在網罟。臨風高挂向船頭。出水鮮鱗雜紫蟹。鑪頭有酒還堪買。東鄰西舍當此時。歡笑聲餘歌欸乃。豚魚吹浪白連天。隔江賈客促歸船。餘光遠映雙烏外。殘影半落孤鴻邊。湖上高樓雲外起。下瞰湖湘千百里。憑高一望楚天低。雲樹蒼蒼暮山紫。

煙寺晚鐘

煙光漠漠春山紫。古寺深藏萬松裏。夕陽西墜翠壑陰。隔林藹藹疏鐘起。瀟湘無風波浪停。恍如水底鳴長鯨。山僧策杖歸來晚。遙聽穿雲百八聲。緩急因風如斷續。遠徹山阿並水曲。已隨暮角響江城。更送樵歌出林麓。垂橋二客心悠然。偶立遙看瀑布泉。高山流水有深意。咫尺不聞音韻傳。乾坤無塵萬籟淨。朗然空谷聲相應。高秋正遇曉霜清。分明若向豐山聽。

江天暮雪

大江東去天連水。薄暮蕭蕭朔風起。須臾吹卻凍雲同。六花亂撒滄波裏。橋南橋北樹槎枒。隔浦紛紛集晚鴉。馬嘶百折蟠雲路。犬吠孤村賣酒家。俯仰山川同一色。眼前不辨浪花白。茫茫七澤與三湘。分明皓彩遙相射。漁翁獨酌寒江濱。頃刻瓊瑤飛滿身。得魚醉唱湖南曲。欸乃一聲天地春。有時倚棹弄長笛。洞庭景物清無敵。中流迢遞望君

山。但見遙空聳銀壁。

此他洞庭八景に關する後人の詞賦詩章汗牛酋ならず今皆省略に從ふ

望湘亭　は長沙縣西、湘江の濱にあり、亦湘江亭ともいふ

湘州北亭詩　唐　張　說

人務南亭少。風煙北院多。山花迷徑路。池水拂藤蘿。萍散魚時躍。林幽鳥任歌。悠然白雲意。乘興抱琴過。

陪辛大人西亭宴觀妓詩　唐　劉長卿

歌舞憐遲日。施麾映早春。鶯嚶隴西將。花對洛陽人。醉罷知何事。恩深忘此身。任他行雨去。歸路蕙香塵。

蔡伯灝觀察招飲道署之養雲山館賦呈　日本　永井禾原

官舍偏如隱士居。菊花楓葉滿階除。琴樽待客歡傳盞。風雨尋君出有輿。時務何追賈生策。筆鋒不讓右軍書。披襟共話隣交事。友意尤濃禮法疎。

長沙雜感　同

秋風澤國稻粱豐。三日長沙擊客蓬。一世孤忠憐屈子。中興偉業憶曾公。潘湘自古江波闊。岳嶽千今山勢雄。此地知分天下富。千帆如織自西東。

長沙寄馮都戍　日本　荒井圖南

擒將寨旗二十前。老來猛氣尚依然。漢家近日漸多事。勿使封侯屬少年。

夜黃埔江を發す　日本　佐々木信綱

健兒多き湖南さぐると燈火の光寒き夜を大江さかのぼる

湘南健兒歌　荒井圖南

奈此赤縣陸沈何。慷慨誰把魯陽戈。愛人家國眞多事。又從勾吳洞庭過。平生一掬傷時淚。迸入三湘健兒歌。歌聲嗚咽水聲激。淒風苦雨江水波。我告健兒勿嘆息。明年破虜收山河。三戶滅秦跡猶在。千秋覇氣未銷磨。投杯長揖我將去。傷心不唯離愁多

春暉亭　は長沙縣の北にあり

題潭州徐氏春暉亭詩　宋　蘇　軾

瞳瞳曉日上三竿。客向東風竟倚欄。穿竹鳥聲驚步武。入籠花影落杯盤。勿嫌步月臨平圃。好向乘槎問海灘。勝概直應吟不盡。憑君寄與畫圖看。

明潭王府

明潭王府　は長沙府城の正中にありて四門を有す、南を端禮といひ、北を廣智といひ、東を體仁といひ、西を遵義といひ、殿を承運と名く、今は其地、倉を建て土人呼んで王城堤といふ、

過故宮詩　清　江有溶

鬼鬼城闕楚山川。茅土於今二百年。麓谷西屏連石鼓。湖湘百帶到雲田。粵中帝子悲華表。水底王孫泣杜鵑。縱使劫灰燒欲盡。香花不散是宮煙。

梅園

梅園　は長沙縣の東十五里にあり、

梅塢詩并序　宋　張栻

舊聞。長沙城東。梅塢甚盛。近歲因買園其間。念欲一往。未果也。癸巳仲冬。始與客遊。過東屯渡十餘里間。玉雪彌望。平時所未見也。歸而爲詩。以紀之。

半生客荆楚。歷覽非一隅。寧知城東路。有此梅萬株。瘦馬踏曉寒。清風起菰蒲。度溪上平坂。頓覺景物殊。霏雪下晴昜。香霧迷前驅。近坡與遠嶺。玉立同一區。老樹固瑰特。小枝亦敷腴。有如衆君子。藂聚德不孤。精粗無可揀。酥酪與醍醐。千株未覺多。此語信不誣。班荆或小憩。沽酒時一斟。勝賞諒難盡。昭質知不渝。我有十畝園。邱壑正盤紆。念此

賈誼の故宅

縞袂侶。歲晚足我娛。來遊自今始。琴書與之俱。回首桃李場。冷淡莫揶揄。

賈誼故宅　は長沙縣西北濯錦坊にあり、今尚依然として舊趾を存し古井あり最も深くして上狹く下濶く、狀壺に似たり誼の穿つ所と云ふ、中堂に扁して治安堂と云ふ、

過賈誼宅詩　唐　劉長卿

三年謫宦此栖遲。萬古惟留楚客悲。秋草獨尋人去後。寒林空見日斜時。漢文有道恩猶薄。湘水無情弔豈知。寂寂江山搖落處。憐君何事到天涯。

定王臺

定王臺　は善化縣にあり、漢の長沙定王發、臺を此に築き母唐姬の墓を望みし處と傳ふ、

道鄉臺

道鄉臺　は善化縣嶽麓寺の旁にあり、宋の鄒浩、道鄉と號す、衡州に謫せられて途、潭州を過ぎ、州守溫益の逐ふ所となる、山僧あり留めて此に宿せしむ、後張栻臺を築きて之を表し、朱子石に刻して道鄉臺といふ、

赫曦臺

赫曦臺　は善化縣嶽麓山にあり、朱子嘗て嶽麓山頂を赫曦と曰ふ、亦之を以て臺に名く、

登赫曦臺聯句詩　宋朱熹。張栻

泛舟長沙渚。振策湘山岑。煙雲渺變化。宇宙窮高深。懷古壯士志。憂時君子心。寄言人中客。莽蒼誰能尋。

望赫曦臺詩　明王守仁

隔江嶽麓縣情久。雷雨瀟湘日夜來。安得輕風掃微靄。振衣直上赫曦臺。

望京臺（一名禁蛙臺）　は湘陰縣北望京鎮にあり、傳へいふ、元順帝出でゝ靖江に居り、迎へられて歸り、位に即く、此に至るや地名を從臣に問ふ、對へて曰く望京と、乃ち登りて北望す、時に蛙鳴耳を聒ふす、帝土神に勅して之を禁じ、今に至て聲無し、因てまた之を禁蛙臺といふ、

隱相臺　は瀏陽縣の南猴號山にあり、唐の裴休の退隱處なりといふ、

遺笏堂　は瀏陽縣南石霜寺にあり、傳へいふ唐の裴休寺僧普會に謁す、會休を拈し象笏を執り問て曰く、天子手中にあつては圭たり、官人手中にあつては笏たり、老僧手中にあつては甚麼となすと、休以て對ふるなし、因て笏を留て寺を鎮すと、

分袂亭　は湘潭縣の西南橘洲の北岸にあり、宋の朱子張拭と袂を分ちし處也、元の謝一魯、亭を建て、歐陽元、額を題す、

關羽橋　は益陽縣の西南にあり、漢建安中關羽兵を此に屯して吳の魯肅と江を隔てゝ相拒きし跡と傳ふ、

甘寧故壘　は益陽縣南にあり、夜月臺とも稱す、吳の甘寧關羽を拒くために築きしものなりといふ、

合江亭　は衡陽の石鼓山にあり、烝湘二水の合流處にして、唐刺史齊映之を建つ、韓愈の合江亭詩碑あり、書は宋の張拭也、

題合江亭寄刺史鄭君詩　唐　韓愈

江亭枕湘江。蒸水會其左。瞰臨渺空闊。綠淨不可唾。維昔經營初。邦君實王佐。翦林遷神祠。買地費家貨。梁棟宏可愛。結創麗匪過。伊人去軒騰。茲宇遂頹挫。老郎來何暮。高唱久乃和。樹蘭盈九畹。栽竹逾萬箇。長綆汲滄浪。幽蹊下坎坷。波濤夜俯聽。雲樹朝對臥。初如遺宦情。終乃最郡課。人生誠無幾。事在悲豈那。蕭條絲歲時。契闊幾庸懦。勝事誰復論。醜聲日已播。中丞黜凶邪。天子罔窮餓。君侯至之初。閭里自相賀。淹滯樂閑曠。勸苦勸慵惰。爲予埽塵階。命樂醉衆座。窮秋感平分。新月憐半破。願書巖上石。勿使塵

泥滓。

石鼓合江館詩　唐　柳宗元

九疑潺傾莽。臨源委瀠廻。會合屬空曠。泓徵停風雷。高館軒霞表。危樓臨山隈。茲辰始澄霽。纖雲盡褰開。天秋日正中。水碧無塵埃。窅窅漁父唫。叫叫飢鴻哀。境勝豈不豫。慮分固難裁。升高欲自舒。彌使遠念來。歸流駛且廣。汎舟絕沿洄。

合江樓詩　宋　文天祥

天上名鶉尾。人間說虎頭。春風千萬岫。秋水兩三洲。客晚蒹黃葉。官閒笑白鷗。雙江日東下。我欲賦扁舟。

西楚驚鴻晚。東淮落木秋。烝湘今石鼓。句宛古宣州。白日聊清賞。青山總舊游。不知滄海水。何處接天流。

開雲樓　は衡山縣南嶽行祠にあり、唐の韓愈嘗て此を經、宋の蘇軾曰く、愈能く衡山の雲を開くと、故を以て樓に名く、

紫金臺　は衡山縣西三里にあり、臺の徑三丈、傳へいふ昔禹南巡して九疑を望み、舜をこゝに祭ると、

李泌故宅

鳳雛亭

秦時の馳道

西亭

聽泉亭

李泌故宅　は衡山縣西北煙霞峯下にあり、後鄴侯書院を建つ、

鳳雛亭　は耒陽縣南にあり、蜀漢の龐統、人之を鳳雛先生と稱し、臥龍諸葛亮に對す、統嘗て此地に縣令たり、後人亭を建てゝ之を表す、

秦馳道　は零陵縣東八十里にあり、漢書賈山傳に所謂「秦爲馳道於天下、南極吳楚」といふもの是れ也、道の闊さ五丈餘にして近時の河道に類し、兩岸削るか如く夷險一致す、始皇帝天下に命して道を修めしめ以て遊幸に備へたるなり、

西亭　は永州府城內法華寺側にあり、旁らに聽泉亭あり、又南亭あり皆柳宗元謫宦中の經營する處に係る、

法華寺新作西亭記　唐　柳宗元

法華寺居永州。地最高。有僧。曰覺照。照居寺西廡下。廡之外有大竹數萬。又其外。山形下絕然。而新蒸篠蕩。蒙雜擁蔽。吾意伐而除之。必將有見焉。照謂余曰是。其下有陂池芙蕖。中以湘水之流。乘山之會。果去是其見遠矣。遂命僕人。持刀斧。群而翦焉。叢莽下頹。萬類皆出曠焉。茫焉。天爲之益高。地爲之加闊。邱陵山谷之峻。江湖池澤之大。咸若有增廣之者。夫其地之奇。必以遺乎後。不可曠也。余時謫爲州司馬官外員。而心得無

事。乃取官之祿秩。以爲斯亭。其高且廣。蓋方丈者二焉。或異照之居於斯。而不蚤爲是也。余謂。昔之上人者。不起宴。坐足以觀於空色之實。而游乎物之終始。其照也逾寂。其覺也逾有。然則謂之礙之者。爲果礙耶。今之闢之者。爲果闢耶。彼所謂覺而照者。吾亟知其不由是道也。豈若吾族之翠翠於通塞有無之方以自礙耶。或曰。然則宜書之。乃書於石。

法華寺西亭夜飲賦詩序　同

余既謫永州。以法華浮圖之西。臨陂池邱陵大江連山。其高可以上。其遠可以望。遂伐木爲亭。以臨風雨觀物初。而游乎顥氣之始。朋歲元克己山柱下史亦謫焉而來。無幾何以文從余者多萃焉。是夜會茲亭者。凡八人。既醉。克己欲志是會。以貽於後。咸命爲詩。而授余序。昔趙孟至於鄭。賦七子。以觀鄭志。克己其慕趙者與。卜子夏爲詩序。使後世知風雅之道。余其慕卜者與。誠使斯文也而傳於世。庶乎其近於古矣。

構法華寺西亭詩　同

竄身楚南極。山水窮險艱。步登最高寺。蕭散任疏頑。西垂下斗絕。欲以窺人寰。反如在幽谷。榛翳不可攀。命童恣披翦。芸宇橫斷山。劃如判清濁。飄若升雲間。遠岫攢衆頂。澄江抱清灣。夕照臨軒墮。棲鳥當我還。蘚苔滋嘉色。篁竹遺清斑。神舒屏羈鎖。志適忘幽屏。棄逐久枯槁。迨今始開顏。賞心難久留。離念來相關。北望思親愛。南瞻雜夷蠻。置之勿復道。且寄須臾閑。

元結故宅　は祁陽縣浯溪にあり、唐上元中、結罷めて歸る、其山水を愛して家居せる也、又漫郎宅と名く、

有庫墟　は道州の北にあり、舜象を有鼻に封ずといふものこれ也、鼻亭ありしが唐代に至て之を毀つ、斥鼻亭神記、柳宗元集中に見ゆ、

愛蓮亭　は道州濂溪書院の後にあり、宋時に之を建つ、

愛蓮亭詩　宋　朱熹

開道根移玉井旁。花開十丈是尋常。月明露冷無人見。獨爲先生引興長。

周子故宅　は道州の西二十五里安定山下にあり、方輿勝覽に曰く「營道之西。二十八里。爲濂水之源。東流十里。爲濂溪保。左曰龍山。右曰象山。則濂溪故居也。」

謁元公詩　明　顧璘

道喪千餘載。天南得異人。元圖開太極。絕學指迷津。庭草常交翠。池蓮不斷春。詠歌風

元結の故宅

有庫の墟

愛蓮亭

周子の故宅

月下瀟灑挹公神。

濂溪故里詩　　明　錢邦芑

悟得羲皇一畫先。可知文字失眞傳。於今親見濂溪水。焚卻當年注易篇。

邵陽愛蓮亭　は寶慶府治の東なる愛蓮池上にあり、傳へいふ周敦頤愛蓮說を作る所と、

希濂堂　は寶慶府治の西にあり、宋の紹興間郡守潘壽之を建て、朱子額を書せり、蓋邵陽は周敦頤の舊治たりしによる、

漁父亭　は武岡州の東にあり、傳へいふ屈原漁父を見る處と、

奎文閣　は武岡州南儒學の右にあり、宋の景定間知軍楊巽之を建つ、

岳陽樓　は巴陵縣西にあり、岳州城の西門樓にして洞庭を下瞰し、景物寬闊たり、唐代に張說此州に守たりし時、每に才士と登樓して詩を賦す、樓の名これより著はる、其後太守樓北百步に複樓を搬め、名て燕公樓といふ、又南樓、楊公臺等の名岳陽の詩詠に見ゆるも今は遺蹟の尋ぬへきなし、岳陽樓は古來屢々改築せしものにして宋代には滕宗諒之を新築し、范希文之が記をつくり、蘇子美の書、丹邵蓮の篆額を併せて時人之を四絕と稱せり、現今の樓は淸の乾隆五年に築造し爾後しば〳〵修葺を加へたるものこれ也、左に揭くる滕子京か范仲淹に與へたる書は能く岳陽樓の來歷を詳叙し又有名なる岳陽樓記の由來を知るべし併せ錄す、

與范經略求記書　　宋　滕宗諒

六月十五日。尙書祠部員外郎。天章閣侍制。兼知岳州軍州事滕宗諒。謹馳介致書。恭投邠府四路經略。安撫資政。諫議節下。竊以爲。天下郡國。非有山水瓌異者不爲勝。山水非有樓觀登覽者不爲顯。樓觀非有文字稱記者不爲久。文字非出於雄才鉅卿者不成著。今古東南郡邑。當山水間者比比。而名與天壤同者。則有豫章之滕閣。九江之庾樓。吳興之消暑。宣城之謝朓。此外無過二三所而已。雖寖歷於歲月。撓剝於風雨。潛消於兵火。圮燬於患難。必須崇復。而不使墮圮者。蓋山韓吏部。白宮傅以下。當時名賢。各有紀述。而取重於千古者也。巴陵西跨城闉。揭飛觀。署之曰岳陽樓。不知俶落何代何人。自有唐以來。文士編集中。無不載其聲詩賦詠。與洞庭君山。率相表裏。宗諒初誦其言。而疑且未信。謂作者誇說過矣。去秋以罪得茲郡。入境而疑與信俱釋。及登樓而恨嚮之作者所得僅毫末耳。惟有呂衡州詩云。襟帶三千里。盡在岳陽樓。此粗標其

大致。自是日思以宏大隆顯之。亦欲使久而不可廢。則莫如文字。乃分命僚屬。於韓柳。劉白。二張。二杜。逮諸大人集中。摘出登寄詠。或古或律。歌詠並賦。七十八首。暨本朝大筆。如太師呂公。侍郎丁公。尚書夏公之作。榜於梁棟間。又明年春。鳩材僝工。稍增其舊制。古今諸公。於篇詠外。率無文字稱紀。所謂岳陽樓者。徒見夫屹然而踞。岈然而負。軒然而竦。偃然而顧。曾不異人。具肢體。而精神未見也。嘗堪久焉。恭惟。執事文章器業。凜凜然爲天下之時望。又雅意在山水之好。每觀送行懷遠之什。未嘗不神游物外。而心與景接。矧茲君山洞庭。傑然爲天下之最勝。竊度風旨。豈不擬遐想於素尚。寄大名於清賞者哉。蓋或務勘退。經暑暇日。少吐金石之論。發揮此景之美。庶漱芳潤於異時。知我朝高位輔臣。有能淡味而遠託思於湖山數千里外。不其勝與。謹以洞庭秋晚圖一本。隨書贄獻。涉毫之際。或有所助。干冒清嚴。伏惟煌灼。

岳陽樓記

宋　范仲淹

慶曆四年春。滕子京謫守巴陵郡。越明年。政通人和。百廢具興。重修岳陽樓。增其舊制。刻唐賢今人詩賦。於其上。屬予作文以記之。予觀夫巴陵勝狀。在洞庭一湖。銜遠山。吞長江。浩浩蕩蕩。橫無際涯。朝暉夕陰。氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。前人之述備矣。然則北通巫峽。南極瀟湘。遷客騷人。多會於此。覽物之情。得無異乎。若夫淫雨霏霏。連月不開。陰風怒號。濁浪排空。日星隱曜。山嶽潛形。商旅不行。檣傾楫摧。薄暮冥冥。虎嘯猿嘯。登斯樓也。則有去國懷鄉。憂讒畏譏。滿目蕭然。感極而悲者矣。至若春和景明。波瀾不驚。上下天光。一碧萬頃。沙鷗翔集。錦鱗游泳。岸芷汀蘭。郁郁青青。而或長煙一空。皓月千里。浮光耀金。靜影沈璧。漁歌互答。此樂何極。登斯樓也。則有心曠神怡。寵辱皆忘。把酒臨風。其喜洋洋者矣。嗟夫。予嘗求古仁人之心。或異二者之爲何哉。不以物喜。不以己悲。居廟堂之高則憂其民。處江湖之遠則憂其君。是進亦憂。退亦憂。然則何時而樂耶。其必曰。先天下之憂而憂。後天下之樂而樂與。噫。微斯人。其誰與歸。

早霽南樓詩

唐　張說

山水佳新霽。南樓玩初旭。夜來枝半紅。雨後洲全綠。四運相終始。萬形紛代續。適臨青草湖。再變黃鶴曲。地穴穿東吳。江流下西蜀。歌聞枉渚遊。舞風長沙促。心阻意徒馳。神和生自足。白髮悲上春。知常謝先欲。

與夏十二登岳陽樓詩

同　李白

樓觀岳陽盡。川廻洞庭開。雁引愁心去。山銜好月來。雲間逢下榻。天上接行杯。醉後涼

風起。吹人舞袖廻。

登岳陽樓詩　同杜甫

昔聞洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南拆。乾坤日夜浮。親朋無一字。老病有孤舟。戎馬關山北。憑軒涕泗流。

登岳陽樓詩　同麻溫

湖邊景物屬秋天。樓上風光似去年。仙侶緱生留福地。湘娥帝子寄哀絃。雲門自繞軒臺外。木葉偏飛楚客前。極目江山何處是。一帆萬里信歸船。

題岳陽樓詩　同白居易

岳陽樓下水漫漫。獨上危樓凭曲闌。春岸綠時連夢澤。夕波紅處近長安。猨攀樹立曉何苦。雁點湖飛渡亦難。此地唯堪畫圖障。華堂張與貴人看。

岳陽樓別竇司直詩　同韓愈

洞庭九江間。厥大誰與讓。南匯羣崖水。北注何奔放。滙爲七百里。吞納各殊狀。自古澄不清。環混無歸向。炎風日搜攪。幽怪多穴藏。軒然大波起。宇宙隘而妨。魂哉拔蒿萊。騰踔較健壯。聲音一何宏。聚輻車萬兩。猶疑帝軒轅。張樂就空曠。蛟螭露筍簴。縞練吹組帳。鬼神非人世。節奏頗跌蕩。陽施見誇麗。陰閉感悽愴。朝過宜春口。極北缺隄障。夜經巴陵州。叢芮纔可傍。星河盡涵泳。俯仰迷下上。餘瀾怒不已。喧聒鳴甕盎。明登岳陽樓。渾渾時當冬之孟。隙竅縮寒漲。前臨指近岸。側坐眇難望。滌濯神魂醒。幽懷舒以暢。主人孩童舊。握手乍忻悵。憐我竄逐歸。相見得無恙。開筵交屐舄。爛熳倒家釀。杯行無留停。高柱送清唱。中盤進橙栗。投擲傾脯醬。歡窮悲生心。婉孌不能忘。念昔始讀書。志欲干霄王。屠龍破千金。爲藝亦云亢。愛才不擇行。觸事得譏謗。前年出官由。此禍最無妄。公卿采虛名。擢拜識天仗。姦猜畏彈射。斥逐恣欺誑。新恩移府庭。偪側厠諸將。於嗟苦駑緩。但懼失宜當。追思南渡時。魚腹甘所葬。嚴程迫風帆。劈箭入高浪。頗沈在須臾。忠鯁誰復諒。生還眞可喜。克己自懲創。庶從今日後。蠶識得與喪。事多改前好。趣有獲新尙。暫耕十畝田。不取萬乘相。細君知蠶織。稚子已能餉。行當挂其冠。生死君一訪。

和韓侍御岳陽樓別竇司直詩　同劉禹錫

楚望何蒼然。層瀾七百里。孤城寄遠目。一瀉無窮已。蕩漾浮天蓋。四環宜地理。積漲在三秋。混成非一水。冬游見清淺。春望多洲沚。雲錦遠沙明。風煙青草靡。火星忽南見。月

硤方東迤。雪波西山來。隱若長城起。獨專朝宗路。駛悍不可止。支川讓其威。蓄縮至南委。熊武走蠻落。瀟湘來奧鄙。炎烝動泉源。積潦搜山趾。歸往無日夕。包含通遠邇。行當白露時。眇視秋光裏。曙色未昭晰。露華遙斐亹。浩爾神骨清。如觀混元始。北風忽振盪。驚浪迷津涘。怒激鼓鏗訇。蹙成山蹄砲。鵾鵬疑變化。罔象何恢詭。噓吸寫樓臺。騰驤露鬐尾。景移羣動息。波靜繁音弭。明月出中央。青天絕纖滓。素光淡無際。綠靜平如砥。空影渡鵝鴻。秋聲思蘆葦。鮫人弄機杼。貝闕駢紅紫。珠蛤吐玲瓏。文鰐翔旖旎。水禦吳蜀限。地勢東南痺。翼軫桑垂精。衡巫屹環峙。名雄七澤藪。國辨三苗氏。唐羿斷修蛇。荊王憚青兕。秦狩蹟猶在。炭巡路從此。軒后奏宮商。騷人詠蘭芷。茅嶺潛相應。橘州傍可指。郭璞驗幽經。羅含著前紀。觀津戚里族。按道侯家子。聯袂登高樓。臨軒笑相視。假守亦高臥。墨曹正垂耳。契闊話涼溫。壺觴慰遷徙。地偏山水秀。客重杯盤侈。紅袖花欲然。銀鐙畫相似。興酣更抵掌。樂極同啓齒。筆鋒不能仗。藻思亦何綺。伊余負微尚。夙昔慙知己。出入金馬門。交結青雲士。襲芳踐蘭室。學古游槐市。策蹇慕宋前軍。文師漢中壘。陋容味俯仰。孤志無依倚。衛足不如葵。瀟川空歎蟻。幸逢萬物泰。獨處窮塗否。鍛翮重壘傷。驚魂再三褫。遼瑗亦屢化。左邱猶有恥。桃源訪仙宮。薜服祠山鬼。故人南臺舊。一別如弦矢。今朝會荊蠻。斗酒相宴喜。爲余出新什。笑怪隨伸紙。嘩若觀五色。歘然臻四美。委曲風濤事。分明窮達旨。洪韻登華鐘。淒音激清徵。羊濟要共和。江掩多雜擬。徒欲仰高山。焉能追逸軌。湘洲路四達。巴陵城百雉。何必顏光祿。留詩張內史。

岳陽樓詩　唐　元稹

岳陽樓上日銜窗。影到深潭赤玉幢。帳望殘春萬般意。滿檣湖水入西江。

岳陽樓詩　唐　李商隱

欲爲平生一散愁。洞庭湖上岳陽樓。可憐萬里堪乘興。枉是蛟龍解覆舟。

晚泊岳陽樓詩　宋　歐陽修

臥聞岳陽城裏鐘。繫舟岳陽城下樹。正見江空明月時。雲水蒼蒼失江路。夜深明月弄清輝。水上人歌月下歸。一闋聲長聽不盡。輕舟短棹去如飛。

岳陽樓寄滕子京詩　同

蛸鱉孤城倚平湖。遠浪來。萬尋迷島嶼。百仞起樓臺。太守凭闌處。羣賢奉笏陪。清霜鴈丹橘。積雨過黃梅。逸思歌湘曲。遒文繼楚才。魚貪河岫樂。雲望帝京迴。遙信雙鴻下。新

緘尺素裁。因聞誇野境。自笑擁邊埃。龍漢方多孽。旄頭反示災。旌旗時映日。鼙鼓或驚雷。有志皆嘗膽。何人可鑒坏。儒生半投筆。牧豎亦輸懷。湘澤辭猶漫。蒲萄館未開。支離莫攘臂。天子正求才。

岳陽樓詩　同張天啓

天入平湖遠。樓深納霽華。青山藏福地。碧樹記人家。水落魚龍蟄。風高雁鶩斜。古來形勝地。何事憶長沙。

登岳陽樓詩　元傅若金

馳傳自青天。憑高憶往年。闌干映水廻。埤堄與雲連。江合沅湘大。山侵楚蜀偏。蜃郎通別井。龍女宅重淵。日月鴻濛裏。風沙浩蕩前。驪珠秋後冷。犀火夜深然。張樂猶疑奏。乘槎欲並仙。登臨停去騎。寵餞惜離筵。地氣南交接。天文北極懸。賦慚王粲作。詩擬杜陵傳。渺渺衡陽雁。迢迢浪泊鳶。早春回漢節。應得泛湖船。

登岳陽樓詩　同歐陽元

江出夷陵西復西。東陵城上倚天梯。月生巫峽尋常見。雪壓君山一字低。嚴客朗吟歸客還。巴童清夢繞猿啼。如何偉絕東南觀。不遣謫仙蘇二題。

宿岳陽樓詩　同陳秀氏

蕩槳溯流光。登樓望八荒。江山出圖畫。天地入舟航。夜靜星文動。秋高月色涼。題詩懷李白。搔首鬢蒼蒼。

岳陽樓詩　同梁曾

樓前秋水健帆開。樓上涼風舞袖廻。萬里舟航通鳥道。四時風景護龍堆。江山如此不一醉。歲月幾何能再來。欲問老翁求鐵笛。夜深吹上紫荊臺。

岳陽樓觀寄晴空。樓外君山指顧中。地勢平吞三楚遠。城闉高壓九江雄。乾坤好句唐工部。廊廟雄文宋范公。秋晚登臨正奇絕。只疑身在水晶宮。

岳陽樓詩　同陳孚

洞庭木葉風颼颼。雪浪萬頃飛白鷗。氣浸中天日月溼。影搖大地山河浮。數聲裂玉洞賓魄。一點殘黛湘娥愁。安得天瓢酌仙酒。跨鯨直上扶桑洲。

岳陽樓詩　同小雲石海涯

西風吹我登斯樓。劍光影動乾坤浮。青山對客有餘瘦。游子思君無限愁。昨夜漁歌動湖水。一分天地十分秋。

岳陽樓詩　同　于　嚴

不作蒼茫去。眞成汗漫遊。三年夜郎客。一枕洞庭秋。冤句驚飛處。看山天盡頭。猶嫌未奇絕。更上岳陽樓

岳陽樓詩　同　伯顏九成

鄂渚天開出畫圖。君山螺立洞庭湖。登樓西望江分楚。倚檻東臨水坼吳。浩浩春潮趨赤壁。悠悠雲氣隱蒼梧。人生擾擾成何事。卻羨沙邊釣艇孤。

岳陽樓用孟襄陽韻詩　同　李　綱

重湖望不極。秋色爾殘陽。洲渚雲山白。孤蒲霜葉黃。飛帆適沅澧。廻雁過瀟湘。楚客經行處。依然蘭芷香。

岳陽樓詩　明　楊　基

春色醉巴陵。闌干落洞庭。水吞三楚白。山接九疑青。空閣魚龍舞。娉婷帝子靈。何人夜吹笛。風急雨冥冥。

登岳陽樓詩　同　李東陽

突兀高樓正倚城。洞庭春水座來生。三江到海風濤壯。萬水浮空島嶼輕。吳楚乾坤天下句。江湖廊廟古人情。中流或有蛟龍窟。臥聽君山笛裏聲。

岳陽樓詩　同　楊一清

百尺高樓倚碧空。乾坤登眺幾人同。眼前憂樂誰無意。天下江山此最雄。孤棹影衝煙浦外。浩歌聲在水雲中。東流萬里終歸海。不盡狂瀾砥柱功。

岳陽樓詩　同　何景明

楚水滇池萬里游。使車重喜過巴邱。千家樹色浮山郭。七月濤聲入郡樓。寺裏池亭多舊主。城中冠蓋半同僚。明朝又下章華路。江月湖煙縮別愁。

岳陽樓詩　同　魏永貞

洞庭天下水。岳陽天下樓。誰爲天下士。飲酒樓上頭。

岳陽樓詩　同　黃仲芳

十二闌干百尺樓。高標南極俯滄洲。碧窗風渡迴鷺鶴。畫棟雲開接斗牛。樹色卷簾巫峽曉。浪花飛雪洞庭秋。登臨莫問當年事。不盡長江滾滾流。

岳陽樓詩　清　姚　鼐

高樓深夜靜秋空。蕩蕩江湖積氣通。萬頃波平天四面。九宵風定月當中。雪開朱鳥峯

何處。水上蒼龍惡未終。便欲拂衣瓊島外。止留清嘯落湘東。

上岳陽樓不期逢韓古農觀察賦呈　日本　永井禾原

古樓絕勝足游觀。忽漫況承傾蓋歡。經世功名天岳秀。降材襟度洞庭寬。善鄰尤喜同文好。一見何言再會難。殷意勸留留不得。峭帆催客泝湘瀾。

岳陽樓詩　同　正木鶴山

君山螺髻映波光。晚上高樓仰彼蒼。巴蜀三千雲漠漠。荆吳百二水茫々。先憂後樂人何在。古往今來感自長。萍迹天涯吾似匪。秋風從是入瀟湘。

軒轅臺

軒轅臺、は君山にあり、一に鑄鼎臺と名く、黄帝鑄鼎荆山之下。鼎成騎龍上昇。云々の遺址なりと傳ふ、

屈原の宅

屈原宅　は岳陽城東十三都地にあり、屈原逐はれて此に寓せりと傳ふ、今三間大夫廟あり、俗に之を相公廟と呼ぶ、太平寺の故趾也、

章華臺

章華臺　は華容縣治の北にあり、傳へいふ、春秋の時楚の靈王の築く所と、

章華臺詩　唐　胡曾

茫茫衰草沒章華。因笑靈王昔好奢。臺上未乾簫管絕。可憐身死野人家。

細腰宮

章華臺詩　明　何景明

別館離宮紛綺羅。細腰爭待楚王過。章華日暖春游盡。雲夢天寒夜獵多。廢殿有臺人不到。荒臺無主鳥空歌。西江煙月長江舊。只有繁華逐逝波。

細腰宮　は華陵縣の東にあり、同じく楚王豪奢の遺蹟也、

楚宮行　唐　張籍

章華宮中九月時。桂花半落紅橘垂。江頭騎火照輦道。君王夜從雲夢歸。霓旌鳳蓋到雙闕。臺上重重歌吹發。千門萬戶開相當。燭龍左右列成行。下輦更衣入洞房。洞房侍女盡焚香。玉階羅幕微有霜。齊言此夕樂未央。玉酒湛湛盈華觴。絲竹次第鳴中堂。巴姬起舞向君王。迴身垂手結明璫。願君千年萬年壽。朝出射麋夜飲酒。

細腰宮詩　同　胡曾

楚王辛苦戰無功。國破城荒霸業空。惟有青春花上露。至今猶泣細腰宮。

細腰宮詩　同　阮鐵鶴

高築金堂貯細腰。年年歌管舞紅綃。深宮燬盡無人見。散作寒煙柳萬條。

東山草堂

東山草堂　は華容縣東沙渚港にあり、明の劉大夏、休を乞ふて居りし處、堂壁に明

李夢陽の送劉公歸東山草堂詩を刻せり、

寓賢閣潮音閣　寓賢閣は武陵縣西門外にあり、潮音閣は寓賢閣の右にあり、明の王守仁龍場驛に謫せられし時、此を過ぎりて邑人蔣信黃元亨等と學を講せし所也、

潮音閣詩　明　王守仁

高閣憑虛敞十尋。卷簾疎雨動微吟。江天雲鳥自來去。楚澤風煙無古今。山色漸疑衡嶽近。花源欲問武陵深。新春尚阻東歸楫。落日誰堪話此心。

榮王府　榮王府は武陵縣西北一里にあり、明の憲宗の第十二子祐樞の封地也、

北樓　北樓は郴州北湖にあり、韓愈の祭李使君文中に云へる「宴州樓之豁達。衆管啾而並奏」とはこれをいふ也、

叉魚亭　叉魚亭は北湖の上にあり、韓愈潮州に赴くとき北湖を徑、詩を賦す、後人因て以て亭に名く、愈叉魚招張功曾詩あり、

重修叉魚亭記　清　羅澤南

癸丑歲暮。余與李子續賓平永與土寇。駐師郴州。過城北叉魚池。乃唐昌黎伯韓公。貶謫陽山令。量移而北。待命郴州。招張員外叉魚處。道光間。州牧曾公鈺。搆亭其上。堂三楹。以祀公。駐馬視之。欄榭門檻。無一存者。詢之土人。知去秋爲粵寇所燬。兵燹之餘。荒涼滿目。因偕李君。出金修之。以復其舊。公之貶陽山也。或以爲論宮市。或以爲論關中爲天下根本。小人媒蘖其短。鬱鬱適茲土。後之人。莫不爲公悲。余謂。天下之禍亂。憂之者君子。釀之者小人。君子思患預防。苟有謀猷。入告我后。小人則從而排之擠之。使不得竟其說。譁張爲幻。變亂是非而不顧。公有唐一代偉人。骨鯁之性。死生弗渝。使當日用其言。公之所欲建白朝廷。爲天下生民計者。必盡形諸奏牘。以制治未亂。譏讒頻加。待罪萬里。匪惟公之志沮。天下忠藎之士。莫不爲之結舌。朝野大政墮壞。冥冥之中。遂有不可深計者。唐之末造。黃巢以一匹夫。倡亂海澨。度嶺表。下潭州。塗炭中原。禍延關中。李唐之祚。不絕如縷。是非一朝一夕之故。其所由來者漸矣。由是觀之。小人之爲害君子者淺。流禍天下者大。撫今追昔。有不勝爲之太息痛憾者也。公待命郴州。不過偶爾駐迹耳。而其叉魚。亦一時遣興之所。爲無足異。千歲而下。猶從而盛榭之。歌詠之。羹兮非兮。成是具錦。究何損於君子之大也哉。余方巡師永桂。不及待其工之竣。蓋是役者。湘鄉李子續宜。蕭子啓江。郴州曾子紀龍也。

岳行府　岳樞密行府は郴州の西南にあり、岳飛嘗て此に駐まりて寇亂を削平せし處、後

の報恩寺なり、

韓張亭　韓張亭は臨武縣治の後にあり、唐の張署臨武に令たりしとき韓愈と期宿せし處、宋の紹興間、僉判范寅亭を作る、舊名を敧眠館といふ、蓋韓集中の枕臂敧眠の句をとりし也、

第三章　祠廟陵墓寺觀學校

第一　祠廟

昭忠祠、―曾文正祠、―左文襄祠、―劉忠壯祠、―胡文忠祠、―湘鄉昭忠祠、―羅忠節祠、―李忠武祠、―李勇毅祠、―岳忠武祠、―南軒先生祠、―諸葛武侯廟、―柳侯廟、―南嶽廟、―濂溪祠、―濂溪故居祠、―賈太傅祠、―風子祠、―汨羅廟、―帝舜廟、―湘妃廟、―洞庭廟、―黃陵廟、

昭忠祠　は長沙府賢良祠の側にあり、髮賊戡定の名將李續賓、羅澤南、曾國華、劉松山、江忠源等及湖南出身の戰沒者を祀れり、

曾文正祠　は長沙府城の北、小吳門牌石塘にあり、同治十三年の建立にして大學士兩江總督一等毅勇侯曾國藩を祀れり、時の巡撫王文韶之が記を作る、

勅建曾文正公祠廟記　清　王文韶

聖清受命二百餘年、三祖五宗、重光襲慶、承平既久、物熾而豐、葉牙跧伏、橫決嶺表、道光季年、乃有廣西逆渠洪秀全等、負嶮稱僞號、旅拒王師、踰嶺跳湘、犯長沙不克、遂陷武昌、殘安慶、踞江寧、爲僞都、又分黨北擾河朔、東蹂瀛碣、西略汾晉、當是時中原糜沸、所過幾無堅城、咸豐二年、湘鄉曾文正公、以禮部侍郎、典江西鄉試、聞母訃歸里、文宗顯皇帝、特詔公治團練於長沙、公曰、金革無辟、誼不得辭、然曷敢與居常比、因疏陳將來卽幸立功、終不敢邀甄敍、又疏請、以束伍法、部勒鄉丁、使出境逐賊、拔羅忠節澤南、李忠武續賓、王壯武鑫、李勇毅續宜、張忠毅運蘭、劉武烈騰鴻、劉忠壯松山諸公、爲之將、是爲湘軍所自始、明年命忠節援江西、時主兵者、江忠烈忠源、亦公所薦士也、江西圍解、乃疏請治舟師、拔今侍郎彭公玉麟、總督楊公岳斌、提督鮑公超、黃公翼升、李公成謀等、俾領水軍、疏調胡文忠林翼、以黔軍來會剿、又疏薦塔忠武可大用、且曰、塔齊布如戰守不力、臣甘與同罪、其知人善任使率類此、四年公率水陸萬人東征、初戰再失利、尋大捷湘潭、以師不全勝自劾、未幾復岳州、克武漢、大膊田家鎮、斷橫江鐵索、燔

逆舟萬數千。遂圍九江。進攻湖口。居亡何。戰舟深入彭蠡湖。賊夜焚襲我師。自北岸進。陷武昌。五年春。公率羅忠節等援江西。而令胡文忠及彭侍郎。同扼長江上游。規武漢。羅軍克弋陽廣信。義寧。仍檄令援鄂。時江境賊廣集。公獨當之。不留以自衛也。六年江楚道閔。公弟愍烈公國華。及劉武烈等。自岳來援。攻瑞州。今粵撫劉公長佑。自湖南攻袁州。公四弟今威毅伯河道總督國筌。自湖南攻吉安。是年冬。再克武昌。七年公以外難歸。明年夏。命督治浙江軍務。時王壯武。張忠毅己痛殄江西賊。劉武烈己克瑞州。劉公長佑克袁州。蕭壯果啓江。江誠恪忠義等克撫建。威毅伯尋拔吉安。而愍烈公殉難三河鎮。九年奉入川之命。中遂改命。規安慶。遂屯宿松。克太湖。十年江南軍潰。蘇浙並淪於賊。詔公總督兩江。充欽差大臣。遂渡江壁祁門。舉今相國恪靖伯左公宗棠。肅毅伯李公鴻章。分治軍務。而威毅伯仍分道出師。明年八月克之。穆宗毅皇帝。同治元年月正元日。除協辦大學士。乃分道出師。威毅伯以湘軍會水師。掃沿江逆壘。直擣江寧。左公以楚軍。出衢州規浙江。李公以淮軍。出上海規蘇常。而公季弟靖毅公貞幹。用苦戰積勞。卒於軍。三年蘇杭以次底定。六月乙酉。威毅伯攻拔江甯僞都。粵賊平。冊勳詔封一等毅勇侯。世襲罔替。加太子太保。賞戴雙眼花翎。尋晉武英殿大學士。總督如故。

會科爾沁忠親王。剿河北捻寇死事。詔以公代之。時湘軍凱撤。乃別簡銳卒經略中原。而劉忠壯松山。獨帥所部從。所嚮克捷。議築長牆。遏流寇。亡何疾作。詔還鎮。以李相國代公。卒用公方畧平寇。公謝弗如也。八年移督畿輔。天津民。與西洋人鬨。命公察治之。公疏言。百姓小忿。不足肇邊釁。而密議儲將練兵。上方畧甚備。局外不審。或用相訾議。公引咎而已。尋命還鎮江南。有大事咨而決之。十一年二月戊午。公薨。遺疏入。穆宗震悼。詔贈太傅。特謚文正。祀京師賢良祠。昭忠祠。並於湖南江甯。建立專祠。禮也。既安徽。江西。湖廣。直隸諸畫臣。並據輿情入告。請各建專祠。詔曰可。於是湖南。度地小吳門內。縱七十八丈。橫四十八丈。中建祟祠。凡四重。上下序各一。爲門三。門首牌樓一。東西序稱是。又西爲思賢講舍。計堂室庭榮。廂廡庖湢。共一百七十有八間。有池。廣袤十數畝。爲橋一。樓一。亭五。臺二。池畔壘石爲山。雜蒔花木。翼以廻廊。繚以祟垣。垣周二百六十丈。糜白金四萬有奇。自發帑三千外。皆其舊部及湘岸淮鹽商所捐佽也。工始於同治十二年春。考成於光緒元年冬。獨吉迎主。官紳士民來會者萬人。既成禮。衆請文其麗牲之石。謹案。盜起嶺西。蹂躪遍十七行省。當者盡靡。公以書生。帥鄉人子弟。出萬死。不顧一生之計。誓滅此朝食。前後死事。至二萬餘人。而士氣不少餒。豈可强爲哉。誠繇列

祖列宗厚澤。漸人至深且久。海內皆知。敵王所懷。公復以忠義勇敢倡之。克己而愛人。辭巧而就拙。一時忠誠所感召。衆爭效其所爲。以避事苟活爲恥。蓋氣機鼓動。有莫知其然而然者。宜其卒殄十餘年負嵎勍寇。解東南數十州之倒懸。而繇國家萬億年無疆之祚歟。抑嘗考諸三代。稽諸大小雅。烝民。江漢。常武。崧高諸詩。雖詠歌方叔。召虎。申甫。吉甫。仲山甫之功。實以彰宣王尊賢使能之盛德。然則公功所繇成。非遇文宗穆宗任賢弗貳。抑烏能聲施及此哉。故考次方畧。著公終始大節。聲爲銘詩。以彰兩朝先帝之明。以稱聖恩褒勳臣。勵世勸忠之意。其辭曰。

嶽嶽文正。魯國一儒。少宗正學。篤守程朱。立朝謇諤。吁咈都俞。手枭大憝。卒汔王誅。厥慝維何。槩苞桂管。出柙蹂湘。于鄂于皖。遂窟鍾山。衆狂且悍。九黠齊州。燧煙欲滿。文宗赫怒。有詔起公。曰予知汝。惟汝予同。其司九伐。以孝作忠。公拜且泣。墨衰從戎。造攻自潭。再奠岳鄂。大捷田鎮。斷橫江索。九派淳陽。驚濤夜作。乃入西江。重樹方畧。公心如水。萬折必東。既清章貢。旋指吳淞。銜命再起。聲光熊熊。詔總師干。節鉞是崇。公有介弟。鼓角損龍。靖毅殉勞。慝烈死綏。惟威毅伯。電擊飈馳。既克皖城。疾擣南畿。毅皇初載。厥齡尚沖。文母負扆。眷公益隆。元日命相。枚卜協從。帝曰欽哉。時亮天工。登壇誓師。左淮右楚。二廣分馳。摧其角距。有韓湘軍。金陵獨舉。遂復皇輿。天子神武。捷書夜至。上慰兩宮。毅皇曰都。元輔之功。告於九廟。帶礪酬庸。弟圭信圭。魯衛同封。公拜稽首。翎翎畏愼。河朔視師。碣石移鎭。簡賢自代。用贊廣運。爰返三吳。以資河潤。六十初度。公朝京師。天子賜壽。奎畫璇題。國有大事。事有大疑。匪卜匪筮。公爲蓍龜。公之相度。虛衷求闕。神識洞中。知人則哲。名不已居。功不已出。人才我才。用之則一。公之勳德。爛若三辰。鄒枚而武。李郭而文。三代以還。乃有斯人。伊呂諸葛。庶幾等倫。公薨於位。天顏雨泣。何以贈之。三公晉秩。上謚飾終。名稱其實。吳楚津門。專祠徧立。湘江衡嶽。實公故鄉。詔秩崇祠。於祭丹黃。公御雲車。來饗斯堂。刻詩牲繫。以備樂章。

長沙謁曾文正公祠

日本　永井禾原

廟前若栢。憶威風。緯武經文一代功。百萬蒼生長仰德。武侯以後有斯公。

長沙謁曾文正公廟

同　白岩子雲

曾公祠宇穆森然。數畝琅玕一曲泉。岳嶽南來山色秀。瀟湘東去水光鮮。文章遠逐子與後。勳業應居諸葛前。鎭日低徊何限感。私心景仰二十年。

左文襄祠

左文襄祠　は長沙府北門內にあり中興の名臣侯左宗棠を祀る、輪奐の美曾文正

劉忠壯祠
胡文忠祠
湘鄉昭忠祠

祠と似たり、

劉忠壯祠　は長沙府の東北寶南街にあり、廣東提督劉松山を祀る、碑文は左宗棠の手になれり、

胡文忠祠　は益陽縣治の西門外學宮の右にあり、咸豐十一年敕を奉じて建つ、太子太保贈總督湖北巡撫胡林翼を祀る、

湘鄉昭忠祠　は湘鄉縣治の右、迎恩總にあり、咸豐八年曾國藩等會奏して之を建つ、湘鄉は曾國藩の出生地にして髮賊の亂、名將謀士湘鄉より出づるもの十に七八、曾國藩親ら之が記をつくりて陣亡將士を祭る、

湘鄉昭忠祠記　清　曾國藩

咸豐二年十月、粵賊圍攻湖南省城、既解嚴、巡撫張公亮基、檄調湘鄉團丁千人、至長沙備防守、羅忠節公澤南、王壯武公鑫等、以諸生率千人者以往、維時國藩方以母憂歸里、奉命治團練於長沙、因奏言、團練保衛鄉里法、當由本團醵金養之、不食於官、緩急終不可恃、不若募團丁爲官勇、糧餉取諸公家、請就現調之千人、略仿戚元敬氏成法、束伍練技、以備不時之衝、由是吾邑團卒號曰湘勇、三年春平土寇於衡山、破逆黨於桂東、其夏粵賊圍江西省城、國藩募湘勇二千、楚勇一千、羅忠節公萱率之東援、初戰失利、營官謝邦翰、易良幹等殉難、湘勇之越境勦賊、將領之力戰捐軀、實始於此、余聞而悼之、議立忠義祠於縣城、祀湘人與於南昌之難者、其冬余奉命籌備舟師、乃募湘勇水陸萬人、明年率之東討、岳州之役、陸兵敗挫、雖旋有湘潭之捷、而湘士中潛、既而整軍再出、羅公暨李忠武公續賓率湘勇以從、於是大勦於岳州、克武漢、下蘄黃、破田家鎮、復江西弋陽信州寧州、又以其間、由江還鄂、埽蕩枝縣、再克武昌省會、咸豐五六年間、羅李湘勇之名震天下、而王壯武公與劉武烈公騰鴻、蕭壯果公啓江、暨巡撫蔣公益澧、皆提湘勇、征戰湖北江西廣西廣東等省、所在有聲、然羅公王公劉公遂以六七年間、先後徂謝、而將士傷亡者滋益多、前所議建之忠義祠、規制隘庳、不足以嚴典祀、咸豐八年秋、國藩乃與李公具疏會奏、請立昭忠祠於湘鄉、令有司春秋致祭、天子許之、吾邑軍士沒有餘榮已、未幾而舒城三河之難作、李公殉節、部下死者殆六千人、國藩私憂以謂湘中士氣恐不復振、其後李公弟勇毅公續宜、重輯部曲、轉戰皖北、張忠毅公運蘭及唐總戎義訓、輩之師、轉戰皖南、而吾弟國荃遂以湘士克復安慶金陵兩省、蔣公暨楊公昌濬亦用湘人、平浙江、伐福建、張忠毅公亦戰沒於閩、東南數省、

莫不有湘軍之旌旗。中外皆歎異焉。其西北諸道。則提督劉君松山追逐捻匪於河南山東直隸。征叛回於陝西甘肅。而按察使陳君湜防守山西。其西南諸道。則蕭壯果公率師入蜀。而巡撫劉公蓉駐平蜀寇。總督劉公崇昭暨諸湘軍。又自蜀而南入黔。西入滇。一縣之人。征伐徧於十八行省。近古未嘗有也。當其負羽遠征。乖離骨肉。或苦戰而授命。或避近而戕生。殘骸暴於荒原。凶問遲而不審。老母寡婦望祭宵哭。可謂極人世之至悲。然而前者覆亡。後者繼往。蹈百死而不辭。困阨無所遇而不悔者何哉。豈皆迫於生事。逐風塵而不返與。亦由前此死義數君子者爲之倡。忠誠所感。氣機鼓動而不能自已也。君子之道。莫大乎以忠誠爲天下倡。世之亂也。上下縱於亡等之欲。姦僞相吞。變詐相角。自圖其安。而予人以至危。畏難避害。曾不肯捐絲粟之力以拯天下。得忠誠者起而矯之。克己而愛人。去僞而崇拙。躬履諸艱。而不責人以同患。浩然捐生。如遠游之還鄉。而無所顧悖。由是衆人效其所爲。亦皆以苟活爲羞。以避事爲恥。嗚呼吾鄉數君子。所以鼓舞羣倫。歷九州而戡大亂。非拙且誠者之效與。　豈始事時所及料哉。今海宇鑑安。昭忠祠落成有年。而邑中壯士效命疆場者。尚不乏人。能常葆此拙且誠者。出而濟世。入而表里。羣材之興也。不可量矣。又豈僅以武節彪炳寰區也乎。

羅忠節祠　李忠武祠　李勇毅祠　岳忠武祠　南軒先生祠　諸葛武侯廟　柳侯廟　南嶽廟

羅忠節祠　は湘鄉縣南門總黃甲嶺にあり。乃ち羅澤南を祀れる處也。

李忠武祠　は湘鄉縣城隍總大街にあり、李續賓を祀る。

李勇毅祠　は湘鄉縣迎恩總にあり、續賓の弟李續宜を祀る、

岳忠武祠　一は茶陵西門外にありて青雲庵と名け、一は茶陵州西郭山側にありて精忠祠と名く、乃ち岳飛を祀れる處、

南軒先生祠　は善化縣城南書院の妙高峰にあり、宋張栻を祀る、

諸葛武侯廟　は衡陽縣北石鼓山にあり、乃ち諸葛亮を祀る處、蓋し亮嘗て臨烝に守たりしに因り後人之を廟祀せるなり、

柳侯廟　は零陵縣の西南愚溪の上にありて唐の柳宗元を祀る、宋汪藻の柳先生祠堂記あり、

南嶽廟　は衡山縣の西北三十里にあり、古代より奉祀せる廟にして漢武帝一且之を江北霍山に移せしが隋文帝復之を今の處に移せりと傳ふ、唐、梁、宋、元、明を經て清に至り、屢燒け屢建つ、康熙帝の四十七年、碑文并に扁額二の親製宸筆あり、扁額一を光輔紫宸といひ、一を永峙南維といふ、雍正帝乾隆帝も亦巡撫に命じて宸

筆扇額を修せしむ、曰く功宏育物、曰く靈啞南雲、嘉慶帝も亦扁額を染筆す、曰く宅南標極と、

重修南嶽廟碑　康熙帝

南嶽爲天南巨鎮。上應北斗玉衡、亦名壽嶽。主靈長於祿位。繇福祚於子孫。載在星經。由來尚已。往歲專官致祭。肅薦馨香。復以廟貌傾頹。敕命修葺。鳩工庀材。不斂閭左之錢。不廢公旬之役。羣臣歡忭。庶民子來。經始於四十四年七月。訖工於四十六年九月。不三歲而落成。榱桷一新。金碧重煥。於時億萬臣民。以茲嶽爲主壽之山。咸欲伸其愛戴之悃。爲朕祝釐。而督撫諸臣。亦合辭籲請。謂宜親頒文翰。宜導興情。朕以萬邦爲懷。踐阼以來。殫思治理。區畫周詳。敬天勤民。不遑暇逸。而於嶽瀆諸祀。典禮必虔。凡以洽神人和上下也。惟茲南嶽。靈爽斯憑。亦期與吾民共樂雍熙。同登仁壽。大四海從風之治。固萬年有道之基。是則朕斂時錫福之至願云爾。爰書重修歲月。以示崇德報功之意。俾勒之貞珉。昭諸億禩焉。

謁南嶽廟遂宿寺題門樓詩　唐　韓愈

五嶽祭秩皆三公。四方環鎮當中央。火維地荒足妖怪。天假神柄專其雄。噴雲泄霧藏半腹。雖有絕頂誰能窮。我來正值秋雨節。陰氣晦昧無晴風。潛心默禱若有應。豈非正直能感通。須臾靜埽衆峯出。仰見突兀撐青空。紫蓋連延接天柱。石廩騰擲堆祝融。森然魄動下馬拜。松柏一徑趨靈宮。粉牆丹柱動光采。鬼物圖畫填青紅。升階偃僂薦脯酒。欲以菲薄明其衷。廟令老人識神意。唯吁傾伺能鞠躬。手持杯珓道我擲。云此最吉餘難同。竄逐蠻荒幸不死。衣食纔足甘長終。王侯將相望久絕。神縱欲福難爲功。夜投佛寺上高閣。星月掩映雲朦朧。猿鳴鐘動不知曙。杲杲寒日生於東。

濂溪故居祠　は道州の西營樂鄉にあり、周敦頤を祀る、道州は其故鄉なり、宋嘉定十三年元公と諡し、淸康熙二十六年祠額學達性天を下賜せり、

重建濂溪祠記　宋　龔維藩

營道之西。距城十八里有水。曰濂溪。周氏家其上。卽濂溪先生之故居也。攷其譜牒。世居靑州。遠祖諱崇昌。唐永泰中。爲廉白二州太守。因卜居道之甯遠縣太陽邨。其裔孫。諱虞賓。有子十二人。中子諱從遠。始徙於此。再傳至諫議諱輔成。登祥符八年進士第。終賀州桂嶺令。沒葬於故居之側半里許。累贈諫議大夫。諫議生二子。長曰礪。次則先生。先生少孤。舅氏龍圖鄭公向。篤愛之。始冠。奏以初秩。既長。從宦四方。嘉祐九年。先生

自虔移倅永州。移文營道縣云。有田若干。舊以私具爲先塋守者資。族子勿興。營道給憑文付守者周興。先生晚歲寓九江。愛廬阜之勝。築室於其地。今名曰濂溪。示不忘本之意。其留故居者。付姪仲章又從弟意。先生既沒。仲章貧甚。元豐三年及七年。再徹其屋。鬻於意之子伯順。而故宅基。尙存。伯順死無後。其女以其地。適何伯瑜。淳熙已亥。周與何。互訟其產。聞於郡守趙汝誼。閱營道所承永州公牒。乃治平印文。按驗皆合用先生治命。以田與守塋者。藏其籍於學宮。其故宅基。尙屬何氏。何氏之孫楫。於淳熙十一年。以其地。歸於意之曾孫與嗣。書於券云。與嗣係諫議宗族。有志力敎子以紹祖風。今願盡所承外祖周伯順。承祖住宅地。其賣與興嗣。將來起造祖堂。庶幾先魂於里塾有所依託。淳熙庚子。郡士胡元鼎。鄉人義太初。搬舍設像。敎授章穎。爲之記。故居有祠昉乎此。然卑陋湫隘。歲久不遷。丁丑之秋。蕃被命入境。乃鳩工度材。一新棟宇。命營道縣尉禁則。董其役。經始於是歲之十二月。落成於明年之三月。中爲祠宇。設先生像。其前爲堂四楹。不侈不陋。繚以垣牆。環以松竹。於是規制始備。而邦人嚴事之意益虔。當何氏以地歸與嗣。預有建祠之語。迄今乃有成。則與廢顯晦。殆若有數而非偶然者。先生之學。實嗣洙泗之統。傳之伊洛。寖以大顯。凡轍迹所至。今皆有祠。而父母之邦。先塋所在。乃因陋就簡。於蒸嘗不稱。是烏可以已。故因其落成。述其顚末。庶以傳信。俾覽者得詳焉。

宋　朱　熹

拜濂溪先生遺像詩

北渡石塘橋。西訪濂溪宅。喬木無遺株。虛堂惟四壁。悚瞻德容睟。跪薦寒流碧。幸矣有斯人。渾淪再開闢。

道州濂溪先生祠記

宋　張　栻

宋有天下。明聖相繼。承平日久。元氣胥會。至昭陵之世盛矣。宗工鉅儒。磊落相望。於是時。濂溪先生。實出於舂陵焉。舂陵之人言曰。濂溪吾鄉之里名也。先生世家其間。及寓於他邦。而不忘其所自生。故亦以是名溪。而世或未之知耳。惟先生仕不大顯於時。其澤不得究施。然世之學者。考論師友淵源。以孔孟之遺意。復明於千載之下。實自先生發其端。由是推之。則先生之澤。其何有窮哉。蓋自孔孟沒。而其微言僅存於簡編。更秦火之餘。漢世儒者。號爲窮經學古。不過求於訓詁章句之間。其於文義。不無時有所益。然大本之不究。鬱而不彰。而又有專從事於文辭者。其去古益以遠。經生文士自歧爲二塗。及夫措之當世施於事爲。則又出於功利之末。智力之所營。若無所與於書者。於是有異端者。乘閒而入。橫流於中國。儒而言道德性命者。不入於老。則入於釋。間有希

世傑出之賢。攘臂排之。而其爲說。復未足盡吾儒之指歸。故不足以抑其瀾而或反以激其勢。嗚呼言學而莫適其序。言治而不本於學。言道德性命而流入於虛誕。吾儒之學。其果如是乎哉。陵夷至此。亦云極矣。及吾先生起於遠方。乃超然有所自得於其心本乎易之太極。中庸之誠。以極乎天地萬物之變化。其教人。使之志伊尹之志。學顏子之學。推之於治。先生之禮樂刑政。可舉而行。如指諸掌。於是河南二程先生兄弟從而得其說。究極廣大精微。殆無餘蘊。學者始知孔孟之所以教。蓋在此而不在乎他。學可以至於聖。治不可以不本於學。而道德性命。初不外乎日用之實。其餘致知力行。具有條理。而詖邪淫遁之說。皆無以自隱。可謂盛矣。然則先生發端之功。顧不大哉。春陵之學。舊有先生祠。實紹興巳卯。向侯子悉所建。至於今。淳熙五年。趙侯汝誼。以其地之狹也。下車之始。卽議更度之。爲堂四楹。併二程先生之像。列於其中。規模周密。稱其尊祀之實。既成。使謁記。杕謂。先生之祠。凡學皆當有之。豈惟春陵。特在。春陵尤所當先者。趙侯之舉。知急務矣。故爲之論述如此。以告後之人。

賈太傅祠　は善化縣西瀏錦坊にあり。卽ち賈誼の故宅也。舊は專ら誼を祀りしが、後屈原を竝祀し、光緒元年別に屈平祠を建つるに及んで、復專ら賈誼を祀る、

弔賈誼辭

晉　庾闡

中興二十三歲。余忝守衡南。鼓枻三江。路次巴陵。望君山而過洞庭。涉湘川而觀汨水。臨賈生投書之川。慨以永懷矣。及造長沙。觀其遺象。喟然有感。乃弔之云。偉哉。夫蘭生而芳。玉產而潔。陽葩照冰。寒松貞雪。莫邪挺鍔。天驥汗血。苟云其儁。誰與比傑。是以高明倬茂。獨發奇秀。道率天貞。不議世疚。煥乎。若望舒耀景而焯羣星。矯乎。若翔鸞拊翼而逸宇宙也。飛棨洛汭。擢穎山東。質清浮磬。聲若孤桐。琅琅其璞。巖巖其峯。信道居正。而以天下爲公。方駕逸步。不以曲路期通。是以張高弦悲。聲激柱落。清唱未和。而桑濮代作。雖有惠音。莫過韶濩。雖有騰麟。終仆一壑。嗚呼大庭既邈。元風悠緬。皇道不以智隆。上德不以仁顯。三五親譽。其軌可仰而標。霸功雖逸。其途可翼而闢。悲矣先生。何命之蹇。懷賢如玉。而生運之淺。昔咎繇蓋虞。呂尙歸昌。德協充符。乃應帝王。夷吾相桓。漢登蕭張。草廬三顧。臭若蘭芳。是以道隱則蛻屈。數盛則鳳覩。若棲不擇木。翔非九五。雖曰玉哲儁才。何補。夫心非死灰。智必存形。形託神司。故能全生。奈何蘭喬。揚芳漢庭。摧景飈風。獨喪厥明。悠悠太素。存亡一指。道來斯通。世往斯圮。吾哀其生。未見其死。敢不敬弔。寄之涤水。

覃太傅祠碑

明　李東陽

古所謂大臣者。必先大體。後庶務。其所設施。皆足以型天下及後世。然其自負甚重。不苟合於人。人未必能識。識之未必能用。此治所以恒弗成也。漢屈羣策。豪傑並起而從之。高帝之初。所不克致者。商四翁魯兩生之外。天下蓋無遺賢矣。明律令時。則有若蕭何曹參。治軍旅時。則有若韓信彭越。周勃。出入籌策時。則有張良陳平。此皆撥亂撥始者之所爲用。非所以繼世建統也。文帝時。可當大臣者。惟賈太傅一人。少而薦於朝。且顯矣。卒短於大臣。困於長沙。老於梁。嗚呼以文帝爲君。太傅不得爲之相。是漢之禮樂微矣。吾觀其論天下之建置。則先仁義。而後刑法。論天下之勢。則先夏後夷。先要股後指脛。論吏治。則先風俗。論世之所以長久之術。則先太子。論大臣。則先廉恥。此其言。皆治亂之大體所在。戰國而下無能言之者。可以爲大臣矣。當時人。多以少年喜紛更。後之議者。亦以爲太驟。此其言得失。必有能辨之者。或又謂。古之伊尹管氏未能遽過者。伊尹吾則弗能知。太傅之正。彼管氏者。烏足以語此。使太傅竟作相。必能盡去秦習。成漢之王制。非蕭曹而下可擬也。不用而死。文帝固未嘗譬之。而遺恨尙在天下。司馬遷作史記。徒以弔湘江之賦。遂與屈原同傳。則亦甚矣。太傅在長沙。人至今習知之。其故宅爲卒伍倫所據。其井猶存焉。世所傳賈傅井者也。成化元年。我長沙守錢侯。募郡人以財。贖宅地爲祠。塑像其中。請著祀典。詔以仲春秋祭。用豕一羊一備粢。復其民一家。使供祠事。翰林院編修李東陽。省墓歸自京師。拜太傅於祠。侯請紀其事。太傅之賢。史書之詳矣。予爲之記。俾後者知茲祠也。功自侯始。

屈子祠　は善化縣西嶽麓書院の左にあり。嘉慶元年、知府張翅、院長羅典之を建立し、楚の屈原を祀り、宋玉、景差、漢の賈誼、淸の李發甲、丁思孔、李湖、陸燿を附祀せり。

汨羅廟　は湘陰縣玉笥山にあり、水經註に曰く「羅淵北に有屈原廟。廟前有碑。又有漢太守程堅碑記。舊志に曰く「明洪武初。知縣黃思讓重建廟。幷於廟前。建濯纓橋。橋畔建獨醒亭。」玉笥山に徙せしは淸の乾隆二十二年知縣陳鍾理の時にあり、

弔屈原賦

漢　賈誼

恭承嘉惠兮。竢罪長沙。仄聞屈原兮。自沈汨羅。造託湘流兮。敬弔先生。遭世罔極兮。乃隕厥身。嗚呼哀哉。逢世不祥。鸞鳳伏竄兮。鴟梟翱翔。闒茸尊顯兮。讒諛得志。賢聖逆曳兮。方正倒置。世謂伯夷溷兮。謂跖蹻廉。莫邪爲鈍兮。鉛刀爲銛。吁嗟默默。生之亡故兮。幹棄周鼎。寶康瓠兮。騰駕罷牛。驂蹇驢兮。驥垂兩耳。伏鹽車兮。章甫薦履。漸不可久兮。

嗟若先生。獨羅此咎兮。辭曰已矣。國其莫吾知兮。子獨抑鬱。其誰語。鳳縹縹。其高逝兮。夫固自引而遠去。襲九淵之神龍兮。沕淵潛以自珍。偃蟜獨以隱處兮。夫豈從蝦與蛭螾。所貴聖人之神德兮。遠濁世而自藏。使騏驥可羈而羈兮。豈云異乎犬羊。般紛紛。其離此郵。亦夫子之故也。歷九州而相君兮。何必懷此都也。鳳凰翔於千仞兮。覽德輝而下之。見細德之險巇兮。遙曾擊而去之。彼尋常之汚瀆兮。豈能容夫吞舟之魚。橫江湖之鱣鯨兮。固將制於螻蟻。

汨羅廟碑記　唐　昉

噫日月明而忠賢生。日月翳而忠賢斃。明翳其天耶非耶。其數耶非耶。將適然耶。且昔抱大忠而生。抱大忠而死者。亦何可勝言。雖天傾地搖。山折川竭。猶可得而評論焉。及至軒轅氏之天。以道爲日月。無明翳之變。故風后力牧。得適歸材焉。帝堯氏之天。以德爲日月。無生斃之數。故羲和氏百工之徒。得言其用焉。帝舜氏之天。以仁爲日月。無虧盈之節。故十六族。得宏其理焉。大禹之天。以公爲日月。無氛霧之蔽。故皋陶稷契之臣。得專其任焉。殷湯氏之天。以信爲日月。不皦不昧。故伊尹得符其志焉。文王氏之天。以心爲日月。無剝蝕之變。故周召之倫。得張其化焉。我大唐氏之天。以政爲日月。故房杜魏公。得盡其計謀焉。其餘上自列國。下逮周隋。或耳目爲日月。左右爲日月。一明一翳。非天所爲也。非地之所爲也。故長宏辟。伍員梟。范蠡魯連去。徐衍負石。三閭懷沙。良可痛哉。然三閭者。以大忠而揭天文。沈吟楚澤。哀鬱自贊。爰興褒貶。六經同風。至於宋玉景差。皆弟子也。況吾黨哉。太和二年春。昉奉命。宜春抵湘陰。歇帆西渚。邑宰馬摶。謂予曰。三閭之祠。有碑無文。豈前賢缺歟。又曰。俗以三閭。投汨水之濱。所葬者招魂也。嘗所憾焉。案圖經。汨水冬二尺。夏九尺。則爲大水也。古之與今。其汨不甚異也。又楚人惜三閭之才。憫三閭之死。舟馳檝驟。至今爲俗。安有尋常之水。而失其遺骸哉。安有不覩其骸。而知其懷沙哉。但以楚辭有小大招魂。後人憑而穿鑿。不足徵也。愚則以三閭魂歸於泉。尸歸於墳。靈歸於祠。爲其實郡守東海徐希仁。泊馬摶。以予嘗學古道。熟君臣至理之義。請述始終符契。以廣忠賢之業云。嗚呼後代知予者以此。又曰。屈碑立兮。讒人泣兮。屈碑摧兮。讒人掊兮。碑兮碑兮。汨水之隈兮。天高地闊。孤魂魄兮。

屈原廟賦　宋　蘇軾

浮扁舟以適楚兮。過屈原之遺宮。覽江上之重山兮。曰惟余之故鄉。伊昔放逐兮。渡江濤而南遷。去家千里兮。生無所歸。而死無所爲墳。悲夫人固有一死兮。處死之爲難。徘

徊江上。欲去而未決兮。俯千仞之驚濤。賦懷沙以自傷兮。嗟予獨何以爲心。忽終章之慘烈兮。逝將去此而沈吟。吾豈不能高舉而遠遊兮。又豈不能退默而深居。獨嗷嗷其怨慕兮。恐君臣之愈疎。生既不能力爭而強諫兮。死猶冀其感發而戒行。苟宗國之顚倒兮。吾亦獨何愛於久生。託江神以告寃兮。馮夷敎之以上訴。歷九關而見帝兮。帝亦悲傷而不能救。懷瑾佩蘭而無所歸兮。獨惸惸兮中浦。峽山高兮崔嵬。故居廢兮行人哀。子孫散兮安在。況復見兮高臺。自子之逝今千載兮。世愈壓而難存。賢者畏譏而改度兮。隨俗變化。斷方以爲圓。黽勉於亂世而不能去兮。又或爲之臣佐。變丹青於玉瑩兮。彼乃謂之爲非智。爲高節之不可企及兮。宜夫人之不吾與。違國去俗。死而不顧兮。豈不足以免於後世。嗚呼君子之道。豈不全兮。全身遠害。亦或然兮。嗟予區區。獨爲其難兮。雖不適中。要以爲賢兮。夫我何悲。子所安兮。

過三閭廟　唐　戴叔倫

沅湘流不盡。屈子怨何深。日暮秋煙起。蕭蕭楓樹林。

三閭大夫祠詩　明　滕毅

稽幃寒薄暮。廻飈吹白雲。下有栖神宇。慘淡臨江濆。行吟既不返。遺響寧再聞。綠榮茲丹采。婉爾含清芬。沐芳正冠佩。酌水炷夕薰。長歌靈谷應。春思何紛紛。願言卜瓊茅。巫咸不可羣。渚宮望儀羽。再拜雲中君。

題三閭廟詩　清　王士禎

湘纍哀怨地。自昔有遺音。曉日空舲岸。孤帆楓樹林。數窮詹尹策。魂斷女嬃砧。欲問離騷意。巴東猨夜吟。

久客懷征路。還登江上祠。美人惜珍髮。衆女妒娥眉。楚澤凋蘭葉。巴巫唱竹枝。九歌何處續。宋玉有微辭。

帝舜祠

帝舜祠　は甯遠縣東南玉綰巖下にあり、古しへ太陽溪にありしが秦漢以來乃ち玉綰巖の前百歩に移せり、唐刺史元結奏して一旦營道城の西に立てしも僖宗の時、延唐令胡曾權奏して玉綰巖下に復す、宋代に之を重修し、明洪武の初年に到て現今の處に移し且屢重修す、清に至るも營て之が修理保存を懈らず、明洪武四年以來、春秋仲月上巳を以て縣令牲帛を具して祭を致し、凡そ國家の慶典にあへば祭文を撰び、香帛を齎らし官を遣りて祭る、牲には太牢を用ふとぞ、元結の祠を建てたる處は道州西半里、儒學の後ろにして舜が南巡止宿の處なりと傳ふ、

舜祠表　唐　元結

有唐乙巳歲。使持節道州諸軍事守道州刺史元結。以虞舜葬於蒼梧之九疑山。在我封內。是故申明前詔。立祠於州西之山南。而刻石爲表。於戲孔子作虞書。明大舜德及生人之至。則大舜於生人。宜以類乎天地。生人奉大聖。宜萬世而不厭。考大舜南巡之年。時百一十二歲矣。自中國至蒼梧。亦幾有萬里。蒼梧山谷。深險可懼。帝竟入而不回。至今山下之人。不知帝居之營。帝葬之陵。嗚呼在有虞氏之世。人民可奪其君邪。人民於大舜。能忘而不思邪。何爲來而不歸。何故死於空山。吾實惑而作表。游於此邦。登乎九疑。誰能不惑也歟。

請立舜廟守戶狀　同

臣謹案地圖。舜陵在九疑之山。舜廟在太陽之溪。舜陵古老已失。太陽溪今不知處。秦漢以來。置廟山下。年代寖遠。祠宇不存。每有詔書。令州縣致祭奠酹荒野。恭命而已。豈有盛德大業百世師表歿於荒裔。陵廟皆無。臣謹遵舊制。州西山下已立廟訖。特乞天恩。許蠲近祠一兩家。令歲時拂灑。示爲恒式。豈獨表聖人至德及於萬世。實使彰陛下天澤及於無窮矣。謹錄奏聞。

舜廟祈晴文　唐　柳宗元

年月日。某官某。敢用牲牢之奠。昭祭於虞帝之神。帝入大荒。雷雨不迷。帝在璿璣。七政以齊。九澤既陂。錫禹元圭。至德神化。后土與稽。勤事南巡。祀典以躋。此焉告終。宜福遺黎。廟貌如在。精誠不暌。今陽德愆候。有渰淒淒。降是水潦。混爲塗泥。岸有善崩。流或斷隄。泛溢嚮隴。滂沱圃畦。恒雨獲戾。循咎增淒。忍茲嘉生。均彼蓬藜。望誅黑蝥。以扶陰蜺。式乾后土。以廓天倪。粢盛不害。餘糧可栖。或簸或溲。爲酒爲醯。跲跲笙鏞。坎坎鼓鼙。百代祀德。甿心不攜。豈獨蘋藻。徵諸溯谿。神其聽之。毋作神羞。

舜祠詩　唐　宋之問

虞帝巡百粵。相傳葬九疑。精靈游此地。祠樹日光輝。禋祭忽莫望。丹青圖二妃。神來獸率舞。仙去鳳還飛。日暝山氣落。江空潭霧微。帝鄉三萬里。乘彼白雲歸。

過舜祠詩　唐　無名氏

游湘有餘怨。豈是聖人心。竹路猨啼古。祠宮夢草深。秦風傳舊俗。異跡閉荒林。巡狩去不返。煙雲愁至今。九疑天一畔。山盡海沈沈。

祀舜祠詩　清　景星陪

上日宏圖禪。中天景運隆。一人兼授受。千古仰明聰。憶昔陶漁賤。偏遭井廩窮。力田餬在下。謨蓋象居功。蒸乂親心順。升聞睿鑒通。館甥釐二女。宅帝率羣工。水土平成奏。君臣喜起同。無爲神肅穆。不與得淵沖。北極勤寧倦。南巡祚竟終。攀髯龍馭遠。回首翠華空。雲黯蒼梧白。斑凝碧竹紅。薰琴成絕調。湘瑟寫幽衷。異域悲藏劍。蠻方泣墮弓。九疑留寢廟。萬壑閟元宮。殿宇形巍煥。岡巒氣鬱葱。深山仍木石。大麓自雷風。歷代瞻香薦。熙朝俎豆崇。春秋嚴巨典。蘋藻竭微忠。先甲明禋肅。良辰淑景融。鸞旂來縹渺。鳳琯響瑤瑰。端冕瞻遺像。垂裳憶聖躬。拜颺趨下吏。歌舞列猺蠻。誠敢祈昭格。神應泯怨恫。靈壇欣執事。願祝歲年豐。

湘妃廟　は巴陵縣西南君山にあり、堯の二女を祀る。楚辭湘夫人に曰く「帝子降兮北渚」王逸の注に曰く「堯二女。娥皇女英。隨帝不返。墮於湘水之渚。因爲湘夫人。」と、

黃陵廟　は湘陰縣北四十里にありて、舜の二妃を祀れり、水經注には荆州牧劉表、碑を廟に樹てたるをいへるも、この碑唐代には已に存せざりしものゝ如し。每年六月十四日を以て祭典を行ふといふ、

黃陵廟記　　唐　韓愈

湘旁有廟。曰黃陵。自前古立。以祀堯之二女。舜之二妃。庭有古碑。斷裂分散在地。其文剝缺。攷圖經。漢荆州牧劉表景升所立。頭曰湘夫人碑。今驗其文。乃晉太康九年。又題其額曰。虞舜二妃之碑。非景升立者。秦博士對始皇帝云。湘君者堯之二女。舜妃者也。劉向鄭元。亦皆以二妃爲湘君。而離騷九歌。既有湘君。又有湘夫人者。王逸之解。以爲湘君者。自其水神。而謂湘夫人者。乃二妃也。從舜南征三苗。不及道死沅湘之間。山海經云。洞庭之山。帝之二女居之。郭璞疑二女者帝舜之后。不當降小君爲夫人。因以二女。爲天帝之女。以予攷之。璞與王逸俱失也。堯之長女娥皇。舜之后。故曰君。其二女女英。自宜降曰夫人也。故九歌辭謂娥皇爲君。謂女英爲帝子。各以其盛者。推言之也。禮有小君君母。明其正自得稱君也。書曰。舜陟方乃死。傳謂昇道南方以死。或又曰。舜死蒼梧。二妃從之不及。溺死沅湘之間。余謂。竹書紀年。帝王之沒。皆曰陟。陟昇也。謂昇天也。書曰。殷禮陟配天言。以道終其德協天也。書紀舜之沒云陟者。與竹書周書同文也。其下言方乃死者。所以釋陟爲死也。地之勢。東南下。如言舜南巡而死。宜言下方。不得言陟方也。以此謂。舜死葬蒼梧。於時二妃從之。不及而溺死者。皆不可信。二妃既曰以謀語舜。脫舜之厄。成舜之聖。堯死而舜有天下。爲天子。二妃之力。宜當爲神。食民之

祭。今之渡湘江者。莫敢不進禮廟下。元和十四年春。余以言事得罪。黜爲潮州刺史。其地爲漢南海之揭揭。厲毒所聚。懼不得脫死。過廟而禱之。其冬移袁州刺史。明年九月。拜國子祭酒。始以私錢十萬。抵岳州。廟易廟之圮桷腐瓦於刺史王堪。長慶元年。刺史張愉。自京師往。余與愉故善。謂曰。丐我一碑石。載二妃廟事。且令後世知有子名。愉曰諾。既至州。報曰。碑謹具。遂篆其事。俾刻之。

湘夫人祠詩　唐杜甫

肅肅湘妃廟。空牆碧水春。蟲書玉珊蘚。燕舞翠惟塵。晚泊登汀樹。微聲借洛蘋。蒼梧恨不盡。染淚在叢筠。

祠南夕望詩　同

百丈牽江色。孤舟泛日斜。興來猶杖屨。目斷更雲沙。山鬼迷春竹。湘娥倚暮花。湖南清絕地。萬古一長嗟。

湘君祠詩　唐陳羽

二妃怨處雲沈沈。二妃哭處湘水深。商人酒滴廟前草。蕭索風生斑竹林。

黃陵廟　唐李遠

黃陵廟前莎草春。黃陵女兒蒨裘新。輕舟小棹唱歌去。水遠山長愁殺人。

題二妃廟詩　唐李羣玉

黃陵廟前春已空。子規啼血滴松風。不知精爽歸何處。疑是行雲秋色中。

湘妃廟詩　唐釋齊己

湘煙濛濛湘水急。汀蘂凝紅蕣蓮溼。蒼梧雲盡九疑深。二女魂飛江上立。相攜泣鳳蓋。龍輿追不及。廟荒松朽啼飛猩。筍鞭迸出階基傾。黃昏一岸陰風起。新月如眉生闕水。

黃陵廟詩　宋畢田

玉輦南巡去不還。翠娥望斷楚雲間。波寒剩寫哀絃怨。露冷偏滋淚篠斑。一水盈盈傷遠目。九峯屹屹慘愁顏。荒州千古淒涼地。半掩空祠上墓山。

黃陵廟詩　金元好問

木蘭芙蓉滿芳洲。白雪飛來北渚遊。千秋萬歲帝京遠。雲來雲去空悠悠。秋風秋月湘江渡。波上寒煙引輕素。九疑山高猨夜啼。竹枝無聲墮殘露。

黃陵曲　元王廓

黃陵磯頭煙樹簇。黃陵廟前煙草綠。來朝時接洞庭君。驚浪掀空駕銀屋。西風吹散魚

龍腥。天空落日波冥冥。君王龍馭夜臺冷。雲晚蒼梧山更青。月華二十五絃秋。聲斷白蘋江自流。竹花徧棲野林血。地老天荒娥黛愁。嬪虞雙笄虞已老。雲鏡芙蓉愁秋槁。天子巡遊后不從。祇益神明楚辭好。千帆萬櫓香火足。古木蒼藤鴉露宿。夜寒星斗滿晴川。漁郎時唱湘靈曲。

湘君祠觀古松　明　楊一鵬

望斷蒼梧恨莫從。深山寂寂點秋容。獨憐萬古湖心月。猶照荒祠百尺松。

湘夫人祠詩　清　施閏章

帝子蒼梧望。荒祠楚水湄。湘雲搖珮帶。綠雨送旌旗。夜靜魚龍入。情深草木知。維舟尋往跡。春蘚沒殘碑。

洞庭廟　は巴陵縣鹿角鎮にありし昔は縣南金沙洲上にありしと。傳云ふ過客之に祈れば必ず驗あり風を分ちて船を送ると、清朝にては康熙十八年吳賊を剿討せし時、湖を渡りて波濤驚かず舟師捷を奏せしを以て大に尊崇せりと云ふ、

第二　陵墓

漢長沙王吳芮墓、—清李星沅墓、—清曾國藩墓、—唐堯帝陵、二妃墓、—楚左徒屈平墓、—清羅澤南墓、—清李續賓墓、—清李續宜墓、—清劉松山墓、—唐杜甫墓、—古炎帝陵、—陵帝舜陵、—清江忠源墓、—楚春申君黃歇墓、—楚懷帝陵、—周赧王墓、

漢長沙王吳芮墓　は長沙縣の西北にあり、冢旁に廟ありしが今は廢せり、水經注に所謂「臨湘縣北。有吳芮冢。高逾六十八丈。登臨寓目。爲廛郭之佳懋也」といへるはこれ也。

清李星沅墓　は長沙縣、河西都、魏家衙にあり、咸豐二年祭葬を賜ひ且碑文を賜ふ、

略傳は人物篇にあり、

清曾國藩墓　は善化縣の西、平塘、伏龍山にあり、歐陽夫人と共に茲に葬る、墓門崇高ならずと雖も山色蓊鬱として長へに英魂を護せり、同治十一年祭葬及御碑を賜ふ、その神道碑の文は李鴻章の作る所に係れり、

曾文正公神道碑銘　清　李鴻章

聖清受命二百載。有相曰曾公。始以儒業事宣宗皇帝。入翰林。七遷而爲禮部侍郎。文宗御極。正色直諫。多大臣之言。咸豐二年。以母憂歸湘鄉。遂起鄉兵討賊。自宣宗時天下乂安。內外弛備。於是西洋始通中國。海上多事。未幾而廣西盜起。大亂以興。及此年。

放兵東出。攻長沙不克。渡洞庭陷武昌。循江而下。所過摧靡。而是時天下兵。大氐惰窳恇怯。不可復用。諸老將盡死。爲吏者不習戰陣。公既歸。天子詔公治團練長沙。公曰。金革之事。其敢有避。因奏言。團練不食於官。緩急不可恃。請就其鄉團丁千人。募爲勇營。教以兵法。束伍練技。號曰湘軍。湘軍之名。自此始。明年益募人三千。解南昌之圍。是時賊已陷金陵。踞之。掠民艘巨萬。縱橫大江中。於是議創舟師。制船鑄礮。選將練卒。教習水戰。天子嘉之。湘軍水師由此起矣。四年成軍東討。初戰再失利。未幾大捷。湘潭以不全勝。上疏自劾。已而克岳州。下武昌。大破田家鎮。斷橫江鐵鎖。乘勝圍九江。進規湖口。當是時。湘軍威名震天下。會水師陷入彭蠡湖。鄂帥喪師。武昌再失。公曰。武昌據長江上游。必爭之地也。急檄湖北按察使胡公林翼。率偏師西援。不克。則悉銳師繼之。而自留江西。督攻九江。已而悍賊石達開等。分道犯江西。破郡縣六十餘城。公上疏自劾。卒以孤軍堅拒死守。賊不得逞。六年胡公等復武昌。明年拔九江。軍威復振。公治軍謀定後動。折而不撓。堅如金石。重如山岳。諸將化之。雖離公遠出。皆遵守約束不變。自九江未拔。諸軍已略定江西郡縣矣。公以父憂歸。累詔起復視師。不出。既逾小祥。始奉命援浙江。是時公軍爲天下勁旅。四方有警。爭乞公赴援。南則浙閩。西則蜀。北則淮甸。皆遙恃公軍爲固。慮旌旗他指。天子亦屢詔公。規畫全勢。視緩急輕重。去就之。公曰。謀金陵者。必據上游。法當舍枝葉圖本根。遂建議。三道趨皖。咸豐十年。蘇浙淪陷。朝廷憂之。以公總制江南。詔進兵江浙。而公卒不棄皖以失上游。是年西夷內犯。定和議。十一年。公克安慶。今上同治元年正月元日。授公協辦大學士。於是分道出師。大舉東下。公弟浙江巡撫國荃。以湘軍緣大江。薄金陵。今陝甘總督左公宗棠。以楚軍抵徽州。援浙江。鴻章以淮軍出上海。規蘇常。水師中江而下。爲陸軍聲援。三年蘇浙以次戡定。而公弟等亦攻援金陵僞都。自公初出師至是。十有三年。粵賊平。東南大定。論功封一等毅勇侯。開國以來文臣封侯。自公始。公既平定江南。威振方夏。名聞外國。會忠親王僧格林沁戰歿於曹。廷議以公北討流寇。是時公所部湘軍。皆已散歸。經書歲餘。功緒漸彰。會疾作。有詔還鎮江南。中外大事。皆就決之。公所謀議。思慮深遠。進規中原。議築長牆以制流寇。策臨事議。清甘肅而後出關。籌滇黔。議以蜀湘兩省爲根本。皆初立一議。數年之後。事之成否。卒如其說。而馭夷爲尤著云。初咸豐三年。金陵始陷。米利堅人。營謁江南師。願以夷兵助戰。十一年和議既成。俄羅斯。米利堅。皆請以兵來助。公議以爲。宜嘉其效順。而緩其師期。及同治元年。英吉利與佛蘭西。又以爲請。公又議以爲。宜申大義以

謝之。陳利害以勸之。皆報可。廷議購夷船。公力贊之。比船至。欲用夷將。則議寢其事。其後自募工。寫夷船之制。近似之。遂議開局製造。自是外洋機器輪舟夷礮。中國頗得其要領矣。六年詔中外大臣。籌和議利害可許不可許。公議以爲。其爭彼我之虛議者許之。其奪吾民之生計者勿許也。移直隸總督。天津民有擊殺法蘭西領事官者。法人恣之朝。天子慰解之。法人固爭。有詔備兵待。公曰。百姓小忿。不足蹙邊釁。從之。而密議備將練兵。設方略甚備。先是公已積勞成疾。至是疾益劇。會江南闕帥。上念南洋馭夷事任絕重。非公不可。遂命還江南臥治之。至則經營遠畧益勤。既一年。疾甚。同治十一年二月戊午。遂薨於位。官至武英殿大學士。享年六十有二。遺疏入。天子震悼。賻賜有加。贈太傅。謚文正。公諱某。字滌生。世爲湖南湘鄉人。曾祖竟希。祖玉屏。父縣學生麟書。三世皆以公貴。封光祿大夫。曾祖妣彭氏。祖妣王氏。妣江氏。皆封一品夫人。夫人衡陽歐陽氏。生男二人。紀澤。廕生戶部員外郎。襲爵爲侯。紀鴻。附貢生。孫三人。廣鈞。廣鎔。廣銓。皆幼。公既薨。紀鴻。廣鈞皆賜舉人。廣鎔賜員外郎。廣銓賜主事。女五人。皆適士族。公爲學研究義理。精通訓詁。爲文效法韓歐。而輔益之以漢賦之氣體。其學問宗旨。以禮爲歸。嘗曰。古無所謂經世之學也。學禮而已。於古今聖哲。自文周孔孟下。遞國朝顧炎武秦蒐田姚鼐王念孫諸儒。取三十有二人。圖其像而師事之。自文章政事外。大氐皆禮家言。嘗謂聖人者自天地萬物推極之。至一室米鹽。無不條而理之。又嘗慨古禮殘闕無軍禮。軍禮要自有專篇細目如戚敬元氏所紀者。若公所定營制營規。博稽古法。辨等明威。其於軍禮。庶幾近之。至其論議規畫。秩序井井。經緯乎萬變。條理乎鉅細。其素所蘊蓄然也。喪歸湖南。營葬於某鄉某原。鴻章少從公學問。又相從於軍旅。與聞公謀國之大者。乃爲文刻其墓道之碑。銘曰。

於鑠皇清。世載聖武。萬夷震疊。匪臣伊主。歷載二百。極熾而屯。孰排其紛。厥惟宗臣。功與時會。其成則天。惟公之興。事乃異前。國有舊旅。雲屯星羅。公曰。嘻矣。汰之則那。率我萌隸。敵愾同仇。舍其鉏擾。來事戈矛。厥初孤立。百挫不懾。天日可格。鬼神爲泣。持己所學。陶鑄羣倫。雖陪淺濺。爲國得人。孰任鉅艱。刓印使帥。孰以節死。孰成孰敗。決之於微。卒驗不爽。朝廷之人。取之公旁。始詔求賢。江以薦起。繼才胡公。勝己十倍。陸軍諸將。首塔羅王。二李繼之。水則彭楊。皆公所識。拔於風塵。知人之鑑。並世無倫。萬衆一心。貫虹食昴。終奠九土。殪死狂醜。事已大畢。乃謀於海。益我之長。奪彼所恃。動如雷霆。靜守其雌。內圖自強。外禦靡之。默運方寸。極九萬里。人謂公怯。曰吾過矣。式蛙嘗膽。以生以訓。

大勛宜就。胡棄而隕。道光季世。夷始慝我。內忠乘之。燎原觀火。彼睨我旁。雌雄首尾。曰徹可乘。附耳同起。夷醫其外。寇訌其內。不有我公。噫甚矣。維昔相臣。佐治以文。武功之盛。則由聖人。留都開基。三藩定變。新疆外拓。川楚內奠。四夷奔走。唯恐在後。皆秉聖謨。羣臣拱手。公起詞臣。以安以撫。天子虛己。曰汝予匡。相業之隆。近古無有。開物成務。是謂不朽。退之有言。衡爲嶽宗。扶輿磅礴。鬱積必鍾。後千百年。降神堯堯。我銘不誣。以配崧高。

舜二妃の墓

虞舜二妃墓　は湘陰縣北にあり、然れども括地志、元和志には青草山にありといひ、通典には黃陵山にありといひ相一致せず、未だ孰れか眞なるを知らず、又巴陵縣西の君山にありとも傳ふ、

屈原の墓

楚左徒屈平墓　は湘陰縣北汨羅江上にあり、

羅澤南墓

唐宰相濟源裴休墓　は寧鄉縣西大潙山にあり、

清羅澤南墓　は湘鄉縣二十九都灣州にあり、其神道碑銘は曾國藩の撰なり、

清李續賓墓　は湘鄉縣四十三都星子山にあり、神道碑銘は曾國藩の撰也、

清李續宜墓　は兄續賓の墓に接してあり、其神道碑銘は同しく曾國藩の撰にな

杜甫の墓

る、

清劉松山墓　は湘鄉縣西にあり、曾國藩其墓志を撰へり、

唐杜甫墓　は耒陽縣北、蘚洲にありて、後柩は偃師縣に遷せしも、冢は未だ嘗て毀たれずして耒陽に存せりといふ、

題杜墳詩　　唐　韓愈

何人鑿開混沌竅。二氣由來有清濁。孕其清者爲聖賢。鍾其濁者成愚樸。英豪雖沒名猶嘉。不肖虛死如蓬麻。榮華一且世俗眼。忠孝萬古賢人牙。有唐文物盛復全。名書史冊俱才賢。中間詩筆誰清新。屈指都無四五人。獨有工部稱全美。當日詩人無擬倫。筆追清風洗俗耳。心奪造化回陽春。天光晴射洞庭秋。寒玉萬頃清光流。我常愛慕如飢渴。不見其面生閒愁。今春偶客耒陽路。悽慘去尋江上墓。召明特地踏煙蕪。路入溪邨數百步。招手借問騎牛兒。牧童指我祠堂路。入門古屋三四間。草茅綠砌生無數。寒竹珊珊搖晚風。野蔓層層纏庭戶。升堂再拜心惻然。心欲虔啓不成語。一堆空土煙蕪裏。虛使詩人歎悲起。怨聲千古寄西風。寒骨一夜沈秋水。當時處處多白酒。牛炙如今家家有。飲酒食炙今如此。何故常人無飽死。子美當日稱才賢。蒜侯見待誠非喜。洎乎聖

意再搜求。姦臣以此欺天子。捉月走入千丈波。忠諫便沈汨羅底。固知天意有所存。三賢所歸同一水。過客留詩千百人。佳詞繡句虛相美。墳空飲死以傳聞。千古醜聲竟誰洗。明時好古疾惡人。應以我意知終始。

古炎帝陵　古炎帝陵　は鄢縣西三十里にあり、明拓て之を新にし、嘉靖年間聖容殿を建つ、帝王世紀に曰く「炎帝在位百二十年而葬於長沙。」路史に曰く「炎帝葬長沙茶鄉之尾。是曰茶陵。唐世嘗奉祀焉。宋太祖夢感見帝。於是馳節更求得南方。卽貌祀」云々、

舜帝の陵　虞帝舜陵　は零陵縣東南の九疑山にあり、史記五帝紀には「舜踐帝位四十九載。南巡狩崩於蒼梧之野。葬於江南九疑。是爲零陵」とあり、五帝紀注には「舜冢在零陵營浦縣」といひ、水經注には「九疑山大舜窆其陽。商均葬其陰」といひ、方輿勝覽には「陵在女英峯」といひ、而して一統志には「帝舜陵在今縣東南」とのみいへり、九疑聯綿未だ何れが是なるを知らず、

春申君の墓　江忠源墓　は新甯縣境にあり、神道碑銘は曾國藩の撰也、

楚春申君黃歇墓　は武陵縣南にあり、方輿勝覽に曰く「歇黔中人。開元寺址其宅。墓在焉。」

楚義帝の陵

春申君墓詩

烈士思酬國士恩。春申誰與快幽魂。三千賓客總珠履。欲使何人殺李園。

楚義帝陵　は郴州の西南にあり、舊儒學の後に位す、冢圍にして大、高二丈許りなりとぞ、水經注に曰く「郴縣南有義帝冢。內有石虎。因呼爲白虎郡。」

周赧王墓　は永定縣西十五里丁家溶にあり、州志に曰く「縣有赧王山。中有大冢。封殖甚高。周列小冢四十餘。或云。殉葬宮嬪也。」容齋隨筆に曰く「慈利縣周赧王冢中。藏古器物甚多。旁有五里堆。皆冢也。」

赧王墓詩　唐　王維

蠻烟荒雨自千秋。夜笛空餘鳥雀愁。周赧不辭亡國恨。卻憐孤墓近驪兒。

獄麓寺

第三　寺觀

獄麓寺、—道林寺、—靖興寺、—泗州寺、—開利寺、—白鹿寺、—旌忠寺、—南嶽觀、—方廣寺、—福嚴寺、—上封寺、—祝聖寺、—高臺寺、—龍興寺、—太平寺、—無爲觀、—四通寺、—白鶴寺、—隆興寺、

獄麓寺　は善化縣西獄麓山上にあり、晉太始元年に建つ、卽ち古しへの麓苑、誌光寺にして明代には又萬壽寺ともいふ、寺に唐李邕書する所の碑あり、

自道林寺西入石路。至麓山寺過法崇禪師故居詩　唐　劉長卿

山僧候谷口。石路佛苔深。深入泉源去。遙從樹杪回。香隨青靄散。鐘過白雲來。野雪空齋掩。山風古殿開。桂寒知自發。松老問誰栽。惆悵湘江水。何人更渡杯。

題湖南嶽麓寺詩　唐　竹松

海雲山上寺。每到每開襟。萬木長不住。細泉聽更深。蜩沾高雨斷。鳥過夕嵐沈。此地良宵月。秋懷隔楚碪。

嶽麓寺詩　宋　曾幾

嶽麓知名寺。幽尋到眼邊。林深不見日。山靜只聞泉。便欲呼舟去。聊爲借榻眠。明朝游歷處。都在小窗前。

與錢太守諸公遊嶽麓寺詩　明　李東陽

衡嶽地蟠三百里。羣峯將斷復崔巍。崖間古刹依山轉。谷口晴雲滿樹來。北海書存誰問價。少陵詩罷獨憐才。扁舟已謝長江險。又是匆匆一度回。

危峯高瞰楚江干。路在羊腸第幾盤。萬樹松杉雙徑合。四山風雨一僧寒。平沙淺草連天在。落日孤城隔水看。薊北湘南俱到眼。鷓鴣聲裏獨凭欄。

遊嶽麓寺詩　清　王仕雲

丹梯曲引翠微間。浪說浮生半日閒。上界煙霞攢旖旎。諸峯金碧枕潺湲。僧從水月時窺象。客爲雲林暫解顏。欲述壯游憑勝侶。敢論詞賦動江關。

道林寺　は嶽麓山下道林坪にあり、唐歐陽詢か書する所の碑あり、宋代の圓悟禪師此に居りしといふ、朱熹張栻か學を講せしとき從て遊ふもの多く寺側に精舍を建て以て居らしむ、後之を寺に歸す、又寺內に四絕堂あり、嶽麓志に曰く「自碧虛盤紆而下衍爲平拓之區者道林也。林蔚茂而谷幽淸。大江在其襟袖。雖橈檝亂流風濤飛雪。而深靜自如。唐馬燧作藏修精舍名曰道林。」

衍六堂記　宋　文天祥

余行長沙道湘西。登道林寺。舊有四絕堂。指沈傳師裴休筆札。宋之問杜甫之篇章也。堂之顏。吾鄉益國周公書之。至是百二十年。公又有記述蔣之奇語。之奇取歐陽詢書韓愈詩。而黜裴宋。公獨合古今異同。有衍四爲六之說。人之意度。相遠如此。僧志茂以屋壓字。漫壽公字於石。取公之之意。易名衍六。揭於新堂。余嘉其有二善焉。補唐賢故事。實乾淳遺墨。非俗衲所爲。爲之嘉歎。而記其後。

嶽麓道林二寺行

唐　杜市

玉泉之南麓山殊。道林林壑爭盤紆。寺門高開洞庭野。殿脚插入赤沙湖。五月寒風冷佛骨。六時天樂朝香爐。地靈步步雪山草。僧寶人人滄海珠。塔級宮牆壯麗敵。香廚松道清涼俱。遶花交響共命鳥。金榜雙廻三足烏。方丈涉海費時節。懸浦尋河知有無。暮年且喜經行近。春日兼蒙暄暖扶。飄然斑白身奚適。傍此煙霞茅可誅。桃源人家易制度。橘洲田土仍膏腴。潭府邑中堪淳古。太守庭內不喧呼。昔遭衰世皆晦迹。今幸樂國蒙微軀。依止老宿亦未晚。富貴功名焉足圖。久爲野客尋幽慣。細學何顏免興孤。一重一掩吾肺腑。山鳥山花吾友于。宋公放逐曾題壁。物色分留與老夫。

陪杜侍御遊湘西兩寺。獨宿有題。因獻楊常侍詩

唐　韓愈

長沙千年平。勝地猶在險。況當江閣處。斗起勢匪漸。深林高玲瓏。青山上琰琰。路窮臺殿閟。佛事煥且儼。剖竹走泉源。開廊架崖入。是時秋之殘。暑氣尚未斂。羣行忘後先。朋息乘拘檢。客堂喜空涼。華榻有清簟。溯蔬煮蒿芹。水果剝菱芡。伊余夙所慕。陪賞亦云忝。幸逢車馬歸。獨宿門不掩。山樓黑無月。漁火爍星點。夜風一何喧。杉檜屢磨颭。猶疑在波濤。怵惕夢成魘。近思屈原沈。遠憶賈誼貶。椒蘭爭妬忌。絳灌共讒譖。誰令悲生腸。坐使淚盈臉。翻飛乏羽翼。指摘困瑕玷。班貂滿維重。政化類分陝。禮賢道何優。奉己事苦儉。大廈棟方隆。巨川楫行剡。經營誠少暇。遊宴固已歉。旅程愧淹留。徂歲嗟荏苒。平生每多感。柔翰遇頻染。展轉嶽猿鳴。曙燈青晻晻。

道林詩

唐　崔珏

臨湘之濱麓之隅。西有松寺東岸無。松風千里擺不斷。竹泉瀉入於僧厨。宏梁大棟何足貴。山寺難有山泉俱。四時唯夏不敢入。燭龍安敢停斯須。遠公池上種何物。碧羅扇底紅鱗魚。香閣朝鳴大法鼓。天宮夜轉三乘書。野花市井栽不著。山鷄飲啄聲相呼。金檻僧廻步步影。石盆水濺聯聯珠。北臨高處日正午。舉手欲摸黃金烏。遙江大船小於葉。遠邨雜樹齊如蔬。潭州城郭在何處。東邊一片青模糊。今來古往人滿地。勞生未了歸邱墟。長卿之門久寂寞。五言七字誇規模。我吟杜詩清入骨。灌頂何必須醍醐。白日不照來陽縣。皇天厄死飢寒軀。明珠大貝采欲盡。蚌蛤空滿赤沙湖。今我題詩亦無味。懷賢覽古成長吁。不如興罷過江去。已有好月明歸塗。

寄道林諸友詩

唐　釋齊己

吟興終依異境長。舊遊時入靜思量。江聲裏過東西寺。樹影中行上下方。春色溼僧巾

屩風。松花沾鶴骨毛香。老來何計重歸去。千里重湖浪渺茫。

道林寺居寄嶽麓禪師詩　同

門前石路徹中峯。樹影泉聲在半空。尋去未應勞上下。往來殊已倦西東。髭根盡白孤雲竝。心跡全忘片月同。長憶高牕夏天裏。古松青檜午時風。

山袍不稱下紅塵。各是閒居塵外身。兩處煙霞門寂寂。一般苔蘚石磷磷。禪關悟後尊疑物。詩格元來不榜人。月照經行更誰見。露華松粉點衣巾。

寄居道林寺作　同

嵐沼南朝殿塔寒。此中因得謝煩襟。已回庭樹千株老。未負溪雲一片閒。石鏡舊遊臨皎潔。岳蓮曾上徹屏顏。於今衰颯成多病。黃葉風前盡掩關。

靖興寺　は醴陵縣西にあり、唐時之を建つ、明王守仁龍場に謫せられし時、こゝを過ぎて學を講ぜり、唐李靖嘗て兵をこゝに駐めしが故に靖興寺と稱すと傳ふ

靖興寺詩　明王守仁

隔水不見寺。但聞清磬來。已指峯頭路。始瞻雲外臺。洞天藏日月。潭窟隱風雷。欲詢興廢蹟。荒碣滿蒼苔。

泗州寺　は同じく醴陵縣西南にあり、一に崇林寺と稱す。唐代に之を建つ。亦王守仁講學の地也。

泗州寺詩　明王守仁

風雨偏從險道當。深泥沒馬陷車箱。盧傳烏通道巴蜀。豈必羊腸在太行。還道漸看連暝色。晚霞會喜見朝陽。水南昏黑投僧寺。還理叢編坐夜長。

淥水西頭泗州寺。今過轉眼又三年。老僧熟認直呼姓。笑我清癯不似前。每有客來看宿處。時留佛壁作燈傳。開軒掃榻還相慰。慚愧維摩世外緣。

開利寺　は湘潭縣南十六都にあり、唐代に建つ、寺中佛の高さ七丈、樓數層、嘗て將に傾かんとす、一夕大風震電あり、あしたに之を視れば平正故の如くなりしといふ。

宿開利寺詩　清陳鵬年

千年金碧護花宮。俯仰眞看帝座通。應爲低眉憐愛海。肯將呼吸問蒼穹。六朝僧老茶煙篆。三笑溪寒木葉紅。擬向松壇賒片席。夜來車馬亂霜鐘。

白鹿寺　は益陽縣南二里白鹿山にあり、唐の元和中裴休禪をこゝに談ず、

白鹿寺釋迦瑞相詩　唐　裴休

無相無虧有相圓。多生檀越種因緣。三千境見閻浮土。丈六身留兜率天。紺目輝騰滄海月。玉毫光射寶爐煙。道人參到非非處。不是丹霞破佛禪。

旌忠寺　は茶陵州西にあり、宋の岳飛之を建てゝ以て曹成を征討せし時に陣歿せし諸士の菩提を弔ふ、明代に至て名を青雲庵と易ふ、

南嶽觀　は衡山縣西北祝融峯南にあり、晉の太康八年にたて、梁の天監二年再び修葺を加へ、武帝莊田三百戸を賜へり、唐の貞觀二年太宗重ねて觀額を書す、觀中の碑文は隋の學士曹憲の撰なり、

方廣寺　は同じく衡山縣蓮花峯下にあり、梁の天監中建つ、宋の朱熹張栻嘗て遊べり、

方廣寺詩　唐　李白

聖寺閉棲睡眼醒。此時何處最幽清。滿窗明月天風靜。玉磬時聞一兩聲。

福嚴寺　は衡山縣北祝融峯前にあり、陳の大建中之をつくる、舊名を般若寺又は般若臺といふ、昔の太宗の染筆梵經二十卷ありしが今はなしといふ、宋の孝宗嘗て寺僧嗣清に詩を賜ひしに嗣清雲章閣をつくりて之を藏せり、清乾隆五年藏經一部を賜ふ、

自衡嶽至福嚴寺詩　宋　劉摯

俯仰巖谿萬仞臨。恨輸飛鳥極高深。青雲平地人難到。流水殘花路可尋。稍覺衣裾侵小雨。漸聞鐘磬下遙岑。丈人不厭頻來往。欲作香山得二林。

上封寺　は同じく衡山縣西北祝融峯上にあり、もと光天觀と稱せしが隋の大業中改めて寺となせり、方輿勝覽に曰く「寺在祝融絕頂。早秋已冰。夏亦夾衣。松之高大者。不過七八尺。謂之矮松。上有雷池。題詠甚多。」張栻集に曰く「上封寺門外寒松。皆拳曲臃腫。樛地下垂。冰雪凝綴。如蒼龍白鳳然。」

題上封寺詩　宋　胡宏

百年身似客。浩蕩世間遊。入望青山好。夢魂偏我留。我家巫山十二峯。浮江直過巴陵東。瀟湘水與蒼梧通。環繞衡嶽青冥中。扁舟白雲不可度。杖藜臘屐乘春風。山光浮動可攬結。雲舒霞卷飛煙虹。深巖大壑翠巇巇。足力已到心無窮。羣峯迤邐勢不競。上盡祝融五千仞。祝融峯高天更高。太空人世如牛毛。風雲萬變一瞬息。紅塵奔走真徒勞。

祝聖寺

祝聖寺　は衡山縣嶽廟東南にあり、即ち古への勝業寺にして唐代に建つ、初め彌陀臺と名け、後般舟道場と號し、更に彌陀寺と名け、遂に勝業寺といふ、清の康熙年中改めて南嶽行祠を建て、別に寺を沙坪に建つ、尋て行祠を改めて祝聖となし、經一部を藏し、勝業寺を祝聖に歸せり、而して舊勝業は遂に廢す、南嶽總勝集に曰く「勝業寺古聖容寺也、或云、禹建清冷宮、以祀舜、唐武宗廢、馬氏改爲報國寺、宋爲神霄宮、後復爲寺、賜額勝業、其西有悅亭禹柏庵」。

高臺寺

高臺寺　は縣北祝融峯にあり、即觀音巖なり、

高臺寺詩　宋　張鈞

萬仞孤高處、煙雲縹緲間、靈源聲不斷、轍跡蘚斑斑、山鳥應無畏、溪雲常自閑、凭闌長縱目、回首厭塵寰、

龍興寺

龍興寺　は零陵縣治の西南にあり、寺内に西軒ありて、柳宗元嘗て此に居れり、其西に淨土院あり、宋の元豐四年名を太平寺と改む、清の雍正十年寺の遺址に萬壽宮を建つ、傳へいふ漢の蔣琬の故宅なりと、

永州龍興寺修淨土院記　唐　柳宗元

中國之西數萬里、有國曰身毒、釋迦牟尼如來示見之地、彼佛言曰、西方過十萬億土有世界、曰極樂、佛號無量壽如來、其國無有三惡八難、衆寶以爲飾、其人無有十纏九惱、羣聖以爲友、有能誠心大願、歸心是土者、苟念力具足、則往生彼國、然後出三界之外、其於佛道無退轉者、其言無所欺也、晉時廬山遠法師、作念佛三昧、詠大勸於時、其後天台顗大師者、釋淨土十疑論、宏宣其教、周密微妙、迷者咸賴焉、蓋其留異跡而去者、甚衆、永州龍興寺、前刺史李承晊及僧法林、置淨土堂於寺之東偏、常奉斯事、逮今餘二十年、廉隅毀頓、圖像崩墜、會巽上人居其宇下、始復理焉、上人者、修最上乘、解第一義、無體空折色之跡、而造乎眞源、通假有借無之名、而入於實相、境與智合、事與理並、故雖往生之因、亦相用不舍、暫蓋茲宇以開、後學有信士、圖爲佛像、法相甚具焉、今刺史馮公作大門、以表其位、余遂周延四阿、環以廊廡、繪二大士之像、繪蓋幢幡、以成就之、嗚呼有能求無生之生者、知舟筏之存乎是、遂以天台十疑論、書於牆宇、使觀者起信焉、

龍興寺西軒記　同

永貞年、余名在黨人、不容於尙書省、出爲邵州、道貶永州司馬、至則無以爲居、居龍興

寺西序之下。予知釋氏之道且久。固所願也。然予所庇之屋。甚隱蔽。其戶北向。居昧昧也。寺之居。於是州爲高。西序之西屬。當大江之流。江之外。山谷林麓甚衆。於是鑿西墉以爲戶。戶之外爲軒。以臨羣木之杪。無所不矚焉。不徙席。不運几。而得大觀。夫室嚮者之室也。席與几嚮者之處也。嚮也昧而今也顯。豈異物邪。因悟夫釋之道。可以轉惑見爲眞智。卽羣迷爲正覺。舍大閣爲光明。夫性豈異物邪。孰能爲予鑿大昏之墉。開靈照之戶。廣應物之軒者。吾將與爲徒。遂書爲二。其一志諸戶外。其一以貽巽上人焉。

龍興寺巽公院五詠　同

淨土堂詩

結習自無始。淪溺窮苦源。流形及茲世。始悟三空門。華堂開淨域。圖像煥且繁。清冷焚衆香。微妙歌法言。稽首媿導師。超遙謝塵昏。

曲講堂詩

寂滅本非斷。文字安可離。曲堂爲何設。高士萬在斯。聖默奇言宣。分別乃無知。趣中卽空假。名相與誰期。願言絕聞得。忘意聊思維。

禪堂詩

發地結菁茅。團團抱虛白。山花落幽戶。中有忘機客。涉有本非取。照空不待析。萬籟俱緣生。窅然喧中寂。心境本洞如。鳥飛無遺跡。

芙蓉亭詩

新亭俯朱檻。嘉木開芙蓉。清香晨風遠。淥采寒露濃。蕭灑出人世。低昂多異容。曾聞色空喻。造物誰爲工。留連秋月晏。迢遞來山鐘。

苦竹橋詩

危橋屬幽徑。繚繞穿疎林。迸籜分苦節。輕筠抱虛心。俯瞰涓涓流。仰聆蕭蕭吟。差池下煙日。嘲哳鳴山禽。諒無要津用。棲息有餘音。

雪中過龍興寺詩　明　劉聲遠

雪壓藍輿入翠微。憑闌頓覺故心違。珠浮鉢面人猶臥。月上松枝鶴未歸。樓殿玲瓏雲外廻。煙霞縹緲望中非。老僧課罷殘經後。坐對孤鐙補衲衣。

太平寺

太平寺は零陵縣太平門內にあり、唐代には開元寺といふ、明の洪武初年に重建して今の名に改む、

酬婁秀才。寓居開元寺。早秋月夜病中見寄詩　唐　柳宗元

客有故園思。瀟湘生存愁。病依居士室。夢繞羽人邱。味道憐知止。還名得自求。壁空殘月曙。門掩候蟲秋。謬委雙金重。難徵雜佩酬。碧霄無枉路。徒此助離憂。

晚與曾公袞同登太平寺慈氏閣詩　宋　黃庭堅

青坡璃盆插千層。湘江水清無古今。何處拭目窮表裏。太平飛閣暫登臨。朝陽不開阜盍下。怨溪但見古木陰。誰與洗滌懷古恨。坐有佳客非孤斟。

無爲觀　は寧遠縣東南九疑山にあり、

無爲觀作　唐　元結

無爲洞口春水滿。無爲洞旁春水白。愛此踟躕不能去。令人悔作衣冠客。洞旁山僧皆學禪。無求無欲亦忘年。欲問其人不得問。我向此中得無悶。

圓通寺　は巴陵縣東にあり、東晉の世之を建て、明楚昭王重ねて建つ、曾て僧房の牀下に一木を生じ、旬日にして勢軒棟を凌ぐ、僧房を移して之を避くれは木の長すること便ち遲し、外國の沙門あり、之を見て謂つて曰く、此れ娑羅樹也、僧か所慾の麼、常に花を著け、細白雲の如し、元嘉十二年忽ち花を生じ狀芙蓉の如かりしと荆州記に見ゆ、寺内に羅漢井あり、

白鶴寺　は巴陵縣東南二里白鶴山上にあり、唐代に建つ、僧園に茶千餘本ありて頗る北苑所出の茶に類す、歲々の產額一二十兩に過ぎず、土人之を鶴茶といひ、味極めて甘香、他茶の比すへきにあらすといふ、

東禪寺　は桃源縣東にあり、

隆興寺　は沅陵縣西虎谿山にあり、

虎谿隆興寺開楊名父將到留韻壁間詩　明　王守仁

杖藜一過虎谿頭。何處僧房是惠休。雲起峯間沈閣影。林疏地底見江流。煙花日暖猶含雨。鷗鷺春閒自滿洲。好景同遊不同賞。詩篇還爲故人留。

第四　學校

長沙府學—寶慶府學　嶽麓書院—城南書院—求忠書院—石鼓書院—虎谿書院

湖南は近時に到り敎育事業頓に勃興して學堂の新設せらるゝもの省城のみにて已に數十に達す、たゞ未だ其詳を聞くを得さるを以て此篇姑く舊來の府學及書院を記するに止む、

長沙府學　は長沙府城正南門の右にあり、舊は城の東南にありしといふ、元の平

章阿里海牙遷して今の所に建つ、後兵火に燬けしが、明の洪武中明倫堂、射圃を建て、廊廡齋舍を增し、天順中尊經閣を、正德中號舍を、嘉靖中櫺星門を建て、又同年中知府潘鎰、敕を奉して敬一亭を建て、大成殿を修し、志道、據德、依仁、游藝の四齋を置く、而して樊景麟は泮池を鑿てり、隆慶中櫺星門の木を石に易へ、萬歷中司祭、更衣二館を增し、泮池を欞星門外に改め、爾後屢々修築して清朝に至れり、咸豐二年長髮賊長沙を犯せしとき一旦毀壞せしか同治三四兩年に巡撫恽世臨及李瀚章之を重建せり、

寶慶府學

寶慶府學　は寶慶府治の西にあり、舊は邵水の東にありしと、宋の治平四年權邵州事周敦頤之を建つ、紹興中徒して城に入れしか乾道中郡守胡華、遷して今の所に建つ、元末兵火に燬けたるも、明初同知程斗南之を重建し、爾後屢々改修して清朝に至る、

邵州遷學釋

宋　周敦頤

柴文維夫子道德高厚、敎化無窮、實與天地參、而四時同、上自國都、下及州縣、通立廟貌、州守縣令、春秋釋奠、雖天子之尊、入廟肅躬行禮、其重誠與天地並焉、儒衣冠學道業者、列室於廟中、朝夕目瞻睟容、心慕至德、日蘊月積、幾於顏氏之子者有之、得其位施其道、澤及生民者有之、然則夫子之宮可忽歟、而邵置於惡地、掩於牙門、左獄右庾、穢喧歷年、惇頤攝守州符、營拜堂下、惕汙流背、起而議遷、得地東南、高明協卜、用舊增新、不日成就、采章晃服、儼坐有序、諸生既集、率僚告成、謹以禮幣藻齊式陳、明薦以瓷國公顏子配、

嶽麓書院

嶽麓書院　は善化縣西嶽麓山下にあり、宋の開寶中潭州守朱洞之を建て四大書院の一たり、成平の初州守李允則其規模を崇大にし、中に講堂を開き、書樓を設け、先師十哲の像を塑し、七十二賢を畫く、允則又奏して舍宇を廣くし生徒を六十餘人となし國子監を下さんことを請ひ、且諸經釋文義疏、史記、玉篇、唐韻を賜らんことを請ひて許さる、祥符五年山長周式、州守劉師道に請ひて其居を廣くし、八年召されて便殿に帝に謁し、國子主薄に拜し歸て敎授せしめ、詔して嶽麓書院の名を以て中秘書を贈賜す、是に於て嶽麓書院の名天下に聞ゆ、乾道の初、帥臣劉珙重建す、四齋をつくり養士額二十人と定め、張拭、朱熹相與に講學す、且朱熹は手づから忠孝廉節の四大字を堂に書せり、淳熙の末、帥臣潘畤二齋を廣め額十人を益す、紹

嶽麓書院天下四大書院の一

張拭朱熹相共に講學す朱子忠孝廉節の四大字

山長を置くこと白鹿洞の例の如くす

日講經史十六種を賜ひ御書樓を建つ

熙中朱熹潭帥となり、銳意興學し四方影從するもの幾ど千人に至る、淳祐中宸筆嶽麓書院の四字を賜はり之を門に揭げ、德祐中兵に燹け、元末復兵に燹け、明の成化中重建し、宏治中誠明、敬義の二齋及崇道祠、高明亭を增建し、又尊經閣を建つ、正德中守道吳世忠、泮池を鑿り欞星門を建て田百畝を增置す、嘉靖六年六君子祠、成德堂及東西の講堂、延賓集賢二館を建つ、其齋を誠明、敬義、日新、時習といひ、號舍を智仁勇天地人といふ、三門を堂外に闢き赫曦臺を山下に築き、田千四百餘畝を增置す、復請ふて書を賜ひ山長を置くこと白鹿洞の例の如くす、同九年御製敬一亭の碑を增建す、同十二年成德堂を改めて靜一といふ、後屢々修せしが明末に至り兵火に燹く、清朝に至り康熙七年巡撫周召南重建せしも次て燹け、同二十三年巡撫丁思孔重ねて修し、窩火田數百畝を置き、上疏して御書扁額を請ふ、遂に學達性天の扁額及日講の經史十六種を賜ひ、思孔院後に御書樓を建て、之を藏す、雍正十一年巡撫鍾保又旨を奉して山長主教恩を經て諸生に窩火銀千兩を賜へり、乾隆二年九年に重修し、特に九年には道南正脈の扁額を賜へり、同十年巡撫錫紱江を隔てゝ校課多く風濤に阻まるゝを以て生童を移して城南書院に肄業せし

御書道南正脈

文昌閣を重建す

湘水校經堂

今の山長は國子監祭酒王先謙

む、同十九年巡撫胡寶瑔田租三處を撥きて歲修の經費に充つ、同二十一年巡撫陳宏謀復諸生を移して本院に歸せしめ董生を城南に留め、給するに窩火を以てせり、爾後屢々重修す、嘉慶十七年朱張渡亭を建つ、爾後復屢々修し同二十二年文昌閣を重建し、道光十六年に湘水校經堂を建つ、咸豐二年長髮賊長沙を犯し、齋舍傾圮せしが山長諸生を率ゐて修葺せり、同治八年巡撫劉崑之を新建し規則具備すといふ、今の山長を王先謙と云ひ國子監祭酒に官たり、博學にして聲望高く、其著書中に日本源流考ありといふ、

嶽麓書院記

宋　張栻

湘西故有藏書室。背陵而面壑。木茂而泉潔。爲士子肄業之地。開寶中。郡守朱洞。始度基搬甃。以待四方學者。歷四十有載。居益加葺。生益加多。李允則來爲州。請於朝。乞以書藏。方是時。山長周式。以行義著。祥符八年。召見便殿。拜國子學主簿。使歸教授。詔以嶽麓書院名。增賜中秘書。於是書院之稱。始聞天下。皷笥登堂者。相繼不絕。自紹興辛亥。更兵革灰燼。什一僅存。間有留意。則不過褻陋。仍弊而又重以徹廢。鞠爲荒榛。過者歎息。乾道改元。建安劉侯珙。安撫湖南。旣別盜薙奸。民俗安靜。則葺學校。訪儒雅。思有

以振起湘人士合辭以書院請侯竦然曰是固章聖皇帝加惠一方勸勵長養以風天下者而可廢乎乃命郡教授婺源郭穎董其事鳩廢材用餘力未半歲而屋成焉屋五十楹大抵悉還舊規肖先聖像於殿中列繪七十子而加藏書閣於堂之北既成拭從多士往觀愛其山川之盛棟宇之安徘徊不忍去以爲會友講習誠莫此地宜也已而與多士言曰侯之爲此舉也豈特使子羣居佚談但爲決科利祿計乎亦豈使子習爲言語文辭之工而已乎蓋欲造就人才以傳道而濟斯民也惟民之生厥有常性而不能以自達故有賴聖賢者出三代導人教學爲先人倫明小民親而王道成夫子在當時雖不得施用而兼愛萬世實開無窮之傳果何與曰仁也仁人心也率性立命位天地而宰萬物者也今夫目視而耳聽手持而足行以至於飲食起居言動之際謂道而有外夫是烏可乎雖然天理人欲同行異情毫釐之差得壤之謬此所以求人之難必貴於學以明之與善乎孟子之發仁深切也齊宣王見一牛之觳觫而不忍則教之曰是心足以王矣古之人所以大過人者善推其所爲而已矣論堯舜之道本於孝弟則欲體乎徐行疾行之間指乍見孺子匍匐將入井之時則曰惻隱之心仁之端也於此焉求之則不差矣嘗試察吾事親從兄應物處事是端也其或發見亦知其所以然乎苟能默識而存擴充而達之生生之妙油然於中則仁之大體豈不可得乎及其至也與天地合德鬼神同用悠久無疆變化莫測而其初則不遠也是乃聖賢所傳之要從事於茲終身而後已可也雖然間居屏處庸何損於我得時行道事業滿天下而亦何加於我侯屬拭爲記遂書斯言以勵同志俾無忘侯之德抑又以自勵云爾

措置嶽麓書院牒

宋　朱熹

本州州學之外復置嶽麓書院本爲有爲之士不遠千里求師取友至於是邦者無所棲泊以爲優游肄業之地故前帥樞密忠肅劉公持因舊基復搬新館延請故在司侍講張公先生往來其間使四方來學之士得以傳道授業解惑焉此意甚遠非世俗常所見到也而比年以來師道陵夷講論廢息士風不振議者惜之某叨冒假守蒙被訓辭深以講學教人之務爲寄願恨庸鄙弗克奉承到官兩月又因簿書未能一往謁殿升堂延見諸生諮考所合罷行事件庶革流弊以還舊規除已請到醴陵黎君貢生充講書職事與學錄鄭貢生同行措置外今議別置額外十員以處四方游學之士依州縣則例曰破米一升四合錢六十文更不補試聽候當職考察搜訪徑行撥入者庶幾有以上廣聖朝教育人材之意使凡爲學者知所當務不專在區區課試之間實非小

補。牒教授及帖書院。照會施行。仍請一面指揮若干人。排備齋舍几案牀榻之屬。並帖錢糧官。於本州贍學料次錢。及書院學糧內。通融支給。須至行遣。

重修嶽麓書院詩　清　王岱

朱陵起壘嶂。超遙生群峯。其峯七十二。茲山在湖衙。鬱葱互江郭。蒼翠來城墉。上有峭嶫碑。下有白鶴蹤。昔賢傳絕學。息靜時過從。講堂構精傑。林木多橘松。歲深跡已圮。斂澤盤蛇龍。斯文應不墜。興復欣再逢。三韓有畸人。經緯羅心胸。既深象教秘。復究河洛宗。春陵道再展。絕構開蒙茸。輪奐益軒爽。氣象生蕭雍。斯道如日星。後起資陶鎔。嶙峋倉頡書。宜歌暮禹功。

城南書院　は長沙府城南門外にあり、宋張栻潭を守れる時、この書院を南門外妙高峯の陽に建てゝ講學し、名くるに十景を以てす、曰く納湖、曰く麗澤堂、曰く書樓、曰く蒙軒、曰く卷雲亭、曰く月榭、曰く琮琤谷、曰く聽雨舫、曰く采菱舟、曰く南阜、朱子と互に題詠あり、其後一旦廢して寺となりしが明の正德中參議吳世忠、學道陳鳳梧請ふて舊觀に復す、爾後隆替ありて清朝に至る、乾隆十年巡撫楊錫紱嶽麓書院の江を隔てゝ毎に校課風濤のために阻まるゝを以て、遷して南門內天心閣舊都司署地に建て名はその舊により、嶽麓の書生童を移して其中に肄業せしむ、而して御書樓、禮殿、講堂、齋舍を建て、正誼、主敬、進德、存誠、居業、明道六齋を分つ、計八十間なり、同二十一年巡撫陳宏謀復諸生を移して嶽麓に肄業せしめ、新生童生のみを留めて本院に肄業せしむ、道光二年巡撫左輔、地市塵に近く且縣治に隣るを以て復遷して今の所に建て、上疏して御書扁額を懇請す、尋で麗澤風長の四字を賜ふ、是より先き、本院は長沙の生童を收錄するに止まりしが此に至て、始めて改めて通省肄業の地となせり、其後日新齋を增建す、咸豐二年長髮賊長沙を犯せしとき堂室齋舍毀壞せしも山長陳本欽之を修葺し、同治九年巡撫劉崑重修す、今の山長は劉苞也

五月十六日夜城南觀月詩　宋　張栻

梅收清風來。宇淨寶鑑揭。頻年城南遊。未有今夜月。呼舟泛微瀾。遊魚亦出沒。危榭倒影浮。倚檻涼入骨。舉酒屬西山。寒光動林樾。諸君興未已。南阜上突兀。目極大江流。高情更超越

三月七日城南書院偶成詩　同

積雨欣始霽。清和在斯時。林業既敗榮。禽聲亦融怡。鳴泉來不窮。湖風起淪漪。西山卷餘雲。遂覺秀色滋。曆曆叢祿間。愛彼松柏姿。青青初不改。似與幽人期。坐久還起步。隄邊足逶迤。遊魚傍我行。野雀向我飛。敢云昔賢志。亦復詠而歸。

同

城南書院十景詩

麗澤堂詩

長嘯伐木篇。佇立以望子。日暮飛鳥歸。門前長春水。

書樓詩

高樓出林杪。中有千載書。昔人不可見。依檻竟何如。

蒙軒詩

開軒僅尋丈。水竹亦蕭疏。客來須起敬。題榜了翁書。

卷雲亭詩

雲生山氣佳。雲轉山氣靜。隱凡亦何心。此氣相與永。

月榭詩

危闌明倒影。面面湧金波。何處無佳所。唯應此地多。

南阜詩

湘水接洞庭。秋山見遙碧。南阜時一登。搔首意無斁。

納湖詩

源源錫潭水。匯北南城陰。岸花有開落。水盈無淺深。

聽雨舫詩

風吹渡頭雨。槭槭逐上聲。欣然會心處。端復與誰評。

采菱舟詩

杖策下亭柯。水清魚可數。郤上采菱舟。乘風過南楚。

城南十景爲敬夫賦詩。

麗澤堂詩

堂後林影密。堂前湖水深。感君懷我意。千里夢相尋。

書樓詩

君家一編書。不自圯上得。石室寄林端。時來玩幽賾。

蒙軒詩

宋　朱熹

先生湖海姿。蒙養今日開。銘坐仰先賢。點畫存象槩。

卷雲亭詩

西山雲氣深。徒倚一舒嘯。浩蕩忽塞開。爲君展遐眺。

月榭詩

月色三秋白。湖光四面平。與君凌倒影。上下極空明。

南阜詩

高邱復崇觀。何日共登臨。一日長空盡。寒江別暮岑。

納湖詩

詩筒連盡卷。坐看復行吟。想像南湖水。秋來幾許深。

聽雨舫詩

綵舟停盡槳。客與得欲眠。夢破遂聰雨。寒聲動一川。

采菱舟詩

湖平秋水碧。桂棹木蘭舟。一曲菱歌晚。鷗飛欲下鷗。

城南詩

東渚詩

團團凌風桂。宛在水之東。月色穿林影。郤下碧波中。

詠歸橋詩

四序有佳趣。今古蓋共茲。橋邊獨徵眺。回首忘所之。

船齋詩

窗低蘆葦秋。更有江湖思。久已倦垂綸。游魚不須避。

蘭湖詩

蘭湖北磵側。磵曲風紆餘。願言植根固。芬芳長慰予。

山齋詩

疊石小崢嶸。脩篁高下生。地偏人蹟罕。古井轆轤鳴。

石瀨詩

流泉自清瀉。觸石短長鳴。窮年竹根底。和我讀書聲。

柳堤詩

前年種垂柳。已復如許長。長條莫攀折。留待映滄浪。

濯清亭詩　朱熹

夫容豈不好。濯濯清漣漪。采之不盈把。惆悵暮忘飢。

西嶼詩

繫舟西岸邊。幅巾自來去。島嶼花木深。蟬鳴不知處。

梅堤詩

亭亭堤上梅。歷歷波間影。歲晚憶夫君。寂寞煙渚靜。

城南詩奉同敬夫兄城南之作

東渚詩

小山幽桂蘂。歲暮藹佳色。花落洞庭波。秋風渺何極。

詠歸橋詩

綠漲平橋水。朱欄跨小橋。舞雩千載事。歷歷在今朝。

船齋詩

考槃雖有陸。泥滓水雲深。正爾滄州趣。難忘魏闕心。

蘭澗詩

光風浮碧間。蘭杜日猗猗。竟歲無人采。含薰祇自知。

山齋詩

藏書樓上頭。讀書樓下屋。愧哉千載心。俯仰數椽足。

石瀨詩

疏此竹下渠。漱彼澗中石。莫館繞寒聲。秋空動澄碧。

柳堤詩

濯華初出水。堤樹亦成行。吟罷天津句。薰風拂面涼。

濯清亭詩

涉江采芙蓉。十反心無數。不過無極翁。深衷竟誰識。

西嶼詩

朝吟東嶼風。夕弄西嶼月。人境諒非遙。湖山自幽絕。

梅堤詩

仙人冰雪姿。貞秀絕倫擬。驛使詎知問。尋香問煙水。

求忠書院　は長沙府城北門內古荷花池の東にあり、咸豐四年巡撫駱秉章、郡紳曾

忠臣を求めんと欲すれば宜しく忠齋を培ふべし

篤志三齋近思三齋

國潢等が軍興りて日久しく殉難者多く、忠臣を求めんと欲すれば宜しく忠齋を培ふべしとの趣旨に據り、疏して別に書院を建て、額して求忠といはんと請ひ許可せらる、因て各路の統兵將帥偏裨等の捐貲及鹽金、鹽茶等の稅額中より支出して建つ、篤志三齋、近思三齋を分ち又附屬の田園を置きて以て齋火に資せり、後原產を以て價に變し、基本金額を合して銀萬三千兩を鹽道に交し、典商に付して息を生ぜしめ嶽麓城南兩書院と一例に支發す、同治六年近思新齋を增建せり、今の山長は汪槩也

石鼓書院

石鼓書院　は衡陽縣北二里の石鼓山にあり、丞湘二水合流の中に當り內に石鼓ありて高六尺、舊は尋眞觀といひ、唐元和中州人李寬廬を結んで其上に讀書す、大守文宇炫、山の東に題して東巖といひ、西に題して西溪といふ、宋至道中郡人李士眞、寬が故事を援き郡守に請ひ、故址につきて書院を剏しめ、以て學者を居らしむ、景祐中郡守劉沅朝に請ひて額を賜はるを得、遂に唯陽白鹿嶽麓と四大書院と稱せらる、爾後淳熙中修葺し、開慶中兵に燬け、重ねて建て、並に仰高樓を構へ、附屬の田三百五十畝を置く、元の季復燬け、明代に到りて葺修す、院前を櫺星門、次を禹碑亭となす、亭の東西翼を號舍若干楹となし、亭後を敬義堂となす、石磴を循て上れは中に孔子燕居堂あり、後を風雲亭となし、亭後を講堂とす、旁に主靜定性の二齋堂を列し後を先賢祠となす、祠後を砥柱、中流坊となし坊後を寓賢祠とせり、明末復兵に燬け、清朝の順治十四年巡撫袁廓宇重建し爾後屢修せり

石鼓書院記　宋　朱熹

石鼓據烝湘之會、江流環帶最爲一郡佳處、故有書院、起唐元和間州人李寬之所爲、至國初時嘗賜勅額、其後乃復稍徙而東、以爲州學、則書院之跡、於是遂廢、而不復修矣、淳熙十二年、部使者東陽潘侯時德夫、始因舊址列屋數間、榜以故額、將以俟四方之士、有志於學而不屑於課試之業者居之、未竟而去、今使者成都宋侯若水子淵、又因其故益廣之、別建重屋以奉先師先聖之像、且摹國子監及本道諸州印書若干卷、而俾郡縣擇遣修士、以充入之、蓋連帥林侯栗諸、使者蘇侯翊、管侯鑑、衡守薛侯伯宣、皆奉金資劃公田、以佐其役、逾年而後落其成焉、於是宋侯以書來曰、願記其實、以詔後人、且有以幸教其學者、則所望也、予惟前代庠序之教、不修士病無地、爲學往往擇勝地立精舍、以爲群居講習之所、而爲政者、乃成就而褒表之、若此山若嶽麓若白鹿

洞之類是也。逮至本朝。慶歷熙寧之際。學校之官。遂徧天下。而前日處士之廬。無所用。則其舊跡之蕪廢。亦其勢然也。不有好古圖舊之賢。孰能體而存之哉。抑今郡縣之學宮置博士弟子員。皆未嘗考德行道義之素。其所授受又皆世俗之書。進取之業。使人見利而不見義。士之有志爲己者。蓋羞言之。是以嘗欲別求燕閒清曠之地。以共講其所聞而不可得。此二公所以慨然發憤於斯役而不敢憚其煩。蓋非獨不忍其舊跡之蕪廢而已也。故特爲之記其本末。以告來者。使知二公之所以然者。而無以今日學校科舉之意亂焉。又以風曉在位。使知今日學校科舉之敎。其害將有不可勝者。不可以是爲適然而莫之救也。若諸生之所以爲學而非今之人所謂學。則昔吾友張子敬夫。所以記嶽麓者。詳矣。顧於下學之功。有所未究。是以誦其言者。不知所以從事之方。而無以蹈其實。然今亦何以他求爲哉。亦曰。養其全於未發之前。察其幾於將發之際。善則擴而充之。惡則克而去之。其亦如此而已。又何俟於余言哉。

石鼓書院懷諸葛武侯詩

明　管大勳

絕代有臥龍。長嘯南陽曲。生丁炎運微。群雄爭角逐。三顧識帝胄。歡如魚水浴。督餉鎭臨烝。經略始南服。分荆削吳魏。興劉定巴蜀。義旗飓祁山。賊臣膽先戮。傷哉伊呂儔。王業竟鼎足。兩表出師心。千古仰芳躅。

石鼓書院詩

明　陳宗契

未討金科蹟。先探石鼓文。千峯杯外落。二水檻前分。古碣餘秦篆。荒臺滯楚雲。西牕青一帶。岳色遠氤氲。

虎谿書院

虎谿書院　は辰州府城の西虎谿山にあり、舊名を白雲軒といふ、明の正德中王守仁貴州に謫せられ此を經て郡人唐愈賢と講學す、嘉靖中通判徐珊、虎谿精舍を建つ、內に修道堂あり、隆慶中知府徐廷綬講堂學舍を增設し、堂に名けて當仁といふ、崇禎中守道樊良樞名を陽明書院と易へ後廢す、清朝康熙四十五年知府運煥重建し、雍正四年同知黃澍增修す、同十一年沅陵縣知縣趙念曾今の名に易へ爾後屢重修す、松雲軒、玉芝亭、好景樓、鷗鷺居の諸勝あり

與辰州諸生論收放心書

明　王守仁

謫居兩載。無可與語者。歸途乃得諸友。方以爲喜。又據爾別去。殊怏怏也。絕學之餘。求道者少。一齊衆楚。最易搖奪。自非豪傑。鮮有卓然不變者。諸友宜相砥礪夾持。務期有成。近世士大夫。亦有稍知求道者。皆因實德未成而先揭標榜。以來世俗之謗。是以往

往驟墮無立。反爲斯道之梗。諸友宜以爲鑒。刊落聲華。無於切己處著實用力。前所云。靜坐非欲坐禪入定。蓋因吾輩平日爲事物紛挐。未知爲已。欲以此補小學收放心一段功夫耳。明道云。纔學便需知有著力處。既學便須知有得力處。諸友宜於此處著力。方有進步。異時始有得力處也。學要鞭辟近裏著己。君子之道。闇然而日章。爲名與爲利。雖清濁不同。然其利心則一。謙受益。不求異於人。而求同於理。此數言宜書之壁間。常目在之。學業不患妨功。惟患奪志。只如前日所約。循々爲之。亦自兩無相礙。所謂知得灑掃應對。便是精義入神地也。

第五編　人物

曾國藩の湖南文徵序に言へるあり、曰く『湖南之爲邦。北枕大江。南薄五嶺。西接黔蜀。犀苗所萃。蓋亦山國荒僻之亞。然周之末。屈原出於其間。離騷諸篇。爲後世言情韻者所祖。逮乎宋世。周子復生於斯。作太極圖說通書。爲後世言義理者所祖。兩賢者皆。前無師承。創立高文。上與詩經周易同風。下而百代逸才。學莫能越其範圍。而況湖湘後進。沾被流風者乎』。と洵に然り。屈周二子は湖南文學の淵源にして、又其精華たり、然り而して湖湘の後進、流風に沾被し、學術文章の紹述するに足るべきもの、歷代其迹を絕たず、近代に至り、曾國藩千古を曠ふするの偉材を懷て、之を文章に布き、之を經綸に施こす、其餘左宗棠、胡林翼、羅澤南、曾國荃、彭玉麟、等の英豪を輩出して、撥亂反正の偉業を樹立したるが如き、湖南を研究せんとするもの、其學派系統の逐ふ可く、勳業偉績の素有るを知らざるべからず、今特に屈周二子と、曾國藩とを標出して、別傳を立て、歷代の人物、學者と其編著、湖南に關係ある歷代の人物等の各項に分

ちて、次第に之を序せんとす、

第一章　湖南の三偉人

第一　屈平

屈平は楚人世に所謂屈原也、後世情韻をいふものゝ祖と稱せらる、周顯王二十六年戊寅即ち楚宣王二十七年に生る、楚と同姓なり、懷王に仕へて三閭大夫たり、博聞强志頗る經世の才を有せりき、嘗て憲令の草稿を上官大夫に與へざりしに因て讒せられ懷王の疎んずる所となる、屈平乃ち邪曲の公を害し方正の容れられざるを慨して離騷を作る、當時六國漸く衰へて秦勢日に强大なり、秦齊を伐たんと欲して齊楚の相善きを憚り、先づ絶代の策士張儀を楚に遣はし啗はすに地六百里を以てして齊楚を離間せしむ、實に屈平三十二歲の時にあり、平已に紐けらるゝを以て懷王に諫議する能はず、既にして楚秦の逆約を怒り兵を發して之を伐つて大敗し、魏も亦楚の不利に乘じて來り侵し齊は袖手して救はず、楚國大に困しむ、明年秦漢中の地を割きて楚と和せんことを求むるや懷王たゞ張儀を得て甘心せんとし却て復張儀の詭辯に弄せられて之を釋放す、會々屈平齊に使して還り懷王を諫めて曰、何すれぞ張儀を殺さゞりしと、懷王悔ゐて之を追はしめたれども及ばず、爾後諸侯相共に楚を擊ち、楚の國勢日に非なり、時に秦昭王楚と婚し懷王と會せんことを求む、屈平曰く秦は虎狼の國、信ずべからずと、懷王可かすして少子子蘭の言に從ひ秦に赴いて抑留せられ三年にして卒す、頃襄王立つて弟子蘭を令尹に任す、時人皆子蘭が懷王を勸めて秦に入らしめしを誹る、屈平も亦素より之を嫉めり、而して身放流せらるゝと雖、心一日も楚と懷王とを忘れず、ひたすら君の一悟と俗の一改とを冀幸して離騷中三たび茲に意を致せしも其效あらざりき、子蘭屈平が己れを短するをきゝ大に怒つて上官大夫をして之を頃襄王に譖し、屈平を江南に遷さしむ、實にこれ屈平の五十歲、頃襄王の四年、赧王の二十年とす、屈平髮を被つて澤畔に行吟し濁世汚俗を慨して遂に石を懷き汨羅に投じて死す、實にその年の五月五日（一說に曰く五月望日）也、或は曰ふ屈平眞に汨羅に死せしにあらず、其江魚の腹中に葬られんといひしものは即ち桴に乘して海

に浮ぶの謂なりと、未だ孰れか是なるを知らず、後人之を痛惜し祠を建てゝ祀る、

屈平瘦細美髯、丰神朗秀、長け九尺、奇服高冠を好み、一日三たび纓を濯ぎしといふ、

司馬遷曰く「夫天者人之始也、父母者人之本也、人窮則反本、故勞苦倦極未嘗不呼天也、疾痛慘悽未嘗不呼父母也、屈平正道直行、竭忠盡智、以事其君、讒人間之、可謂窮矣、信而見疑、忠而被謗、能無怨乎、屈平之作離騷、蓋自怨生也、國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂、若離騷者、可謂兼之矣、上稱帝嚳、下道齊桓、中述湯武、以刺世事、明道德之廣崇、治亂之條貫、靡不畢見、其文約、其辭微、其志潔、其行廉、其稱文小而其指極大、舉類邇而見義遠、其志潔、故其稱物芳、其行廉、故死而不容、自疎濁淖汚泥之中、蟬蛻濁穢、以浮游塵埃之外、不獲世之滋垢、皭然泥而不滓者也、推此志也、雖與日月爭光可也」と品し得て餘蘊なしと謂ふべし、離騷は猶バイロン其者のバイロン詩集に於けるが如く、直にこれ屈平其人の寫影なり、人若し屈平を知らんと欲せば離騷を風咏するに如くはなし、離騷を掲げ附するに歌章數篇を以てす、

離騷經

帝高陽之苗裔兮、朕皇考曰伯庸、攝提貞于孟陬兮、惟庚寅吾以降、皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名、名余曰正則兮、字余曰靈均、紛吾既有此內美兮、又重之以脩能、扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以爲佩、汩余若將不及兮、恐年歲之不吾與、朝搴阰之木蘭兮、夕攬洲之宿莽、日月忽其不淹兮、春與秋其代序、惟草木之零落兮、恐美人之遲暮、不撫壯而棄穢兮、何不改此度、乘騏驥以馳騁兮、來吾道夫先路、昔三后之純粹兮、固衆芳之所在、雜申椒與菌桂兮、豈維紉夫蕙茝、彼堯舜之耿介兮、既遵道而得路、何桀紂之猖披兮、夫唯捷徑以窘步、惟夫黨人之偷樂兮、路幽昧以險隘、豈余身之憚殃兮、恐皇輿之敗績、忽奔走而不能舍也、指九天以爲正兮、夫唯靈脩之故也、曰黃昏以爲期兮、羌中道而改路、初既與余成言兮、後悔遁而有他、余既不難夫離別兮、傷靈脩之數化、余既滋蘭之九畹兮、又樹蕙之百畝、畦留夷與揭車兮、雜杜衡與芳芷、冀枝葉之峻茂兮、願竢時乎吾將刈、雖萎絕其亦何傷兮、哀衆芳之蕪穢、衆皆競進以貪婪兮、憑不猒乎求索、羌內恕己以量人兮、各興心而嫉妒、忽馳騖以追逐兮、非余心之所急、老冉冉其將至兮、恐脩名之不立、朝飲木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英、苟余情其信姱以練要兮、長頗頷亦何傷、擥木根以結茝兮、貫薜荔之落蕊、矯菌桂以紉蕙兮、索胡繩之纚纚、謇吾法夫前脩兮、非世俗之所服、雖

不周於今之人兮。願依於彭咸之遺則。長太息以掩涕兮。哀民生之多艱。余雖好脩以鞿羈兮。謇朝誶而夕替。既替余以蕙纕兮。又申之以攬茝。亦余心之所善兮。雖九死其猶未悔。怨靈脩之浩蕩兮。終不察夫民心。衆女嫉余之蛾眉兮。謠諑謂余以善淫。固時俗之工巧兮。偭規矩而改錯。背繩墨以追曲兮。競周容以爲度。忳鬱邑余侘傺兮。吾獨窮困乎此時也。寧溘死以流亡兮。余不忍爲此態也。鷙鳥之不群兮。自前世而固然。何方圜之能周兮。夫孰異道而相安。屈心而抑志兮。忍尤而攘詬。伏清白以死直兮。固前聖之所厚。悔相道之不察兮。延佇乎吾將反。回朕車以復路兮。及行迷之未遠。步余馬於蘭皐兮。馳椒丘且焉止息。進不入以離尤兮。退將復脩吾初服。製芰荷以爲衣兮。集芙蓉以爲裳。不吾知其亦已兮。苟余情其信芳。高余冠之岌岌兮。長余佩之陸離。芳與澤其雜糅兮。唯昭質其猶未虧。忽反顧以游目兮。將往觀乎四荒。佩繽紛其繁飾兮。芳菲菲其彌章。民生各有所樂兮。余獨好脩以爲常。雖體解吾猶未變兮。豈余心之可懲。女嬃之嬋媛兮。申申其詈予。曰鯀婞直以亡身兮。終然殀乎羽之野。汝何博謇而好脩兮。紛獨有此姱節。薋菉葹以盈室兮。判獨離而不服。衆不可戶說兮。孰云察余之中情。世並舉而好朋兮。夫何煢獨而不予聽。依前聖以節中兮。喟憑心而歷茲。濟沅湘以南征兮。就重華而陳詞。啓九辯與九歌兮。夏康娛以自縱。不顧難以圖後兮。五子用失乎家巷。羿淫遊以佚畋兮。又好射夫封狐。固亂流其鮮終兮。浞又貪夫厥家。澆身被服強圉兮。縱欲而不忍。日康娛而自忘兮。厥首用夫顛隕。夏桀之常違兮。乃遂焉而逢殃。后辛之菹醢兮。殷宗用而不長。湯禹儼而祗敬兮。周論道而莫差。舉賢而授能兮。循繩墨而不頗。皇天無私阿兮。覽民德焉錯輔。夫維聖哲以茂行兮。苟得用此下土。瞻前而顧後兮。相觀民之計極。夫孰非義而可用兮。孰非善而可服。阽余身而危死兮。覽余初其猶未悔。不量鑿而正枘兮。固前脩以菹醢。曾歔欷余鬱邑兮。哀朕時之不當。攬茹蕙以掩涕兮。霑余襟之浪浪。跪敷衽以陳辭兮。耿吾既得此中正。駟玉虬以乘鷖兮。溘埃風余上征。朝發軔於蒼梧兮。夕余至乎縣圃。欲少留此靈瑣兮。日忽忽其將暮。吾令羲和弭節兮。望崦嵫而勿迫。路曼曼其脩遠兮。吾將上下而求索。飲余馬於咸池兮。總余轡乎扶桑。折若木以拂日兮。聊逍遙以相羊。前望舒使先驅兮。後飛廉使奔屬。鸞皇爲余先戒兮。雷師告余以未具。吾令鳳鳥飛騰兮。繼之以日夜。飄風屯其相離兮。帥雲霓而來御。紛總總其離合兮。斑陸離其上下。吾令帝閽開關兮。倚閶闔而望予。時曖曖其將罷兮。結幽蘭而延佇。世溷濁而不分兮。好蔽美而嫉妒。朝吾將濟於白水兮。登閬風而繫馬。忽反顧以流涕兮。哀高丘之無女。溘吾遊此春宮兮。折瓊枝以繼

佩。及榮華之未落兮。相下女之可詒。吾令豐隆乘雲兮。求宓妃之所在。解佩纕以結言兮。吾令蹇脩以爲理。紛總總其離合兮。忽緯繣其難遷。夕歸次於窮石兮。朝濯髮乎洧盤。保厥美以驕傲兮。日康娛以淫遊。雖信美而無禮兮。來違棄而改求。覽相觀於四極兮。周流乎天余乃下。望瑤臺之偃蹇兮。見有娀之佚女。吾令鴆爲媒兮。鴆告余以不好。雄鳩之鳴逝兮。余猶惡其佻巧。心猶豫而狐疑兮。欲自適而不可。鳳皇既受詒兮。恐高辛之先我。欲遠集而無所止兮。聊浮游以逍遙。及少康之未家兮。留有虞之二姚。理弱而媒拙兮。恐導言之不固。世溷濁而嫉賢兮。好蔽美而稱惡。閨中既以邃遠兮。哲王又不寤。懷朕情而不發兮。余焉能忍與此終古。索藑茅以筳篿兮。命靈氛爲余占之。曰兩美其必合兮。孰信脩而慕之。思九州之博大兮。豈唯是其有女。曰勉遠逝而無狐疑兮。孰求美而釋女。何所獨無芳草兮。爾何懷乎故宇。世幽昧以眩曜兮。孰云察余之善惡。民好惡其不同兮。惟此黨人其獨異。戶服艾以盈要兮。謂幽蘭其不可佩。覽察草木其猶未得兮。豈珵美之能當。蘇糞壤以充幃兮。謂中椒其不芳。欲從靈氛之吉占兮。心猶豫而狐疑。巫咸將夕降兮。懷椒糈而要之。百神翳其備降兮。九疑繽其並迎。皇剡剡其揚靈兮。告余以吉故。曰勉陞降以上下兮。求榘矱之所同。湯禹嚴而求合兮。摯咎繇而能調。苟中情其好脩兮。又何必用夫行媒。說操築於傅巖兮。武丁用而不疑。呂望之鼓刀兮。遭周文而得舉。甯戚之謳歌兮。齊桓聞以該輔。及年歲之未晏兮。時亦猶其未央。恐鶗鴂之先鳴兮。使夫百草爲之不芳。何瓊佩之偃蹇兮。衆薆然而蔽之。惟此黨人之不諒兮。恐嫉妒而折之。時繽紛其變易兮。又何可以淹留。蘭芷變而不芳兮。荃蕙化而爲茅。何昔日之芳草兮。今直爲此蕭艾也。豈其有他故兮。莫好脩之害也。余以蘭爲可恃兮。羌無實而容長。委厥美以從俗兮。苟得列乎衆芳。椒專佞以慢慆兮。椒又欲充夫佩幃。既干進而務入兮。又何芳之能祇。固時俗之流從兮。又孰能無變化。覽椒蘭其若茲兮。又況揭車與江離。惟茲佩之可貴兮。委厥美而歷茲。芳菲菲而難虧兮。芬至今猶未沫。和調度以自娛兮。聊浮游而求女。及余飾之方壯兮。周流觀乎上下。靈氛既告余以吉占兮。歷吉日乎吾將行。折瓊枝以爲羞兮。精瓊靡以爲粮。爲余駕飛龍兮。雜瑤象以爲車。何離心之可同兮。吾將遠逝以自疏。邁吾道夫崑崙兮。路脩遠以周流。揚雲霓之晻藹兮。鳴玉鸞之啾啾。朝發軔於天津兮。夕余至乎西極。鳳皇翼其承旂兮。高翔翔之翼翼。忽吾行此流沙兮。遵赤水而容與。麾蛟龍使梁津兮。詔西皇使涉予。路脩遠以多艱兮。騰衆車使徑待。路不周以左轉兮。指西海以爲期。屯余車其千乘兮。齊玉軑而並馳。駕八龍之婉婉兮。載雲旗之委蛇。抑志而弭節兮。神高馳之邈邈。奏

九歌而舞韶兮、聊假日以娛樂。陟陸皇之赫戲兮、忽臨睨夫舊鄉。僕夫悲余馬懷兮、蜷局顧而不行。亂曰。已矣哉國無人莫我知兮、又何懷乎故都。既莫足與爲美政兮、吾將從彭咸之所居。

九歌(節二)

湘君

君不行兮夷猶。蹇誰留兮中洲。美要眇兮宜修。沛吾乘兮桂舟。令沅湘兮無波。使江水兮安流。望夫君兮未來、吹參差兮誰思。駕飛龍兮北征。遭吾道兮洞庭。薜荔柏兮蕙綢。蓀橈兮蘭旌。望涔陽兮極浦。橫大江兮揚靈。揚靈兮未極。女嬋媛兮爲余太息。橫流涕兮潺湲。隱思君兮陫側。桂櫂兮蘭枻。斲冰兮積雪。采薜荔兮水中。搴芙蓉兮木末。心不同兮媒勞。恩不甚兮輕絕。石瀨兮淺淺。飛龍兮翩翩。交不忠兮怨長。期不信兮告余以不閒。鼉騁鶩兮江皐。夕弭節兮北渚。鳥次兮屋上。水周兮堂下。指余玦兮江中。遺余佩兮醴浦。采芳洲兮杜若。將以遺兮下女。皆不可兮再得。聊逍遙兮容與。

湘夫人

帝子降兮北渚。目眇眇兮愁予。嫋嫋兮秋風。洞庭波兮木葉下。白蘋兮騁望。與佳期兮夕張。鳥萃兮蘋中。罾何爲兮木上。沅有茝兮醴有蘭。思公子兮未敢言。荒忽兮遠望。觀流水兮潺湲。麋何食兮庭中。蛟何爲兮水裔。朝馳余馬兮江皐。夕濟兮西澨。聞佳人兮召予。將騰駕兮偕逝。築室兮水中。葺之兮荷蓋。擗蓀壁兮紫壇。播芳椒兮成堂。桂棟兮蘭橑。辛夷楣兮藥房。罔薜荔兮爲帷。擗蕙櫋兮既張。白玉兮爲鎮。疏石蘭兮爲芳。芷葺兮荷屋。繚之兮杜衡。合百草兮實庭。建芳馨兮廡門。九嶷繽兮並迎。靈之來兮如雲。捐余袂兮江中。遺余褋兮醴浦。搴汀洲兮杜若。將以遺兮遠者。時不可兮驟得。聊逍遙兮容與。

九章(節六)

涉江

余幼好此奇服兮。年既老而不衰。帶長鋏之陸離兮。冠切雲之崔嵬。被明月兮珮寶璐。世溷濁而莫余知兮。吾方高馳而不顧。駕青虬兮驂白螭。吾與重華遊兮瑤之圃。登崑崙兮食玉英。與天地兮同壽。與日月兮同光。哀南夷之莫吾知兮。旦余濟乎江湘。乘鄂渚而反顧兮。欸秋冬之緒風。步余馬兮山皐。邱余車兮方林。乘舲船余上沅兮。齊吳榜以擊汰。船容與而不進兮。淹回水而疑滯。朝發枉陼兮。夕宿辰陽。苟余心其端直兮。雖僻遠之何傷。入溆浦余儃佪兮。迷不知吾所如。深林杳以冥冥兮。猨狖之所居。山峻高以蔽日兮。下幽

晦昌多雨。霰雪紛其無垠兮。雲霏霏而承宇。哀吾生之無樂兮。幽獨處乎山中。吾不能變心而從俗兮。固將愁苦而終窮。接輿髡首兮桑扈臝行。忠不必用兮賢不必以。伍子逢殃兮。比干菹醢。與前世而皆然兮。吾又何怨乎今之人。余將董道而不豫兮。固將重昏而終身。亂曰。懲鳥鳳皇日以遠兮。燕雀烏鵲巢堂壇兮。露申辛夷死林薄兮。腥臊並御芳不得薄兮。陰陽易位時不當兮。懷信佗傺忽乎吾將行兮。

哀郢

皇天之不純命兮。何百姓之震愆。民離散而相失兮。方仲春而東遷。去故鄉而就遠兮。遵江夏以流亡。出國門而軫懷兮。甲之鼂吾以行。發郢都而去閭兮。荒忽其焉極。楫齊揚以容與兮。哀見君而不再得。望長楸而太息兮。涕淫淫其若霰。過夏首而西浮兮。顧龍門而不見。心嬋媛而傷懷兮。眇不知其所蹠。順風波以從流兮。焉洋洋而爲客。凌陽侯之氾濫兮。忽翱翔之焉薄。心絓結而不解兮。思蹇產而不釋。將運舟而下浮兮。上洞庭而下江。去終古之所居兮。今逍遙而來東。羌靈魂之欲歸兮。何須臾而忘反。背夏浦而西思兮。哀故都之日遠。登大墳以遠望兮。聊以舒吾憂心。哀州土之平樂兮。悲江介之遺風。當陵陽之焉至兮。淼南渡之焉如。曾不知夏之爲丘兮。孰兩東門之可蕪。心不怡之長久兮。憂與愁其相接。惟郢路之遠遠兮。江與夏之不可涉。忽若不信兮。至今九年不復。慘鬱鬱而不通兮。蹇侘傺而含慼。外承歡之汋約兮。諶荏弱而難持。忠湛湛而願進兮。妬被離而鄣之。堯舜之抗行兮。瞭杳杳而薄天。衆讒人之嫉妒兮。被以不慈之僞名。憎慍惀之脩美兮。好夫人之忼慨。衆踥蹀而日進兮。美超遠而逾邁。亂曰。曼余目以流觀兮。冀壹反之何時。狐死必首丘。信非吾罪而棄逐兮。何日夜而忘之。

懷沙

滔滔孟夏兮。草木莽莽。傷懷永哀兮。汨徂南土。眴兮杳杳。孔靜幽默。鬱結紆軫兮。離愍而長鞠。撫情効志兮。冤屈而自抑。刓方以爲圜兮。常度未替。易初本迪兮。君子所鄙。章畫志墨兮。前圖未改。內厚質正兮。大人所盛。巧倕不斲兮。孰察其撥正。玄文處幽兮。矇瞍謂之不章。離婁微睇兮。瞽以爲無明。變白以爲黑兮。倒上以爲下。鳳皇在笯兮。雞鶩翔舞。同糅玉石兮。一槩而相量。夫惟黨人鄙固兮。羌不知余之所臧。任重載盛兮。陷滯而不濟。懷瑾握瑜兮。窮不知所示。邑犬之羣吠兮。吠所怪也。非俊疑傑兮。固庸態也。文質疏內兮。衆不知余之異采。材朴委積兮。莫知余之所有。重仁襲義兮。謹厚以爲豐。重華不可遭兮。孰知余之從容。古固有不並兮。豈知其何故。湯禹久遠兮。邈而不可慕。懲連改忿兮。抑心而自

強。離慜而不遷兮。願志之有像。進路北次兮。日昧昧其將暮。舒憂娛哀兮。限之以大故。亂曰。浩浩沅湘。分流汨兮。脩路幽蔽。道遠忽兮。懷質抱情。獨無匹兮。伯樂既沒。驥焉程兮。萬民之生。各有所錯兮。定心廣志。余畏懼兮。曾傷爰哀。永歎喟兮。世溷濁莫吾知。人心不可謂兮。知死不可讓。願勿愛兮。明告君子。吾將以爲類兮。

思美人

思美人兮。擥涕而竚眙。媒絕路阻兮。言不可結而詒。蹇蹇之煩冤兮。陷滯而不發。中且以舒中情兮。志沈菀而莫達。願寄言於浮雲兮。遇豐隆而不將。因歸鳥而致辭兮。羌宿高而難當。高辛之靈盛兮。遭玄鳥而致詒。欲變節以從俗兮。媿易初而屈志。獨歷年而離愍兮。羌馮心猶未化。寧隱閔而壽考兮。何變易之可爲。知前轍之不遂兮。未改此度。車既覆而馬顛兮。蹇獨懷此異路。勒騏驥而更駕兮。造父爲我操之。遷逡次而勿驅兮。聊假日以須眉。指嶓冢之西隈兮。與纁黃以爲期。開春發歲兮。白日出之悠悠。吾將遵志而愉樂兮。遵江夏以娛憂。擥大薄之房芷兮。搴長洲之宿莽。惜吾不及古人兮。吾誰與玩此芳草。解籀薄與雜菜兮。備以爲交佩。佩繽紛以繚轉兮。遂萎絕而離異。吾且儃佪以娛憂兮。觀南人之變態。竊快在中心兮。揚厥憑而不竢。芳與澤其雜糅兮。羌芳華自中出。紛郁郁其遠承兮。滿內而外揚。情與質信可保兮。羌居蔽而聞章。令薛荔以爲理兮。憚舉趾而緣木。因芙蓉而爲媒兮。憚蹇蹇而難思。登高吾不說兮。入下吾不能。固朕形之不服兮。然容與而狐疑。廣遂前畫兮。未改此度也。命則處幽吾將罷兮。願及白日之未暮。獨煢煢而南行兮。思彭咸之故也。

卜居

屈原既放三年不得復見。竭知盡忠。而蔽鄣於讒。心煩慮亂。不知所從。往見太卜鄭詹尹曰。余有所疑。願因先生決之。詹尹乃端策拂龜曰。君將何以教之。屈原曰。吾寧悃悃款款。朴以忠乎。將送往勞來。斯無窮乎。寧誅鋤草茅。以力耕乎。將游大人。以成名乎。寧正言不諱。以危身乎。將從俗富貴。以偷生乎。寧超然高舉。以保眞乎。將哽若粟斯。喔咿儒兒。以事婦人乎。寧廉潔正直。以自淸乎。將突梯滑稽。如脂如韋。以潔楹乎。寧昂昂若千里之駒乎。將汎汎若水中之鳧乎。與波上下。偷以全吾軀乎。寧與騏驥亢軛乎。將隨駑馬之迹乎。寧與黃鵠比翼乎。將與鷄鶩爭食乎。此孰吉孰凶。何去何從。世溷濁而不淸。蟬翼爲重。千鈞爲輕。黃鐘毀棄。瓦釜雷鳴。讒人高張。賢士無名。吁嗟默默兮。誰知吾之廉貞。詹尹乃釋策而謝曰。夫尺有所短。寸有所長。物有所不足。智有所不明。數有所不逮。神有所不通。用君

之心。行君之意。龜策誠不能知事。

漁父

屈原既放。游於江潭。行吟澤畔。顏色憔悴。形容枯槁。漁父見而問之曰。子非三閭大夫與。何故至於斯。屈原曰。舉世皆濁。我獨清。衆人皆醉。我獨醒。是以見放。漁父曰。聖人不凝滯於物。而能與世推移。世人皆濁。何不淈其泥。而揚其波。衆人皆醉。何不餔其糟。而歠其醨。何故深思高舉。自令放爲。屈原曰。吾聞之。新沐者必彈冠。新浴者必振衣。安能以身之察察。受物之汶汶者乎。寧赴湘流。葬於江魚之腹中。安能以皓皓之白。而蒙世俗之塵埃乎。漁父莞爾而笑。鼓枻而去。歌曰。滄浪之水清兮。可以濯吾纓。滄浪之水濁兮。可以濯吾足。遂去不復與言。

第二　周茂叔

周子名は敦頤初の名は敦實。茂叔は其字也。世之を濂溪先生と稱す。太極圖說を作り上孔孟の傳を接き。下二程張朱(周子を併せて有宋の五子と稱す)の統を垂れ。後世義理を言ふ者の祖たり。宋の天禧元年五月五日を以て湖南道州に生る。童時より志趣高遠なり。濂溪あり常に其上に釣る。溪の西に巖あり中靈にして明月の如し好んで其中に遊息す。相傳ふ太極を悟入するの處と。官に仕へて分甯の主簿となり。獄あり久しく決せず。周子至て一訊して立ろに辨ず。邑人驚て曰老吏も如かさる也。太子中書に遷り合州判官たりし時養心說を作る。後永州に改められ歸つて父の墓に展するを得。里中の人と學を言ふ。永道の間其敎に親炙するを得風尙日に起る。この時拙賦を作つて以て志を見めす。南康軍事を知するに及んで母を江州(今の江西九江府)に改め葬り。遂に家を廬山の蓮華峰下に移して致仕す。妻子饘粥繼がすして晏如たり。卒する年五十七。江州德化縣の清泉社に葬る。

周子生平博學力行。道を聞くこと甚だ早し。事に遇ふて剛果政を爲すこと精密。俸祿は盡く以て宗族を賑はし。家に或は百餞の儲無く。襟懷飄灑として高趣あり。尤佳山水を樂しみ。適意の處に遇へば或は徜徉して日を終ふ。廬山の麓に溪あり。源を蓮花峰下に發し。下湓江に合す。因て其故鄉濂溪の名を移して之に名け。書堂を其上に築く。黃庭堅其人品を稱して光風霽月の如しとなす。南安に在りし時年尙少く未だ世人の知る所とならず。時に程珦軍事を通判し。周子の氣象常人に非るを視て。之と與に語り其道を知るに服す。因て友たり善し。二子顥頤をして業を受

けしむ、毎に孔顏の樂處樂む所は何事ぞと尋ねしむ、二程子の學此に源流せり、故に程子言へるあり、一度周茂叔を見てより吟風弄月にも吾は點也に與せんの意ありと、候師聖程頤に學ぶ、未だ悟らず、周子を訪ふ、周子曰く、吾老ふ矣說詳かならざるべからずと、留めて對榻夜談す、三日を越へて乃ち還る、程頤驚き異んで曰く、亦周茂叔より來るにあらずやと、

著す所の易通、太極圖說、六經四子と相發明するに足る、又其愛蓮說は夙に人口に膾炙する處なり、嘉定十三年諡を元公と賜ひ、尋て汝南伯に封せられ、孔子の廟庭に從祀す、元の仁宗の時道國公に封せられ、明の景泰中其十二世の孫晃を官して翰林院五經博士と爲し世襲とす、清朝に及びて先賢周子と稱し、位諸儒の上に在り、周濂溪の名が如何に湖南人士渴仰の標象となりしやは、その生地道州を初め苟くも多少生時に足を留めし地に其名を冠せる祠廟と書院とのあらざるなきを以てその一般を推すに足れり、實に湖南人は周濂溪を出せしを以て無上の名譽として自ら矜り、且自身各その壘を廢せんと企てたりき、之より義理の學其統を斷たず、歷代私淑者を出し、清朝咸同の際に至り蔚然として撥亂反正の大業に從事したる諸豪俊は皆草莽の讀書子にして平生講明せる義理の學を躬行實踐したるにあらざるは莫し、周子の澤も亦偉なりといふべし、

第三　曾國藩

曾國藩は蓋し諸葛武侯以後匹儔なきの人豪にして、其文武兼備り人を識るの明、材を育するの盛、大亂を撥して之を正に反したるの功業の如き、怕らく武侯も亦復數籌を輸せんか、その傳記の如き或は史書に見はれ、或は專傳として世人の熟知せる處なれば茲には只梗概を揭げ、附するに遺文數種を以てし、聊か其道德學術を伺ふに便し、公を欽仰するものと一分の滋味を同ふせんとす、

曾國藩字は滌生、湖南湘鄉の人なり、道光戊戌進士に第し、癸卯試を四川に典とる、乙巳の年禮部の大試に優等を以て禮部右侍郎に累遷す、咸豐の初屢ば正議を以て諫爭する所あり、戇直を以て稱せらる、壬子試を江西に典とり、途次母の訃を聞きて歸る、時に長髮賊廣西に起り、湖南の西境より入り、長沙より洞庭を渡り、武昌を陷れ江に循ふて下り、土匪も亦大に刼掠を肆にす、朝廷命じて團練を治めしむ、國藩乃ち鄉勇を募り號して湘軍と云ふ、三年援を江西に遣して南昌の圍を解く、

時に逆酋洪秀全已に南京に占據し長江の險を扼し、舟師に非んば以て其命を制するなし、乃ち舟を造り、礮を鑄、水師を設立す、明年水陸東下、初め少しく挫け、繼て即ち大に湘潭に捷ち、岳州を復し、武昌に克つ、田家鎮を破り、江に横ふるの鐵鎖を斷ち、勝に乘して九江を圍み、進んで湖口を取らんとす、會ま水師鄱陽湖に陷り鄂督師を喪ひ武昌再び失す、乃ち銳師を悉して馳援ひ、而して自ら師を督して九江を攻む、已にして賊酋石達開等道を分ちて江西を犯し連りに八府五十餘州縣を陷り、官軍文報通ぜず五年國藩移つて南昌に駐し、孤軍拒守す、會ま援軍大に集り軍威復振ふ、七年父の喪を以て家に歸り、八年命を奉じて浙を援ふ、時に江西九江諸郡縣皆湘軍に由りて克復せられ、將さに建昌より浙に入らんとす、九年撫州に駐し攻めて浮梁景德鎮に克ち、旋て四川を援ふの命に接す、未だ行かず又命じて安徽を救はしむ、遂に宿松に駐し太湖に克ち、十年四月欽差大臣を以て兩江を總督し軍務を督辦す、十一年八月安慶に克つ、詔して太子少保を加へ并に江蘇、安徽、江西、浙江四省の軍務を節制せしむ、累疏辭して受けず、同治元年正月元日協辦大學士に拜せられ、是年水陸兩軍大舉して東下す、湘軍は雨花臺に抵り南京を攻め、

翰林以後の國藩

楚軍は衢州に達し浙江を救ひ、淮軍は上海に出て蘇常を取らんとし、而して水師は往來して陸軍の聲援を爲す、三年蘇浙次を以て戡定、六月南京を克復す、詔して太子太保を加へ一等毅勇侯に封せられ世襲となす、是時に當りて江南平定に歸し而して捻匪又熾、會ま科爾沁親王僧格林沁軍に斃し、國藩命を奉じて馳せ馳す、四年徐州に駐し五年濟南に駐し又周家口に駐す、十月命じて兩江に還らしめ、六年體仁閣大學士を授けられ、七年武英殿大學士を授けられ、七月移つて直隸總督となり、朝覲に紫禁城騎馬を許さる、八年二月天津民人耶蘇教徒と難を構ふるや慰解して事遂に息む、九年命を奉じ再び兩江總督となる、吏を飭しめ民を安んじ將を儲へ兵を錬り國を謀ること益す勤む、而して疾作り十一年二月官に卒す、年六十有二、朝廷訃を得て震悼太傅を贈り、特に文正と諡し北京賢良祠に入祀し兩湖兩江及直隸各省皆專祠を建てしむ、

國藩翰林に入りし時より即ち長白の倭良峰、善化の唐鏡海等を師長とし正學を講明し、義利公私の辨に灼然たり、而して自ら治むる甚だ嚴、己れを律し人を律すること必ず廉潔を先にし取與の間一介も苟もせず、其軍を治むるや策を決して進取

危難身に迫つて手卷を釋てず

閑然として獨り神明と契す

孫廣鑾現に都察院に官たり

堅定移らず、生平尤意を人材に留め、其推擧に出づるもの文武皆一時の選にして、或は卒伍より部將に擢き、或は書生より封疆に拔かれ、猛將謀士彬々として其門に出づ軍營の裡危難身に迫つて手卷を釋てず、朝に出でゝ賊を鑒にし、夕に歸て道を講ず、小心寅畏功を讓り名を避け、閑然として獨り神明と契す、

著す所奏議三十二卷、文集八卷、書牘十八卷、詩集二卷、經史百家雜鈔二十六卷、經史百家簡編二卷、鳴原堂論文二卷、批點韓昌黎集四十卷あり、此外其軍中家に寄せたる書牘は集めて十卷となし家書家訓と稱して世に公にせらる、其書篇々句々情に滿ち理に滿ち、清國の讀書子人每に一本を置き座右の銘とせさるは莫し、

國藩父の諱は麟書、妣江氏、祖父諱は玉屏、妃王氏、曾祖父諱は竟希、妣彭氏、竟希家を治めて法あり、國藩兄弟皆戎に從ふ、國華、國葆は難に軍中に殉し、國荃は阿兄と同じく榮爵に膺り兩江總督に任ず、子紀澤一等侯を襲ひ歐州に出使して令名あり早く卒す、孫廣鑾一等侯を襲ひ、現に都察院左副都御史に官たり、

五箴并序（公歳三十二北京にありし時の作）

少不自立、荏苒遂泊今茲、蓋古人學成之年、而吾碌碌尙如斯也、不其戚矣、繼是以往、人事日紛、德慧日損、下流之赴、抑又可知、夫疾疾所以益智、逸豫所以亡身、僕以中才而履安順、將欲刻苦而自振拔、諒哉其難之歟、作五箴以自創云。

立志箴

煌煌先哲、彼不猶人、覩焉小子、亦父母之身、聰明福祿、予我者厚、哉棄天而佚、是及凶災、積悔累千、其終也已、往者不可追、請從今始、荷道以躬、與之以言、一息尙存、永矢弗諼、

居敬箴

天地定位、二五胚胎、鼎焉作配、實曰三才、儼格齋明、以凝女命、女之不莊、伐生戕性、誰人可慢、何事可弛、弛事者無成、慢人者反爾、縱彼不反、亦長吾驕、人則下女、天罰昭昭、

主靜箴

齋宿日觀、天雞一鳴、萬籟俱息、但聞鐘聲、後有毒蛇、前有猛虎、神定不懾、誰敢予侮、豈伊避人、日對三軍、我慮則一、彼紛不紛、馳騖半生、曾不自主、今其老矣、殆擾擾以終古、

謹言箴

巧語悅人、自擾其身、閑言逐日、亦攪女神、解人不誇、誇者不解、道聽塗說、智笑愚駭、駭者終明、謂女實欺、笑者鄙女、雖矢猶疑、尤悔既叢、銘以自攻、銘而復蹈、嗟女既耄、

有恆箴

自吾識字。百歷及茲。二十有八載。則無一知。曩者所忻。閱時而鄙。故者既拋。新者旋徙。德業之不常。曰爲物遷。爾之再食。曾未聞或愆。黍黍之增。久乃盈斗。天君司命。敢告馬走。

日課四條(同治十年金陵署中日記の一節)

一曰愼獨則心安　自修之道。莫難於養心。心既知有善。知有惡。而不能實用其力以爲善去惡。則謂之自欺方寸之自欺與否。蓋他人所不及知。而已獨知之。故大學之誠意章。兩言愼獨。果能好善如好好色。惡惡如惡惡臭。力去人欲以存天理。則大學之所謂自慊。中庸之所謂戒愼恐懼。皆能切實行之。卽曾子之所謂自反而縮。孟子之所謂仰不愧俯不怍。所謂養心莫善於寡欲。皆不外乎是。故能愼獨。則內省不疚。可以對天地質鬼神。斷無行有不慊於心則餒之時。人無一內愧之事。則天君泰然。此心常快足寬平。是人生第一自强之道。第一尋樂之方。守身之先務也。

二曰主敬則身强　敬之一字。孔門持以敎人。春秋士大夫亦常言之。至程朱則千言萬語不離此旨。內而專靜純一。外而整齊嚴肅。敬之工夫也。出門如見大賓。使民如承大祭。敬之氣象也。修己以安百姓。篤恭而天下平。敬之效驗也。程子謂上下一於恭敬。則天地自位萬物自育。氣無不和。四靈畢至。聰明睿智。皆由此出。以此事天養帝。蓋謂敬則無美不備也。吾謂敬字切近之效。尤在能固人肌膚之會筋骸之束。莊敬日强。安肆日偸。皆自然之徵應。雖有衰年病軀。一遇壇廟祭獻之時。戰陣危急之際。亦不覺神爲之悚。氣爲之振。斯足知敬能使人身强矣。若人無衆寡。事無大小。一一恭敬。不敢懈慢。則身體之强健。又何疑乎。

三曰求仁則人悅　凡人之生。皆得天地之理以成性。得天地之氣以成形。我與民物。其大本乃同出一源。若但知私己而不知仁民愛物。是於大本一源之道。已悖而失之矣。至於尊官厚祿。高居人上。則有拯民溺救民飢之責。讀書學古。粗知大義。卽有覺後知覺後覺之責。若但知自了而不知敎養庶彙。是於天之所以厚我者。辜負甚大矣。孔門敎人。莫大於求仁。而其最切者。莫要於欲立立人欲達達人數語。立者自立不懼。如富人百物有餘。不假外求。達者四達不悖。如貴人登高一呼。羣山四應。人孰不欲己立己達。若能推以立人達人。則與物同春矣。後世論求仁者。莫精於張子之西銘。彼其視民胞物與宏濟羣倫。皆事天者。性分當然之事。必如此乃可謂之人。不如此則曰悖德。曰賊誠。如其說。則雖盡立天下之人。盡達天下之人。而曾無善勞之足言。人有不悅而歸之者乎。

四曰習勞則神欽　凡人之情。莫不好逸而惡勞。無論貴賤智愚老少。皆貪於逸而憚於勞。古今之所同也。人一日所著之衣。所進之食。與一日所行之事。所用之力相稱。則旁人疑之。鬼神許之。以爲彼自食其力也。若農夫織婦。終歲勤勤。以成數石之粟。數尺之布。而富貴之家。終歲逸樂。不營一業。而食必珍羞。衣必錦繡。酣寢高眠。一呼百諾。此天下最不平之事。鬼神所不許也。其能久乎。古之聖君賢相。若湯之昧旦丕顯。文王日昃不遑。周公夜以繼日。坐以待旦。蓋無時不以勤勞自勵。無逸一篇推之。於勤則壽考。逸則夭亡。歷歷不爽。爲一身計。則必操習技藝。磨鍊筋骨。困知勉行。操心危慮。而後可以增智慧而長才識。爲天下計。則必已飢已溺。一夫不獲。引爲余辜。大禹之周乘四載。過門不入。墨子之摩頂放踵。以利天下。皆極儉以奉身。而極勤以救民。故荀子好稱大禹墨翟之行。以其勤勞也。軍興以來。每見人有一材一技能耐艱苦者。無不見用於人。見稱於時。其絕無材技。不慣作勞者。皆唾棄於時。飢凍就斃。故勤則壽。逸則夭。勤則有材而見用。逸則無能而見棄。勤則博濟斯民。而神祇欽仰。逸則無補於人。而神鬼不歆。是以君子欲爲人神所憑依。莫大於習勞也。

余衰年多病。目疾日深。萬難挽回。汝及諸姪輩。身體强壯者少。古之君子。修己治家。必能心安身强。而後有振興之象。必使人悅神欽。而後有駢集之祥。今書此四條。老年用自儆惕。以補昔歲之愆。並令二子各自勗勉。每夜以此四條相課。每月終以此四條相稽。仍寄諸姪。共守。以期有成焉。

將赴天津示二子(晚年永訣を期して、紀澤紀鴻二子に示す)

余卽日前赴天津。查辦毆斃洋人焚災教堂一案。外國性情凶悍。津民習氣浮囂。俱難和叶。將來構怨興兵。恐致激成大變。余此行反覆籌思。殊無良策。余自咸豐三年募勇以來。卽自誓效命疆場。今老年病軀。危難之際。斷不肯吝於一死。以自負其初心。恐避近及難。而爾等諸事無所稟承。玆略示一二。以備不虞。余若長逝。靈柩自以由運河搬回江南歸湘爲便。中間雖有臨淸至張秋一節須改陸路。較之全行陸路者差易。去年由海船送來之書籍木器等。過於繁重。斷不可全行帶回。須細心分別去留。可送者分送。可毀者焚毀。其必不可棄者。乃行帶歸。毋貪瑣物而花途費。其在保定自製之木器。全行分送。船送謝絕一切。概不收禮。但水路署求兵勇護送而已。

余歷年奏摺。令夏吏擇要鈔錄。今已鈔一多半。自須全行擇鈔。鈔畢後。存之家中。留於子孫觀覽。不可發刻送人。以其間可存者絕少也。余所作古文。黎尊齋鈔錄頗多。頃渠已照